續國譯漢文大成

文學部　六十二

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部 第六十二册（第十六帙の二）

蘇東坡詩集 四の二

吉田待郎氏 寄贈本

大東亞圖書

309
65

蘇東坡詩集　卷二十七

古今體詩　三十八首

送陳睦知潭州

華清縹緲浮高棟。
上有纈林藏石甕。
一杯此地初識君。
千巖夜上同飛鞚。
君時年少面如玉。
一飲百觚嫌未痛。
白鹿泉頭山月出。
寒光潑眼如流汞。
朝元閣上酒醒時。

陳睦が潭州に知たるを送る

華清縹緲として高棟浮ぶ、
上に纈林あり石甕を藏す、
一杯此地に初めて君を識る、
千巖夜上りて同じく鞚を飛ばす、
君時に年少面玉の如し、
一飲百觚未痛を嫌ふ、
白鹿泉頭に山月出づ、
寒光眼に潑して汞を流すが如し、
朝元閣上酒醒むる時、

【字解】【一】華清　宮名、蜀の驪山に在り、唐の太宗、初め此地に湯泉宮を建つ、時で温泉宮と改む、玄宗に及んで華清と改む、【二】高棟　ムナギ、杜甫の詩に、江圃浮ニ高棟ニとあり、【三】纈林　林名にはあらず、林樹の綺麗なる、衣服の文彩あるに譬ふ、【四】石甕　谷の名にして、又寺の名なり、【五】飛鞚　飛馬と同じ、杜甫の詩、黄門飛レ鞚不レ動レ塵とあり、鞚は馬勒、クツワなり、【六】未痛　大に酒を飲むな、痛飲、劇飲と曰ふ、陳は百觚飲んで

臥聽風鑾鳴鐵鳳。
舊遊空在人何處。
二十三年眞一夢。
我得生還雪髯滿。
君亦老嫌金帶重。
有如社燕與秋鴻。
相逢未穩還相送。
洞庭青草渺無際。
天柱紫蓋森欲動。
湖南萬古一長嗟。
付與騷人發嘲弄。

臥して聽く風鑾鐵鳳鳴るを、
舊遊は空しく在り人は何の處ぞ、
二十三年眞に一夢、
我生還を得るも雪髯滿つ、
君も亦老いて金帶の重きを嫌ふ、
社燕と秋鴻との如きあり、
相逢うて未だ穩かならず還た相送る、
洞庭青草渺として際無し、
天柱紫蓋森として動かんと欲す、
湖南萬古一長嗟、
騷人に付與して嘲弄を發せしむ、

金帶=謂之重金=とあり、官相當の禮裝を謂ふ、【一四】湖南　杜甫の詩に、湖南清絶地、萬古一長嗟とあり、坡公は古人の詩を活用して、往往之を爲す、

【題義】陳睦字は和叔が潭州の知事と爲つて赴くを送る、潭州は古三苗の地、秦は長沙郡を置き、漢は晉國と爲し、隋に潭州と改む、

【詩意】君が今赴任する潭州への行路には種種見るべき景がある、先づ華清宮が縹緲として高棟が天中に浮ぶを見ん、其の上には繡林ありて、繡林の中には石甕寺が藏れてある、昔此地にて君と初對面して一杯の酒を飲んだ、其の折千巖の上に夜同じく鞋を飛ばした、其の時君は年少にして風貌玉の如くであつた、百觚の酒も一飲して猶ほ不足の樣であつた、時に白鹿泉頭には山月が出で、其の寒光が我等の眼を潑して水銀を流すが如きの美麗であつた、其の夜は朝元閣上に醉臥したのである、酒が醒めし時に臥床の中に在つて、屋角に吊してある鳳凰の形を作した鐵製の鑾鈴が鳴る聲を聽いた、其の舊游の跡なる閣も山も水も空しく在るも人は何れの處にか在る、回顧すれば二十三年は一夢の如く過ぎ去つた、幸に我は生還するを得るも、昔の黑髯が今日は白髯と變じ、君も年老いて腰に窮窟なる金帶の重きものを著るを嫌ふ、而かも人事は意の如くならず、今君は再び官吏と爲つて遠くに赴く、譬へば春燕と秋鴻との時を同じうせざるが如くである、相逢うて未だ緩穩ならざるに忽ち還た相送る、君が赴任する途中にて、洞庭湖も青草湖も渺渺として水の際なきを見るであらう、又天柱峯も紫蓋峯も森として動かんと欲するを見るであらう、湖南の地は盛衰興亡の多かりし處にて、唯長嗟するのみならず、萬古の詩人をして嘲弄を發せしむる、

【餘論】紀曉嵐は其の著はせる「蘇詩擇粹」に於て此の詩を評して曰く、窄韻穩押、綽有三餘力一と、特に後半に於て、淋漓飛動、曲折自如と評したるは頗く當る、

も、滿足せりと言はざるなり、【七】白鹿泉　驪山には白鹿觀あり、白鹿泉なし、飲鹿泉の誤ならんかとの說あり、詩として何等の得失なし、【八】潑眼　潑は字の如く、水が湧き出づる貌、【九】流水　水は水銀なり、【一〇】朝元閣　華清宮裏の一閣、老君が天寶七年に此の閣に降下せりと云ふより、玄宗は之を降聖閣と改む、【一一】風鑾　鑾は鈴なり、其の鳳中に在るを以て、之を風鑾と曰ふ、【一二】舊遊　坡公年三十、鳳翔の役人を勸め、長安に赴かんとす、是の時の游を指して言ふ、【一三】金帶重　蘇初白云ふ、歸田錄に、國朝之制、自=學士=以上、賜=

用前韻答西掖諸公見和

前韻を用ひ西掖諸公の和せらるるに答ふ

雙猊蟠礎龍纏棟。
金井轆轤鳴曉甕。
小殿垂簾白玉鉤。
大宛立仗朱絲鞚。
風馭賓天雲雨隔。
孤臣忍淚肝腸痛。
羨君意氣風生座。
落筆縱橫盤走汞。
上尊日日瀉黃封。
賜茗時時開小鳳。
閉門憐我老太元。
給札看君賦雲夢。
金奏不知江海眩。
木瓜屢費瑤瓊重。
豈唯蹇步苦追攀。
已覺侍史疲奔送。
春還宮柳腰支活。
水入御溝鱗甲動。
借君妙語發春容。
顧我風琴不成弄。

【字解】【一】蟠礎　礎は石礎也と注して柱下の石、イシズエを曰ふ、【二】金井　三說あり、古代金人あり、杖を以て地を畫り輒ち井を成すと、虛陵城中に一井あり、中に二色あり、半は青く、半は黃、之を金井と謂ふと、古は瓏を施して、井欄を飾る故に云ふ、詩家の用ふるもの、皆此の最後の說なり、【三】小殿　晉初白曰ふ、卽ち晉思殿なりと、【四】立仗　馬の名、【五】賓天　人間を謝し去つて、天帝の所に賓と爲る、【六】羨君　誰と一人を指すにあらず、諸公を謂ふ、【七】上尊　天子より下賜せらるる酒、【八】黃封　宮中御用の酒の名、【九】小鳳　茗茶の名、【一〇】太元　太玄經を曰ふ、太玄を研究して身の老ゆるを憐む、揚雄と同じく何の功業も成さざるを曰ふ、【一一】給札　天子より支給せらるる筆札なり、【一二】雲夢　潭の名、孟浩然の詩に、氣蒸雲夢澤の句あり、雲夢の如き大澤を賦するの大才なりと敬するなり、【一三】金奏　「周禮」に、鍾師掌金奏とあり、鐘を擊つて以て奏樂の節を爲すを言ふ、【一四】江海眩　「莊子」に、海鳥止於魯郊、魯君奏九夏以樂之、鳥乃眩視憂悲而不敢食肉とあり、【一五】木瓜　詩國風衛に、投我以木瓜、報之以瓊琚、非報也、永以爲好也とあり、【一六】瑤瓊　美玉を曰ふ、「史記孟嘗君傳」に、孟嘗君特客坐語、兩屏風後、常有侍史、記對所與客語とあり、【一七】蹇步　ビッコ、自由に歩する能はざるなり、【一八】侍史　大官にすれば秘書官のこと、普通人にすれば取次役を曰ふ、「史記孟嘗君傳」に、孟嘗君特客坐語、兩屏風後、常有侍史、記對所與客語とあり、【一九】腰支　柳條を指す、杜甫の詩に、隔戶楊柳弱嫋嫋、恰似十五女兒腰とあり、【二〇】鱗甲　魚族を指す、【二一】春容　從容と同じ、「禮」に、待其從容、然後盡其辭とあり、おちつきて迫らざるなり、

【題義】前韻去聲の一送を用ひて、西掖に勤務する翰林知制誥の諸公が和せられたるを以て、乃ち此の答禮の和詩を作つたものである、

【詩意】宮闕の建築たる石礎は雙猊の蟠る像を作り、屋棟は龍の纏ひ遶る像を作る、金井の水を汲む

轆轤の聲は曉甕に鳴り響くを聞く、而して小殿に垂るる簾は白玉の鉤を以てし、大宛より獻せし立仗は朱色の絲を以て粽を縛る、皇帝は風馭して天上の賓客と化し、雲雨此の世と隔絶する、孤臣卽ち蘇軾は淚を忍んで肝腸の痛むを覺ゆ、羨むべきことは、諸君の意氣談論風を座に生ずるのみならず、字を書すれば縱橫にして槃に汞を走らすが如き勢である、其の上に恩賜の黃封の美酒や、又恩賜の小鳳の精茶を飲んで居られる、我輩は憐むべき閉門して徒らに太玄を讀むの失意である、諸公は筆札を給せられて雲夢を賦するの得意である、我輩より呈する詩は木瓜の如き微物であるのに、和して賜はる詩は皆瑤瓊の如く重き物である、我輩は要するに蹇歩の人、到底追和するの力無きに苦む、且已に侍史が相互の使と爲つて奔送するに疲るるであらう、春は宮柳に還り來りて其の新條も活きたるを知る、水も御溝に入るを以て鱗甲も皆生動する、是に於て君が賜はる妙語を誦して我が春容の思を發する、我が床の風琴を顧みて彈弄する氣が起らず、

【餘論】紀曉嵐は此の詩を評して曰く、無所取義、却說得精采、此種純以筆力勝、不以性情勝矣と、風馭賓天の二句の如きは、是れ性情にあらずや、紀評を讀む者、留意せずんば或は彼に欺かるることもある、要するに此の篇は我と諸公と同調ならずと云ふの意を見る、乃ち我は忍淚肝腸痛むの際、諸公は意氣風座に生ずるのみならず、上尊や賜茗にて愉快を送る、一篇の章法として、後生の圭臬と爲るや否やを、余輩は疑ふものである、

次韻王觀正言喜雪

聖人與天通。有詔寬獄市。
好語夜喧街。溼雲朝覆砌。
紛然退朝後。色映宮槐媚。
欲詩剪刻工。故上朱藍袂。
我方執筆侍。未敢書上瑞。
君猶伏閤爭。高論亦少慰。
霏霏止還作。盎盎風與氣。
神龍久潛伏。一怒勢必倍。
行當見三白。拜舞讙萬歲。
歸來飲君家。酣詠追既醉。

王觀正言が雪を喜ぶに次韻す

聖人は天と通ず、詔あり獄市を寬うす、
好語夜街に喧しく、溼雲朝に砌を覆ふ、
紛然たる退朝の後、色は宮槐に映じて媚、
剪刻の工に誇らんと欲す、故に朱藍の袂に上る、
我方に筆を執つて侍す、未だ敢て書して瑞を上らず、
君猶ほ閤に伏して爭ふ、高論亦少しく慰す、
霏霏止まりて還た作る、盎盎風と氣と、
神龍久しく潛伏す、一怒すれば勢必ず倍す、
行くゆく當に三白を見、拜舞して萬歲を讙ぶべし、
歸來君が家に飲み、酣詠して既醉を追はん、

【字解】〔一〕聖人　人格最高者の稱、文王や周公や孔子は皆聖人と稱す、唐以來天子を稱す、今は哲宗を指す、〔二〕與天通　一國の天子の德と、天帝の德とは相通ずるなり、〔三〕寬獄市　哲宗の元祐元年正月に詔を降し、死罪以下皆一等を減じ、杖罪者は之を釋す、〔四〕喧街　懷素が街上に喧傳する、杜甫の詩に、近聞下詔喧都邑とあり、〔五〕溼雲　雨氣を帶びたる雲、唐の崔櫓の詩

に、紅葉下レ山寂寂涼、澄霧如レ夢雨如レ塵とあり、【八】 紛紛　雪が紛紛然と落下し来るを曰ふ、【九】 剪刻工　飛雪の美麗なるを曰ふ、【八】 朱藍袂　高官の著する朱衣や藍袍の袂袖に雪が上るなり、宋書に、大明五年正月朔、朝賀雪落、宰相以奏爲レ瑞、上　說、とあり、【九】 執筆侍　坡公此の時、起居舍人の職を兼ず、【一〇】 伏闕爭　王覿は官正言たり、崩薨の害を論じて、闕下に伏奏して爭ふ、【一一】 高論　王十朋曰く、唐の長安、一木、久觀に作る、二年三月大雨レ雪、蘇味道等、以て瑞と爲し、羣臣を率ゐ入つて賀す、王求禮、諫めて曰く、宰相陰陽を燮和す、而かも季春雪を雨らすは災なり、果して以て瑞と爲さば、冬月の雷も、遂に瑞雷と爲んか、味道從はず、賀者既に入る、求禮言ふ、今主蔓み臣侯、憲章序を失し、或秋華を雕す、天をして瑞あらしめば、何に感じて來るや、武后爲に朝を罷む、【一二】 紛紛　盛んにあふれる貌、【一三】 三白　「陶朱公書」に、臘前得二兩三番雪一、謂二之臘前三白一と、「朝野僉載」に、要宜レ麥、見二三白一とある、兩三回雪の降ること、【一四】 既醉　毛詩に、既醉既飽、既醉太平等の句處處に在り、

【詩意】 聖人の恩德は天道と通同するを知る、罪人を赦すの詔を下し玉ふや、喜び語るの聲が街頭に喧傳する程である、一朝忽ちに溼雲の階砌を覆ふを見る、既にして紛紛然と雪が來るや羣臣が退朝せんとする時である、其の雪の玲瓏たる色は官槐に映じて媚ぶるが如くである、而して剪刻の工妙なるを誇らんと欲する樣である、是の故に故らに朱藍の袂袖に上るが如くである、時に我も起居舍人なる役を以て禁中の書記官である、されど未だ古人の如く瑞を奏する書狀は上らざるに、君は正義を持して閣下に論爭すると聞く、高論ありしと聞くからにも、我が心を少しく慰むるに足る、已に雪は霏霏として止み、止むと思ふ間に還た起る、蓋蓋然と吹き來る風と寒氣は厲し、神龍も寒に遇うては潛伏して居るが、一怒するときは太だ猛烈なる勢である、段段と必ず豐年の瑞兆と稱せらるる三白を見、拜舞して聖天子の萬歲を讙呼するに至るならん、我は歸來後君が家に赴き、君と共に酣詠して、古の既醉を追想せんと思ふのである、

【餘論】 紀曉嵐の評に、後半純寫二時事一、蓋其時局漸改、而勢未レ定、洶洶然り、雪に托して時局の紛然たるを言ふ、曰く紛然、曰く閣爭、曰く神龍、曰く一怒、曰く萬歲、單に雪を詠ずるには無用の文字ならずや、此等の詩を味うて以て坡公が眞面目を見るべきか、此篇の編次に就て、王文誥は答二西掖諸公見一和詩の後に置く可きものにあらず、施本、馮本皆誤まると論ず、年序を追うて論ずれば、王文誥說是ならんも、必ずしも年序を追うて編するの一法なるのみならざれば、余は孰れにても可ならんと思ふ、紀曉嵐の擇粹にも答二西掖諸公見一和詩の後に此の篇を載せてある、

和蔣發運

夜語翻千偈。書來又一言。
此身眞佛祖。何處不羲軒。
船穩江吹坐。樓空月入尊。
遙知思我處。醉墨頹垣在。

蔣發運に和す

夜語千偈を翻し、書し來りて又一言、
此の身眞の佛祖、何の處か羲軒ならざらん、
船穩かにして江坐を吹き、樓空しうして月尊に入る、
遙に知る我を思ふ處、醉墨頹垣に在るを、

【字解】 【一】 翻千偈　梵本を翻譯して、或は四字、或は五字、或は六字と綴り、散文にあらざるものを、之を偈と曰ふ、一偈は即ち一絕句と心得て可、然れども、今は翻譯にはあらで、翻讀の意味に見るべし、【二】 佛祖　釋迦と達磨、【三】 羲軒　羲皇と軒轅、

【題義】蔣發運、名は之奇、字は穎叔、宜興の人、神宗の朝、江淮發運使と爲り、江中財貨の運漕を管督す、詩を寄せ來るを以て坡公之に和して作る、

【詩意】一夜我と君と晤語の際は、千偈を翻讀せりと君が言ふ事を聞いた、然るに今書を投じ來りて一言せらる、此の身は已に是れ眞の佛祖である、我の外に佛祖が在るのではない、其と同じく、到處に羲皇、到處に軒轅氏である、船は常に平穩にして江風は徐に坐を吹き、樓は恆に空闊にして月影が靜に檐に入る、遙に察知するに君が我を思うて居らるる處、醉墨が頹垣に在るであらう、

【餘論】此の篇は尋常の詩にあらざるが故に、諸の選本皆取らず、紀曉嵐の擇粹にも收めず、要するに公が佛を學んで其の得力を示すに過ぎざるもの、夜語の十字、結末の十字、醉客の醉語に類せずやと思ふ、體の律なるは明かに知る、

送表弟程六知楚州

表弟程六の楚州に知たるを送る

炯炯明珠照雙璧。
當年三老蘇程石。
里人下道避鳩杖。
刺史迎門倒鳧舄。
我時與子皆兒童。
狂走從人覓梨栗。
健如黃犢不可恃。
隙過白駒那暇惜。
醴泉寺古垂橘柚。
石頭山高暗松櫟。
諸孫相逢萬里外。
一笑未解千憂集。
子方得郡古山陽。
老手生風謝刀筆。
我正含毫紫微閣。
病眼昏花困書檄。
莫教印綬繫餘年。
去掃墳墓當有日。

【字解】〔一〕炯炯　光明の貌、〔二〕照雙璧　程六卽ち子元字は穎叔と、其の弟の子郎字は鄧叔の二人を指す、〔三〕蘇程石　坡公が祖の蘇宮傅と程六が祖の程文應と石揚言の三老を言ふ、或は曰ふ、蘇老泉と程某と石昌言ならんと、未詳、〔四〕鳩杖　漢の制、仲秋の月、年始めて七十の者、之に授くるに玉杖を以てし、杖端に鳩鳥を以て飾りと爲す、鳩は噎ばざる鳥、老人を喰ばざらしむるなり、〔五〕倒鳧舄　仙人や高士の脚に穿つもの皆鳧舄と曰ふ、登逐之を迎ふる狀を言ふ、〔六〕健如　杜甫の詩に、健如黃犢走復來とあり、〔七〕隙過　「莊子」の知北游に、人生天地之間、若白駒之過隙とあり、白き駒が壁隙を過ぐる若きを言ふ、〔八〕醴泉寺　眉州に在り、〔九〕石頭山　石佛山の誤寫、眉州に在り、今日の四川省眉州縣、〔一〇〕古山陽　楚州は淮南道東路にて、西漢時代は山陽郡と稱す、〔一一〕刀筆　一簡、一牘に誤謬たること、小役人を言ふ、〔一二〕紫微閣　坡公は中書舍人の職を奉じて此に在り、〔一三〕

功成頭白早歸來。　功成つて頭白早く歸來し、
共藉梨花作寒食。　共に梨花に藉りて寒食を作さん、

一百五日に當る節を寒食と曰ふ、是の日火食を禁ず、晉の忠臣介子推が焚死せし日なるを以て、後人哀んで之を爲すと云ふ、

【題義】　程六は程子元、卽ち坡公に於て表弟に當る、坡公が母は程氏なり、程家の第六子なれば程六と稱す、今楚州に知事と爲つて行くを送る、

【詩意】　程家には今日炯炯明明たる珠璧が二箇ある、當年は其親屬關係として蘇程石の三老は特に世に貴ばれし人である、其の三人の中、誰でも道を行くときは、行人が道を讓りて敬避したものである、又一縣の刺史でも、此の三老が訪問する場合の如きは、鳧舄を倒にしてまで懽迎せしものである、其の時代は我も子も、共に兒童として游び三昧、狂走して唯人に從つて梨や栗を覓むるのみ、而かも壯健なる黃犢の如きも、或は死し或は老い恃むべからず、白駒は堂堂と隙を過ぎ、人の爲に決して時間を長くしては呉れない、兒童の時游びし地の醴泉寺も、今日では古刹と爲つて、橘や柚が實を垂れ、石佛山は高く當時見し松も櫟も陰の暗くなる程老いた、依然たるものは本處に依然として人は我も子も皆萬里の外にて相逢ふの境遇である、相逢うて一笑するのみ、何ぞ曾て千憂の集來することを解せんや、子は今方に楚州を料理する役と成り、老手に風を生ずる意氣にて刀筆吏の區區たるを謝脫する、我は正しく毫を含んで紫微閣に勤務する人である、所が眼を病んで檄文を艸する役は困しい、いつまでも三位だの四位だのと云ふ印綬の爲め餘年を繫がるるに忍び得ない、官を罷め去つて鄕に歸り祖先の墳墓を掃除する日も近きにあらんと思ふのである、君も功成り名遂げなば、一刻も早く歸來して、二人にて共に梨花に對藉して寒食の節を作さんや否や、

【餘論】　此の篇を以て、和蔣發運一詩の五律に比較すれば、別人の手に出づるの感あり、晚嵐評して層次井然、有情文相生之樂、又曰く、瀠洄起處作レ結、章法完密と、老泉が送石昌言一引に、與二羣兒一戲二先府君側一、昌言從レ旁取二棗栗一啖レ我の語あり、此の篇の五六二句は全く父の文より得來る法、後生坡公が詩の本領を知らんと欲する者は、宜しく此の篇を三讀すべきである、

碣石菴戲贈湛菴主

保康橋上夜觀燈。　保康橋上夜燈を觀る、
碣石巖前夏飲冰。　碣石巖前夏冰を飲む、
莫把山林笑朝市。　山林を把つて朝市を笑ふこと莫れ、
老夫手裏有烏藤。　老夫手裏に烏藤あり、

【題義】　坡公の自注に、湛相國寺僧也とあれば、相國寺の維那とか、知客とか、典座とかの役を務め、病眼　醫藥師に病眼空華とあり、眼前がチラチラして宇體の分明ならざるを曰ふ、【一四】寒食　冬至より

【字解】【一】保康橋　汴京の蔡河に架せる橋、【二】夏飲冰　「莊子人間世篇」に、葉公子高、問二于仲尼一曰、吾食也、執二粗而不レ精、臨二無一欲レ清之人一、吾朝受レ命、而夕飲レ氷、我其內熱與とあり、【三】烏藤　杖の異名、

寺主にはあらず、碣石菴を以て、其の住菴と定めしならん、

【詩意】保康橋上繁華の處に於て夜觀燈する者は我である、碣石巖前の寂靜なる處に於て夏氷を飲む者は菴主である、其の寂靜なる山林の清を把つて朝市の熱に奔る者を笑うては不可ぬ、若し笑ふに於ては老夫は空拳ではない、手裏に烏藤を持つて居るぞ、

【餘論】此篇は、意義を種種に取ることが出來るが、余は前意を以て解したのである、題已に戲とあり、禪林にて重器として用ふる拄杖の活用を試みられたものと思ふ、烏藤を以て詩に用ふるは、坡公を以て初めと爲す、

元祐元年二月八日朝退獨在起居院讀漢書儒林傳感申公故事作小詩一絕

元祐元年二月八日朝より退き、獨り起居院に在り、漢書儒林傳を讀み、申公が故事に感じ、小詩一絕を作る

寂寞申公謝客時。　寂寞として申公客を謝する時、
自言已見穆生機。　自ら言ふ已に穆生の機を見ると、
綰臧下吏明堂廢。　綰臧吏に下りて明堂廢す、

【字解】【一】申公　魯の人、楚の元王と與に、齊人浮丘伯に事へて詩を受く、元王は其の子の郢を以て浮丘伯に學ばしむ、元王薨じて、郢立ちて楚王と爲る、其の子の戊をして申公に師事せしむ、戊學を好まず、

又作龍鍾病免歸。　又龍鍾を作し病免せられて歸る、

申公を病む、戊立ちて王と爲るや、申公を斥歸す、（斥は相、歸は繫、鐵鎖にて相繫ぐなり）申公之を恥ぢ、魯に歸り退居し家に教ふ、終身門を出でず、復た賓客を謝す、受業弟子以外は相見せず、獨王命之を召せば廼ち往く、【二】穆生　元王は申公と穆生を敬禮す、穆生酒を嗜まず、元王穆生の爲に醴を設く、戊が王と爲るや、或は設けず、穆生退いて曰く、以て逝るべきなり、去らずんば、楚人將に我を市に鬻せんとす、遂に病を謝して去る、【三】綰臧　趙綰と王臧との二人、共に申公の門人にして、漢の武帝に事ふ、【四】下吏　過を責く吏に二人の身分を引渡すこと、【五】明堂廢　明堂の立つや、綰臧二人が武帝に進言して、申公をして其の指揮を爲さしむ、然るに竇太后、老子の言を喜び、儒術を說ばず、乃ち明堂の事を廢し、而して綰臧は自殺す、【六】龍鍾　老いて疲れ病むの貌、

【題義】哲宗の元祐元年二月八日に朝廷より退出して、起居院に獨在し、前漢書の儒林傳中の申公の故事を讀んで、士の出處進退に就いて感ずる所あり、乃ち此の七言絕句を作つたものである、二月には司馬溫公が相と爲り、青苗法や、免役法の廢せらるる等の事あり、漢の古を想はざるを得ず、公年五十一で、中書舍人に除せられし年である、

【詩意】寂寞として申公は客を謝し、門を閉ぢ徒に敎へし時、常に自ら言ふ、穆生は機を見るの才ありと、然るに己は如何と言ふに、綰や臧が吏に下さるる樣な恥を受け、明堂は廢せらるる樣な始末、一身は龍鍾と作つて病と稱して辭免して歸る、人を見るの明ありて、己を見るの明無し、

【餘論】申公は官に戀戀し、穆生は官に戀戀たらず、申公は恥を受け、穆生は恥を受けず、余は日本の昭和二年台閣の倒と、昭和四年台閣の倒とを見て、大に此の感を深くしたのである、紀曉嵐云ふ、

借レ題抒レ意、東坡此時、已有レ不レ安二其位一之勢上矣、

和二人假山一

上黨攙天碧玉環。
絶河千里抱二商顔一。
試觀煙雨三峯外。
都在二靈仙一掌間一。
造物何如童子戲。
寫眞聊發使君閒。
何當挈取西征去。
畫作二園牀六曲山一。

【字解】【一】上黨　山の名、一名太行山、「括地志」に、太行連二亘河北諸州一、凡數千里、始二於懷一、而終二於幽一、爲二天下之脊一とあり、【二】攙　刺後、山高く天を刺すが如し、【三】商顔　山の名、太行山は衆山の總名にて、其の小なるもの即ち商顔の類なり、【四】三峯　太華の三峯、即ち蓮華峯と、松檜峯と、毛女峯なり、【五】靈仙　華山は古、河神巨靈、手を以て其の上を擘開し、足を以て其の下を踏離し、以て河水を通ぜしむ、故に之を仙掌峯と稱す、【六】何如　執與と同義、此と彼とどちらがと云ふ義に使用する、【七】童子戲　法華經に、乃至童子戲、聚レ沙爲二佛塔一とあり、【八】使君　東坡を指す、【九】園牀　屏風を曰ふ、

【題義】人の假山を詠じたるものを和する、

【詩意】上黨山は天を攙す如くに高く且碧玉環の如き翠色を呈する、而して河の絶する千里の間に商顔山を抱くの狀を作す、試みに觀玉へ煙雨の懸る三峯の外を、都て盡く靈仙が一掌の間に在るを知る、造物主の戲れと童子の戲れと何如が勝る、假山ではあるが其の眞山を寫し出して我の閒興を發せしむ、何の日か當に挈げ取りて西征し去りて、畫を作りて以て六曲の屏風と作すことを得るや、

【餘論】此の篇を卒讀すれば、絶句二首なるが如く、再讀して律體なるを知る、唐の鄭谷の峨眉咫尺無二人去一、却向二僧窗一看二假山一、是れ大に僧を諷したるもの、今此の詩は別に諷喩することは無いのである、

送二王伯敭守一虢

王伯敭が虢に守たるを送る

華山東麓秦遺民。
當時依レ山來避レ秦。
至レ今風俗含二古意一。
柔桑綠水招二行人一。
行人掉レ臂不レ回レ首。
爭入崤函土囊口。

華山の東麓秦の遺民、
當時山に依り來つて秦を避く、
今に至りて風俗古意を含む、
柔桑綠水行人を招く、
行人臂を掉つて首を回らさず、
爭ひ入る崤函土囊の口、

【字解】【一】華山　大華山と小華山とあり、今の陝西省關中道に當る、宋の楊文公が談苑に云ふ、華山南有レ川、廣袤數百里、連山洞壑、不レ知二其極一、人有レ登二蓮花峯絶頂一、俯二瞰人物一、舍屋相望、四時常有二花木一、疑二靈仙之宮宅一とあり、【二】東麓　楊文公は南と曰ひ、此の詩、東と曰

惟有使君千里來。
欲飲三堂無事酒。
三堂本來一事無。
日長睡起聞投壺。
牀頭硯石開雲月。
澗底松根斸雪腴。
山棚盜散人安寢。
勸買耕牛發陳廩。
歸來只作水衡卿。
我欲攜壺就君飲。

惟使君の千里より來るあり、
飲まんと欲す三堂無事の酒、
三堂本來一事無く、
日長くして睡起投壺を聞く、
牀頭の硯石雲月を開き、
澗底の松根雪腴を斸る、
山棚盜散じて人安寢し、
耕牛を勸め買うて陳廩を發く、
歸來只水衡卿と作る、
我壺を攜へて君に就て飲まんと欲す、

無事なる所以、【八】投壺　後漢書祭遵傳に、遵爲二將軍一取レ士、皆用二儒術一、對レ酒設レ樂、必雅歌投壺とあり、壺中に矢を投入する游戯である、【九】硯石　越州より出づる月石硯は天下の珍なりと、【一〇】斸雪腴　斸は字書チョク、斫るなり、雪腴は茯苓の美なるを曰ふ、茯苓は松根に寄生する菌類なり、【一一】山棚　今日の所謂馬賊の類、居民團結して盜を爲す者、舊唐書憲宗紀に、山棚の名出づ、【一二】耕牛　本集第九卷に、山郭五絶あり、其の中の句に、布穀何勞也勸レ耕と同意なり、【一三】水衡　官名、前漢の鄭遂は渤海太守たりし時、官庫蓄積せる財累を發きて、以て郡民を賑はし、年老いて上官に進まず、自ら下官たる水衡都尉と爲る、【一四】攜壺　杜牧之の句に、與レ客攜レ壺上二翠微一とあり、

ふ、山大なれば南にも東にも亙るなちん、【三】避秦　晉の陶潛明の桃花源記に、郡中人自云、先世避二秦亂一來レ此、不二復出一焉とある、【四】崤函　二崤と函關とを曰ふ、二崤山は、一名嶤嶤山、東崤より西崤に至る、此の間三十五里、河南の永寧縣に在り、函谷關は、新安縣の東に在るは漢關にて、陝州靈寶縣南に在るは秦關なり、【五】土囊口　宋玉が風賦に、盛怒於土囊之口とあり、李善曰く、土囊大穴也と、【六】三壺　幾州に在り、唐の岐王と薛王とが刺史たりし時、遊つる所、【七】無事酒　政正しければ、州治まる、

【詩意】君が今赴任する土地の歴史を君が爲に說かんに、華山の東麓には秦の遺民が秦の亂を避けて逃れ來り、其の子孫は今猶ほ此に在る、風俗も漢俗と接せざる故に依然秦の風俗をして居る、柔桑や綠水が流出して行人を招くが如くなるも、行人は別に仙境あるを知らざれば一人として首を回らす者は無い、人人爭うて崤函土囊の口に入り去る、唯獨り使君は千里より遠しとせずして、此の地方の幾州に來る、來りて知事の官舍に於て無事の酒を飲まんと欲す、已に爭を訴へ來る者なきの官舍、本來一事も無い、日長き時は睡り、睡が覺めし時は官舍にて投壺の游戯を試むる人の聲を聞く、牀頭に置く所の硯は、所謂天下の珍硯である、時に澗底に下りて松根の茯苓を斸つて食ふ、良政の下には山棚なぞの徘徊することは無い、人民は盡く安寢して居る、少壯の者には牛を買うて農事に勤勞せしめ、蜂寡には陳廩を發きて施し、任滿ちて來る時は官吏成金と爲らず、古の淸廉潔白なる水衡卿の如くなれ、我も亦壺を攜へて往き、君に就いて無事の飲を求めんと欲するのである、

【餘論】此の篇は「蘇詩擇粹」に採錄無し、紀は蘇詩として粹にあらずと考へたるものか、四度換韻して作り、古は淵明一人あり、今日は王伯敭一人あり、善く此の如き僻境の勝を知るとの作者の意を察すれば、粹中の粹として余は深く此の篇を喜ぶものである、

道者院池上作

道者院池上の作

下馬逢佳客。攜壺傍小池。　馬より下りて佳客に逢ひ、壺を攜へて小池に傍ふ、
清風亂荷葉。細雨出魚兒。　清風荷葉亂れ、細雨魚兒出づ、
井好能冰齒。茶甘不上眉。　井は好しく能く齒を冰しうし、茶は甘く眉に上らず、
歸途更蕭瑟。眞個解催詩。　歸途更に蕭瑟、眞個に催詩を解す、

【字解】〔一〕下馬　王維の詩に、「下馬飲君酒」とあり、〔二〕佳客　杜甫の詩に、「佳客適萬里」とあり、〔三〕不上眉　茶苦きものを飲めば眉の上に蹙をよせる、〔四〕眞個　和語のホントと云ふ義、

【題義】鄭州門外五里の地に在る寺を道者院と曰ふ、院中の池に對して歌うたものである、

【詩意】寺門の前で馬より下りて偶ま佳客に逢ふ、二人して壺を攜へて小池の傍にて飲む、清風は細細として荷葉を吹亂する、細雨は霏霏として魚兒は水面に浮び出る、井戸の水は清冽なれば能く齒を冰しくする、水が好ければ茶も亦甘くして眉を蹙めることは無い、歸るに臨んで風は更に蕭瑟と吹く、此の風は我に詩を作れと催促することと思ふ、

【餘論】杜甫の詩に、細雨魚兒出、微風燕子斜とあり、前句は池上の景、後句は地上の景、律として是を眞法と爲す、然るに今杜甫の句を用ひながら、前句も後句も共に池上の景、池を主とするより已むを得ざるものか、紀曉嵐曰く、風雨二字、已隔二一聯一、蕭瑟催詩、俱嫌二無著一、坡公の意を得たるや否や、

次韻子由送千之姪

子由が千之姪を送るに次韻す

江上松楠深復深。　江上の松楠深くして復た深し、
滿山風雨作龍吟。　滿山の風雨龍吟を作す、
年來老幹都生菌。　年來老幹都て菌を生じ、
下有孫枝欲出林。　下に孫枝の林を出でんと欲する有り、
白髮未成歸隱計。　白髮未だ成さず歸隱の計、
青衫儻有濟時心。　青衫儻くも濟時の心有り、
閉門試草三千牘。　門を閉ぢ草を試む三千牘、
仄席求人少似今。　席を仄て人を求むるも今の似きは少なり、

【字解】〔一〕生菌　菌はキノコ、松蕈なり、今は黴菌などと用ふるが故に、特に知る要がある、〔二〕孫枝　王註編が曰く、凡木皆本實而末虛、唯桐反之、故琴貴二孫枝一とあり、〔三〕濟時心　杜甫の詩、豈無二濟時策一、終竟長二蹉跎一とあり、淵明の詩に、豈無二濟時策一、君門乏二良媒一とあり、〔四〕三千牘　「史記滑稽傳」に、東方朔、初入二長安一、至二公車一上書、凡用二三千牘一とあり、〔五〕仄席　仄は側と同じ、「後漢書逸民傳」に、光武側レ席、幽人求レ之若レ不レ及とあり、「後漢書章帝紀」に、建初五年詔曰、駿思レ遲二直士一仄レ席とあり、「文選」に、羊叔子讓開府表に、側レ席求レ賢、不レ遺二幽賤一とあり、

【題義】子由が其の姪に當る千之が官を以て西歸するを送る詩に次韻したるもの、子由の詩は、京洛

東游歳月深、相逢初喜解二徴吟一、夢中助レ我生二池草一、別後同レ誰飲二竹林一、文字承レ家憐二汝在一、風流似レ舅慰二人心一、便將二格律一傳二諸弟一、王謝諸人無二古今一、

【詩意】江上の松も楠も共に陰が深く、滿山の風雨が來るときは龍吟の聲を作すが如くである、幾年を經來る所の老幹は都て菌子を生む、其の下に在る孫枝は幾んど親樹より上頭に出づる勢がある、我は已に白髮なるも、未だ歸隱の計畫をしない、汝は奇衫なるも俺は天下を救はうと云ふ心を有す、門を閉ぢ人の入るを禁じ、草藁を試むること三千牘、席を側てて人を求むる古は然らんも、今日は野に遺賢なければ其の心配は不要なりと云ふのである、

【餘論】紀曉嵐、此の篇を評して曰く、前四句一氣相承、純作二比體一、於二古體一常格、於二近體一爲二新調一と、紀評の如く蘇氏の家と蒲氏が家との繁榮を敍するに、松楠、孫枝等の語に托して之を言ふ、比體作法は明白なり、然りと雖も之を絶句と爲すときは何等の味も無く、後半あるを以て律格の體と爲る、紀は前半を批圈して後半に及ばず、一家の見として然らんも、果して坡公を服させるや否や、有の字二字あるは失體である、

書二文與可墨竹一　文與可が墨竹に書す

亡友文與可有二四絶一。詩一。楚辭二、草書三、畫四。與可嘗云。世無二知レ我者一。惟子瞻一見識二吾妙處一。既沒七年。覩二其遺跡一。而作二是詩一。

【訓讀】亡友文與可四絶あり、詩一、楚辭二、草書三、畫四、與可嘗て云ふ、世に我を知る者なし、惟子瞻一見して吾が妙處を識ると、既に沒して七年、其の遺跡を覩、而して是の詩を作る、

筆與レ子皆逝。詩今誰爲レ新。　筆と子と皆逝く、詩今誰か新を爲す、
空遺二運斤質一。却弔二斷絃人一。　空しく運斤の質を遺して、却つて斷絃の人をして弔せしむ、

【字解】【一】運斤質　「莊子徐無鬼篇」に、郢人堊、漫二其鼻端一、若二蠅翼一、使二匠石斲一之、匠石運レ斤成レ風、聽而斲レ之とあり、乃ち斤を揮ひ、妙技を示すを曰ふ、【二】斷絃人　「呂氏春秋」に、鍾子期死、伯牙破レ琴絶レ絃、終身不二復鼓一琴、以爲二世無二知音者一とあり、

【題義】文與可が畫く墨竹に題讃せるなり、

【詩意】筆は子の逝くと俱に逝き、天下に復た新詩を書する人無し、唯空しく運斤巨匠の名筆を遺してあるが爲め、却つて斷絃の人たる我をして讃を作らしむ、

【餘論】僅僅二十字にて、復た是れ巨匠の運斤、他の千言萬語に勝る、莊子は惠子死して、天下に知己無きを悲み、伯牙は鍾子期死して、復た知音無く、坡公は與可死して、復た莊子や伯牙と其の悲みを同じうすとの意、

次韻錢舍人病起

錢舍人が病より起つに次韻す

牀下龜寒且耐支。
杯中蛇去未應衰。
殿門明日逢王傅。
欄具爭先看不疑。
坐覺香煙攜袖少。
獨愁花影上廊遲。
何妨一笑千疴散。
絕勝倉公飲上池。

牀下に龜寒且支ふるに耐へたり、
杯中蛇去る未だ應に衰ふべからず、
殿門明日王傅に逢ひ、
欄具先を爭ひ不疑を看る、
坐ら覺ゆ香煙を袖に攜ふるの少なるを、
獨愁ふ花影の廊に上る遲きを、
何ぞ妨げん一笑千疴散じ、
絕だ勝る倉公が上池に飲むに、

【字解】〔一〕牀下龜寒　「史記龜策傳」に、南方老人、用レ龜支二牀足一、二十餘年、老人死移レ牀、龜尚生、龜能行レ氣導引也とあり、白樂天の詩に、春朝鎖二龜鳥一、冬夜支二龜牀一とあり、〔二〕杯中蛇　後漢の費、應彬は杜宣と會飲す、其の時壁上に赤弩を懸く、杯中に映じて形蛇の如し、杜宣之を飲み、忽ち腹痛を感ず、蛇腹中に入ると思へばなり、既にして壁上を見れば懸弩あり、良久しくて故處に於て酒を設く、蛇影依然たり、宣遂に解し、是に於て癒平とある、〔三〕殿門　宮殿の御門なり、〔四〕王傅　漢の賈誼は梁王の傅と爲る、今錢を招すならん、共に中書舍人の官なればなり、〔五〕欄具　劍首の鐔鐶を曰ふ、劍の頭を玉を以て飾り、其の上に山形の木ぼりの飾を施めるもの、「漢書馬不疑傳」に、勃海剛二不疑賢一、請二與相見一、不疑冠二進賢冠一、帶二欄具劍一、盛服上謁とあり、〔六〕香煙攜袖　王註續曰く、梅學士詢、紆狸香、每二晨起一、必焚二兩爐一、以二公服一潤レ之、操二其袖一以出、坐定撤開、都然滿レ堂、蓋は是れ朝臣が自ら香を攜へて行くなり、杜甫の詩に、朝趨香煙攜二滿袖一とあるは、御爐の香煙を我が袖に攜へて歸るなり、〔七〕獨愁　王註に席書を引いて曰ふ、學士の署に入る、常に日影を視て候と爲す、李程、翰林學士と爲る、性懶、日八磚を過ぎて乃ち至る、時に八磚學士と號すと、八磚は今の幾時に當るやを知らず、日影が磚壁の八列に及ぶ頃なるにや、〔八〕千疴散　「莊子達生篇」に、桓公澤に田す、管仲御す、鬼を見、公、管仲の手を拯して曰く、仲父何をか見る、對へて曰く、臣見る所無し、公反る、談詒して病を爲し、數日出でず、告敖と云ふ者あり、曰く公則ち自ら傷る、鬼惡んぞ能く公を傷らんや、桓公曰く、然らば則ち鬼あるか、曰く有り、水に罔象あり、丘に峷あり、山に夔あり、野に彷徨あり、澤に委蛇ありと、委蛇の狀を說く、公顧然として笑つて曰く、此れ寡人の見る所のものなりと、是に於て衣冠を正しうして之と坐す、日を終へずして病の去るを知らざるなり、〔九〕倉公　「史記列傳」に、扁鵲は勃海郡の鄭の人、少時人の舍長と爲る、舍の客長桑君過ぎざる、扁鵲獨り之を奇とし、常に謹んで之を遇す、長桑君も亦扁鵲の常人にあらざるを知る、出入十餘年、乃ち扁鵲を呼んで私かに坐し、閒かに與に語つて曰く、我禁方あり、年老いたり、公に傳與せんと欲す、公愼すこと毋れ、扁鵲、敎んで諾す、乃ち其懷中の藥を出して扁鵲に予へ、是を飲むに上池の水を以てせば、三十日にして、當に物を知るべしと、乃ち悉く其の禁方の書を取つて、盡く扁鵲に與へ、忽然として見えず、倉公は扁鵲に劣らぬ名醫、姓は淳于名は意、淳公は史記に扁鵲倉公傳とあるより、一人の名と誤認したるなり、

【題義】中書舍人たる錢勰が病より起ちたる詩に次韻して作れるもの、

【詩意】牀下の龜は人の寒を支へしむるも、決して死することはない、杯中に蛇ありしと認むるも、氣の惑ふ所と知らば身體に異狀は無い、健康が回復すれば出勤して明日からは殿門に於て王傅に逢ふことが出來、欄具の劍を持つて來るものは不疑が參勤したなと衆人が先を爭うて看る、平日坐に覺えたるは香煙を袖に攜へ來る者の少きを、獨り愁ふ花影の廊に上るの遲きを、何ぞ妨げんや嘱然と大笑することを、大笑のもとには千疴總て散じ去る、そは絕だ勝る扁鵲が上池の水を飲むに、

【餘論】宋人は學問を以て詩と爲すとの誹あるが、此の篇を讀めば眞に其の然るを知る、曉嵐曰く、杯中句上下不レ貫と上の字、使用法の意義は異なるも二字あるは失體である、

次韻和王鞏

謫仙竄夜郎子美耕東屯。
造物豈不惜。要令工語言。
王郎年少日。文如餅水翻。
爭鋒雖剽甚。聞鼓或驚奔。
天欲成就之。使觸羝羊藩。
孤光照微陋。耿如月在盆。
歸來千首詩。傾瀉五石尊。
却疑彭澤在。頗覺蘇州煩。
君看騶忌子。廉折配春溫。
知音必無人。壞璧挂桐孫。

【字解】【一】謫仙　李太白は永王璘が事に坐す、【二】夜郎　郡の名、即ち今の貴州桐梓縣の東二十里の地に流竄せらる、子美は杜甫の字、【三】東屯　今の四川省の奉節縣の治、清代は夔州とす、杜の詩に東屯稻畦二百頃とあり、【四】工語言　語言は辯舌することにあらず、李と杜の詩を曰ふ、韓文公の詩に、李杜文章在、光芒萬丈長、唯此兩失子、家居卑蔑涼、奇秋長吟哦、故遣起且僵、坡公

次韻、王鞏に和す

謫仙は夜郎に竄せられ、子美は東屯に耕す、
造物豈惜まざらんや、語言を工ならしめんと要す、
王郎年少の日、文餅水の翻るが如し、
鋒を爭ふ剽甚なりと雖も、鼓を聞いて或は驚奔す、
天は之を成就せしめんと欲し、羝羊を藩に觸れしむ、
孤光微陋を照らし、耿として月の盆に在るが如し、
歸來千首の詩、傾瀉す五石の尊、
却つて疑ふ彭澤在るかと、頗る覺ゆ蘇州の煩を、
君看よ騶忌子、廉折春溫に配す、
知音は必ず人無からん、壞璧桐孫を挂く、

【字解】【五】餅水翻　韓文公の詩に、文如餅水成、初不用意爲とあり、【六】剽甚　剽はおびやかす、おどすなり、衆人が初めは王郎と鋒を爭ひ、剽かさんと欲す、【七】羝羊　牡羊、ヲヒツヂなり、牡羊は剛壯、物に觸れるを喜ぶ、然れども藩に觸れて進む能はず、周易に、羝羊觸藩、不能進、不能退、无攸利とあり、男兒勇氣にはやり、猛進する者は、事失敗に歸し、志遂ぐる能はざるに譬ふ、【八】孤光　梁の沈休文の句に、單汎逐孤光とあり、王が心地を指して云ふ、【九】微陋　卑陋と同じ、坡公自身を指す、公が觀樂亭詩に、偉哉先師、安此微陋とあり、我輩と云ふことを卑下して云ふ、【一〇】月在盆　明明又は耿耿として、心地は月の如く圓なり、【一一】五石尊　「莊子逍遙遊篇」に、惠子、莊子に謂つて曰く、魏王我に大瓠の種を貽れり、我之を樹ゑて成る、其の實五石、以て水漿を盛れば、其れ堅くして自ら擧ぐること能はず、之を剖いて以て瓢と爲せば、則ち瓠落にして、容るる所なし、嗚然として大ならざるにあらざれども、吾は其の用なきが爲に之を捨てけり云云、【一二】彭澤在　彭澤は陶淵明、王が詩を讀めば淵明が現存するかと疑ふ、【一三】蘇州煩　唐の韋蘇州即ち應物は淵明の詩を學んで、其の面目を寫へども、猶ほ煩雜なる缺ひあり、【一四】騶忌子　史記田完世家に、騶忌子以鼓琴見威王、曰、夫大絃濁以春溫者君也、小絃廉折以淸者相也、攫之深、醳之愉者政令也とあり、【一五】廉折　銳くして急、淸く澄みて且高きは、宰相の象なりとす、【一六】壞璧　「漢劉歆傳」に、得古文於壞壁之中とあり、乃ちタブレットルカベが本義なれど、貴き璧の義とある、【一七】桐孫　「周禮注」に云ふ、孫竹枝、根之未生者、桐孫亦然、「風俗通」に、梧桐生於鐘陽山、採東南孫枝爲琴、聲甚淸雅とあり、北周の庾開府の詩に、桐孫待作琴とあり、唐の李賀の詩に、嶧陽老樹非桐孫とあり、

【題義】王鞏が自況を敍べて示されたる詩に次韻したるもの、

【詩意】唐の李太白は夜郎郡に流竄せられ、其の友の杜子美は僻陬たる蜀の東屯に自耕する、此の兩文豪が彼の僻陬に身を置くを、天は之を惜まないのであるか、惜まないのではない、逆境に處して却つて其の詩を工ならしめたのである、君は年少の日、文章を作ること餅水の如く躍翻した、他の才人が鋒を爭うて、氣慨の剽甚を示せども、君が敵と爲つて打つて出づると聞けば、彼等は悉く驚きて

奔り逃れ去る、而して天は君の才を全うせしめんと欲して、所謂羝羊を藩に觸れしむるの苦を與ふ、而かも君の心地の明光は余が微陋なる身を照らして、耿耿として月の盆に在るが如きの感がある、示さるる歸來千首の詩、五石の樽を傾瀉する如く、滾滾として盡きざるを知る、其の詩は洵に淵明の正宗を傳へて、淵明を學んで淵明の極處まで達せぬ韋應物に勝ると思ふ、君も知る昔の嚮忌子は、琴の調子を以て、春溫の如しと配當したであらう、而かも其の調子の眞を知る人は世には無い、是の故に其の名琴を壞壁に挂けて彈せざるが可い、

【餘論】紀曉嵐は天欲レ成二就之一は率易、却疑彭澤在、頗覺蘇州煩の二句は凡近なりと評せり、屈復か杜詩を改刪せるを人皆笑ふ、而かも之を杜詩と見ず、屈復の詩として見れば、何等の支障なきものである、要するに紀と屈とは孟子の說二大人一則藐レ之、勿レ視二其巍巍然一を善く知る者、蓋し余は孤光照二微陋一の五字、解釋して種種の意義に取ることが出來る、余は姑らく自己の考へにて讀下せり、之を批評する人は、批評する人の自由のみ、

用二定國韻一贈二十姪震一　定國の韻を用ひ二十姪震に贈る

衡門老苔蘚。行柏千兵屯。　衡門老苔蘚、行柏千兵屯す、
開レ尊邀二落日一。未レ對二烏鳥一言。　尊を開きて落日を迎へ、未だ烏鳥に對して言はず、
清風擧二吹籟一。散二亂書帙一。翻。　清風吹籟を擧げ、書帙を散亂して翻す、
傳呼一何急。人馬從二車奔一。　傳呼一に何ぞ急なる、人馬車奔に從す、
貧居少賓客。鄰婦窺二籬藩一。　貧居賓客少に、鄰婦籬藩を窺ふ、
牆頭過二春酒一。綠泛田家盆。　牆頭春酒過ぎ、綠は泛ぶ田家の盆、
比來伏二青蒲一。坐捉白獸尊。　比來青蒲に伏す、坐して捉る白獸の尊、
王猷修二潤色一。亦有二簿領煩一。　王猷潤色を修し、亦簿領の煩有り、
朝廷貴二陸一。屢聞天語溫。　朝廷二陸を貴ぶ、屢ば聞く天語の溫かきを、
猶能整二筆陣一。愧我非韓孫。　猶ほ能く筆陣を整ふ、愧づ我は韓孫にあらざるを、

【字解】〔一〕衡門　詩に、衡門之下、可二以棲遲一とあり、平民の門を曰ふ、〔二〕行柏　行を一本、竹に作る可、〔三〕烏鳥　左傳襄公十年に、烏鳥之聲樂、齊師其遁とあり、〔四〕吹籟　空虛に發する所の聲皆籟と曰ふ、〔五〕傳呼　漢書蕭望之傳に、王仲翁、田人從二倉頭廄兒一、下レ車趨レ門、傳呼其寵とあり、〔六〕春酒　杜甫の詩に、隔レ屋喚二西家一、借問有レ酒不、牆頭過二濁醪一、展レ席俯二長流一とあり、〔七〕田家盆　杜甫の詩に、莫レ笑田家老瓦盆とあり、〔八〕青蒲　敷物なり、漢史丹傳に、候二上閒獨寢一、時丹直入二臥內一、頓首伏二青蒲上一涕泣、上意大感とあり、〔九〕白獸尊　晉禮志に、正旦元會設二白獸尊於殿庭一、尊畫二上施一白獸一、若有レ能獻二直言一者一、發二此尊一飲レ酒、哲宗が即位し、上書して事を言ふ者を求む、千を以て計ふ、司馬溫公、孔宗翰を考定して第一に居すと云ふ、〔一〇〕潤色　漢の班固の賦に、潤二色鴻業一とあり、〔一一〕簿領　魏の劉公幹の詩に、沈迷簿領書とあり、〔一二〕二陸　晉の陸機と陸雲の兄弟なり、太康の末年、太常張華に謁す、張華其の名を重んじて、大に之を周旋す、〔一三〕天語　李

太白の明堂賦に、聽二天語之察察一とあり、【一四】筆陣　王羲之の筆陣圖に、鋒者陣也、筆者刀矟也、墨者鎧甲也、水硯者城池也、心意者將軍也とあり、

【題義】今注を書く蘇文忠公合註には用二定國韻一贈二其姪震一とあり、馮應榴曰く、坡門酬唱集、不レ載二此詩一似レ非二先生作一とあり、成には用二王鞏韻一贈二其姪震一とあり、而かも今に於て斷案を下すこと能はざるを悲む、

【詩意】衡門の中の庭は苔蘚が蒼老である、竹柏は森森として千兵の屯する如くである、酒樽を開きて落日を邀へて飲む、是の時や未だ烏鳥の歸栖せざる時である、但清風が天籟を吹擧し來りて、書帙を翻して正に散亂せんとす、然る所へ急使が來ると見え、頻りに傳呼の聲が響く、人も走り馬も車も皆奔る、貧居は富家と異なり、賓客が太だ少である、偶ま鄰婦が籬落を窺ふは何事の爲かと思へば、酒家の小僧が酒を攜へて來たのである、綠色の酒を田家の盆に傾けて飲む、一轉して比來は青蒲の上に伏して、天子に咫尺し、坐して白獸尊の美酒を斟むに至る、身は王獸と爲つて鴻業を潤色する、亦籌傾を檢尋する煩もあらん、朝廷は昔二陸を貴ぶが如く今日は二王を貴ぶ、故に余も屢ば二王に對する、天語の溫かきを聞きし事がある、政事は政事、文事は文事、猶ほ能く筆陣を整理する、唯愧づ我は韓孫にあらざることを、

【餘論】王鞏の姪の王震が給事中と爲りし時贈るものならんか、故に前半は處士としての生活狀態を敍し、後半は官吏と爲つて後の狀態を敍するものの如くである、但し結末の非二韓孫一は何の意味なるや、古今判然たる注釋を闕く、紀曉嵐曰く、此非二東坡詩一、續補者誤采耳と、紀も別に其の證を示さず、遽に信ずることが出來ぬ、

用二王鞏韻一送二其姪震一知二蔡州一

王鞏の韻を用ひて其の姪震の蔡州に知たるを送る

九門插レ天開。萬馬先レ朝屯。
擧レ鞭紅塵中。相見不レ得レ言。
夜走二清虛宿一。扣レ門驚鵲翻。
君家汾陽家。永巷車雷奔。
夕郎方不レ夕。列戟以自藩。
相逢開二月閣一。畫簷低二金盆一。
至レ今夢中語。猶擧二燈前尊一。
阿戎修二玉牒一。未レ憚二筆削煩一。
君歸助二獻納一。坐繼岑與レ溫。

九門天を插んで開き、萬馬朝に先だつて屯す、
鞭を擧ぐ紅塵の中、相見て言ふことを得ず、
夜清虛に走りて宿る、門を扣けば驚いて鵲翻る、
君が家は汾陽に家す、永巷車雷奔す、
夕郎方に夕ならず、列戟以て自らの藩にす、
相逢うて月閣を開き、畫簷は金盆低る、
今に至りて夢中の語、猶ほ燈前の尊を擧ぐ、
阿戎玉牒を修し、未だ筆削の煩を憚からず、
君歸りて獻納を助く、坐に繼ぐ岑と溫とに、

我客二一子間一不復尋二諸孫一。　我二子の間に客となり、復た諸孫を尋ねず、

【字解】〔一〕九門　山の名、〔二〕清虛　堂の名、〔三〕汾陽家　「長安志」に、郭汾陽宅、在二親仁坊一、居二其地四分之一一、中通二永巷一、家人三千、相出入者、不レ知二其居一とあり、〔四〕夕郎　漢代の黄門郎は毎日暮に、入りて青瑣門に對するを以て、之を夕郎と謂ふ、夕郎は今の給事中に當る、〔五〕列戟　大官の門前、戟を列ぬ、〔六〕阿戎　「胡三省通鑑注」に、晉宋間人、多呼二從弟一爲二阿戎一、至レ唐猶然とあり、杜甫の詩に、守歲阿戎家とあり、〔七〕玉牒　宗室の世譜を曰ふ、王定國の官は宗正丞、乃ち玉牒を修する役、〔八〕筆削　「史記」に、孔子春秋を修し、筆するは則ち筆し、削するは則ち削すとあり、〔九〕獻納　「班固兩都賦序」に、朝夕論思、日月獻納とあり、〔一〇〕岑與溫　岑文本と溫大雅の二人なり、岑は中書舍人侍郎令にして、溫は黄門侍郎なり、〔一一〕尋諸孫　自注に、子美詩云、權門多二驕奢一、且復尋二諸孫一とあり、

【題義】王震が蔡州に知府と爲つて赴任するを送る詩、王震は元祐の初、給事中に遷り、龍圖待制を以て蔡州を守る、

【詩意】九門山は高く天を挿んで開き、其の山下を過ぐる萬馬は各の朝參を吾先きにと屯す、先朝を爭ふの人の萬馬の爲め紅塵が揚がる、其の中にて面を相見るとも言ふことは出來ず、夜に入れば王家の清虛堂に宿を求む、乃ち王定國が家門を扣けば、已に宿して樹に在る鵲も驚いて翻る、君が此の家は古の名將郭汾陽が舊宅である、是の故に永巷に車馬が雷聲を爲して奔るを見る、夕郎と稱するも決して夕のみ朝するを爲んや、君が家の門には戟を列ねて以て其の籬離とする、曾て清虛堂に宿して宛かも月闕にて相逢ふの感がある、畫簷が全く金盆を低れた如くである、今に至りて猶ほ夢中の語を記憶する、燈前に於て尊を開きて杯を舉げしことを、君が家の阿戎は玉牒を修整して、筆するは筆しゝるべきは削りて、少しも憚勞なぞ口にしない、君も歸りて阿戎が獻納する文書を助成する、直ちに岑文本と溫大雅が後事を繼ぐ、我は君と君の叔と二人の間に游ぶのみにて、復た別に諸孫を尋ぬることはしない、

【餘論】此篇も十三元の再疊韻なるが、紀は前と同じく坡公の作にあらずとの考なれば、別に批評を加へない、

虢國夫人夜游圖　　虢國夫人夜游の圖

佳人自〔一〕輕玉花〔二〕驄。
翩如驚燕〔三〕蹋飛龍。
金鞭爭〔四〕道寶〔五〕釵落。
何人先入明〔六〕光宮。
宮中羯〔七〕鼓催花柳。
玉奴絃索花〔八〕奴手。
坐中八姨〔九〕眞貴人。
走馬來看不動塵。

【字解】〔一〕自輕　輕は馬勒、クツワなり、〔二〕玉花驄　唐の玄宗が愛せる馬の名、〔三〕蹋　蹴るなり、蹋鞠、ケマリの成語を以て其の義を知れ、曹子建の洛神賦に、蹋若驚鴻一宛若游龍一とあり、〔四〕寶釵落　鈿鉤の唐書に、正月望夜、楊家五宅夜游、與二虞平公主一、爭二西市門一、楊氏奴揮レ鞭、及二公主衣一、公主墮レ馬とあり、〔五〕明光宮　漢の宮殿の名、金玉珠璣を以て、雜箔

(一〇) 明眸皓齒誰復見。
只有丹青餘淚痕。
人間俯仰成今古。
(一一) 吳公臺下雷塘路。
當時亦笑張麗華。
(一二) 不知門外韓擒虎。

明眸皓齒誰か復た見ん、
只丹青に淚痕を餘すあり、
人間俯仰今古と成る、
吳公臺下雷塘の路、
當時亦笑ふ張麗華、
知らず門外韓擒虎、

【之】 八紘　妻の同母姉妹を皆紘と曰ふ、楊紀外傳は信するに足らざる書なるも、詩人は多く取つて以て使用する、曰く、貴妃有レ姊三人、皆豐頰修整、工二於談笑一、巧會二旨趣一、虢國不レ施二粉黛一、自衒二美豔一、常素面朝レ天とあり、又曰く、三紘封二虢國一、八紘封二秦國一、然らば題目の虢國と合せずとして、論議紛紜、今案するに文字の末に拘泥せずして、虢國と定むべきなり、愚論千言、一用も爲さず、

【一〇】 明眸　杜甫の詩、明眸皓齒今何在とあり、【一一】 吳公臺　陳の大將吳明徹を以て名を得、隋の煬帝は初め此處に葬り、後に其の南方に當る雷塘に改葬せるなり、今日の江蘇省淮揚道の江都縣の地是れなり、【一二】 張麗華　陳の後主の妃、張貴妃是れなり、後主は狎客等と、玉樹後庭花、璧月夜夜滿、瓊樹朝朝新などと樂に耽つて居る間に、隋の爲め國遂に亡ぼさる、【一三】 韓擒虎　隋の名將なり、韓は數萬の兵を率ゐて鄖章を拔き、遂に建業に入つて陳亡ぶ、杜牧之の詩に、門外韓擒虎、樓頭張麗華とあり、

【題義】 劉有方が家多く名畫を蓄ふ、最も絕筆なるを虢國夫人夜游圖と爲す、張萱が畫く所と、坡公乃ち此詩を作り以て題する、

【詩意】 美人は馬丁の力を借らず自ら玉花驄を控騙する、其の狀は小さな驚燕が大なる飛龍を蹋躡する如くである、而かも宮廷に赴く道を、我先きにと爭うて寶釵が落ちたるに氣が付かぬ、其の中で何人か先づ明光宮に入るや、宮中には已に曉の羯鼓が鳴り響きて、花も柳も曉美を催し、玉奴は琴を彈ずる手を、花奴の羯鼓を打つ手に遷す、坐中にて貴妃中の貴妃を求むれば第一が虢夫人である、馬を走らし此の狀を來り看るが塵を動かすことは無い、その明眸皓齒も國と共に亡び、今日は只是れ畫中に於て淚痕を餘すのみ、人間は一俯一仰の間に、今日が已に昨日と成る、陳隋の世を看よ、吳公臺下は游觀の地にあらずして、哀弔すべき墓地にあらずや、陳の亡ぶるや、一笑傾國の張麗華の爲である、王が貴妃の笑を樂んで見る間に、門外には投るべき虎將の韓擒虎が攻め來り居るにあらずや、

【餘論】 夜游の狀態を極めて簡短に敍して、嘵嘵饒舌せず、坡公が大才此等の篇に於て見るべし、紀は蘇詩擇粹に於て評して曰く、收得澹宕、妙二於不レ粘二唐事一、彌見二千古一轍之慨一、又曰く、直以二莊論一作レ收、而唱嘆有レ神、此爲二詩人之言、異二乎道學之史論一、是れ結末二十八字を評する語、

用舊韻送魯元翰知洺州

舊韻を用ひ魯元翰が洺州に知たるを送る

我在東坡下。躬耕三畝園。
君爲尙書郎。坐擁百吏繁。
(一一) 鳴蛙與鼓吹。等是俗物喧。

我は東坡の下に在り、躬耕す三畝の園、
君は尙書郎と爲り、坐して擁す百吏の繁、
鳴蛙と鼓吹と、等しく是れ俗物喧し、

永謝十年舊。老死三家邨。
惟君綈袍信。到我雀羅門。
緬懷故人意。欲使薄夫敦。
新年對宣室。白首代堯言。
相逢問前輩。所見多後昆。
道館雖云樂。冷卿當復溫。
還持刺史節。却駕朱輪軒。
黃髮方用事。白須宜少存。
嗣聖眞生知。拯民如救燔。
初囚羽淵魄。盡返湘江魂。
坐憂東郡決。老守思王尊。
北流桑柘沒。故道塵埃翻。
知君一寸心。可敵千步垣。
流亡自棲止。老幼忘崩奔。
得閒閉閣坐。勿使道眼渾。
聊乘應捨筏。直泝無生源。
歸來成二老。夜榻當重論。

永謝す十年の舊、老死す三家の邨、
惟君が綈袍の信、我が雀羅門に到る、
緬に懷ふ故人の意、薄夫をして敦からしめんと欲す、
新年宣室に對し、白首堯言に代る、
相逢うて前輩に問ふ、所見は後昆より多し、
道館云に樂しと雖も、冷卿當に復た溫かなるべし、
還た刺史の節を持して、却つて朱輪軒に駕す、
黃髮方に事を用ひ、白須宜しく少しく存すべし、
聖に嗣ぎ眞生知、民を拯ふは燔を救ふが如し、
初め囚はる羽淵の魄、盡返る湘江の魂、
坐して憂ふ東郡の決せるを、老守して王尊を思ふ、
北流桑柘沒し、故道塵埃翻る、
知りぬ君が一寸の心、千步の垣に敵すべし、
流亡自ら棲止、老幼崩を忘れて奔る、
閒を得て閣を閉ぢて坐し、道眼をして渾らしむる勿れ、
聊か應捨筏に乘じて、直ちに無生源に泝るべし、
歸來二老と成り、夜榻當に重ねて論ずべし、

【字解】〔一〕尚書郎　尚書は今日所謂大臣に當る、其の大臣の下に文書を處理する役人が尚書郎なり、漢代之を置き、清の末年改めて大臣と爲す、〔二〕鳴蛙　俗物が私利の爲め、喧喧囂囂たる、是を鳴蛙と鼓吹とに譬ふ、〔三〕三家邨　鄭國人蟹篆落の處を謂ふ、唐の王季友の詩、百姓唯有三家邨とあり、〔四〕綈袍　唐の高適の詩に、尙有綈袍贈、應憐范叔寒とあり、元范雎と須賈の事、今は厚く消息を通ずるを謂ふ、〔五〕雀羅　「漢書鄭當時傳」に、先是下邽翟公爲廷尉、賓客塡門、及廢門外可設雀羅とあり、前卷に公の冷官門戶可張羅の句あり、〔六〕宣室　「三輔黃圖」に、宣室在未央宮殿北、〔七〕代堯言　公曉年中書舍人と爲り、制誥を掌る、天子に代つて作る、漢の夏侯勝云ふ、堯言布於天下、〔八〕道館　老子を祀る觀、〔九〕冷卿　衞尉は煖卿にして、宗正は冷卿と爲す、煖卿は其の儀鑾供帳の類を管する所を謂ふ、冷卿は其の玉牒を管する所を謂ふ、〔一〇〕朱輪軒　刺史の乘車、輪を赤色とす、〔一一〕黃髮　老人を言ふ、毛髮白黃、黃一變爲白なり、〔一二〕生知　學知以上を生知と言ふ、〔一三〕救燔　「隋書」に、拯溺救燔とあり、〔一四〕羽淵　山東に羽山あり、上に二泉あり、會して羽潭と爲る、舜が鯀を殛せし處、其の神化して黃熊と爲り、羽淵に入る、〔一五〕湘江　堯皇と女英の舜の二妃沒して以て神と爲りし處、時に晉宗初めて登極し、太皇堯簇、悉く新法を禁め、而して元豐の末年、事を用ふる吏輩皆放逐せられ、時に新法を論じて寬謫せられし者、皆召還して錄用せらる、〔一六〕桑柘沒　平地が河水と墜するなり、〔一七〕東郡決　東郡水決するときは、水城下に至らざること數里、元愉は之を憂へて築堤防城、大に功あり、〔一八〕塵埃翻　河水が平地と變ずるなり、〔一九〕得閒　刺史は刺史たる職務を果して餘閒を生ずるなり、〔二〇〕道眼　佛道に肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼、之を五眼と稱す、此の中にて慧眼を道眼とも言ふ、〔二一〕應捨筏　我が一身は自己を捨てて他を救ふの筏となる、〔二二〕無生源　自己の爲めの執著を離れ、涅槃の眞理に到達するを、是を無生源と言ふ、〔二三〕二老　我と君と共に役を辭して養、

【題義】今日の直隸省大名道の邯鄲縣の地は、漢も唐も共に洺州と稱す、魯が此地の知府と爲つて赴任するを送るなり、

【詩意】我が身は今謫せられて黃州の東坡に在り、日日の所作は唯三畝の園を躬耕するのみである、君は尙書郎の高官と爲つて、坐ながら多くの官吏を部下に擁する、而して世上は鳴蛙鼓吹、俗物輩が喧喧と爭うて居る、十年間の知己も今は永く謝して、身は三家邨裏に死するやとも思うて居る、幸に君は舊を捨てず、依然として緋袍の厚き信を寄せて、我が平生雀羅を張る寂寥たる門に到る、緬に故人の厚意を懷へば、如何に我は薄夫と雖も、我が良心は敦くなるを覺ゆ、然るに新年は黃州より來りて此の宣室に對し、白首の老官と爲つて堯言に代るの樂を得、乃ち逢ふ所の人に前輩の消息を問へば見る所の者多くは後進の人のみ、道觀に居て云に樂むも、冷卿も嘗に復た溫暖なるべしと思ふ、所が還た刺史たるの符節を持ちて、却つて朱輪の車に駕するの役と爲る、黃髮にして事務を見る、宜しく身は白鬚であることを忘れてはならぬ、幸に主上は生知の聰明である、是の故に民を拯ふの心は燔を救ふが如く切である、羽淵の僻境に囚はれし者も魄が活き、湘江の邊地に置かれし者も魂蘇へる、特に君は東郡に於ける治水の功が大である、其の老守の狀は王尊が事を思はざるを得ない、水害の秋は如何、北流の時は桑柘沒し、又故道には塵埃の翻揚するを見たではないか、今や知る君が一寸の誠心殆んど千步の垣に敵するの功にあらずや、流亡共に自ら棲止し、老幼俱に喜んで奔るを見る、此の間に朋あるときは闔を閉ぢて坐し、道眼なる淸き眼を色塵の爲め渾らせず、人を救ふの筏は卽ち我身を救ふの筏である、幸に此に乘つて直ちに無生の源まで泝れ、我も君も世功遂ぐれば故山に歸臥して、世に二老と稱せられん、而して夜榻を連ねて更に道を論ずるであらう、

【餘論】此の題目は送以下七字にて足る、然るに用舊韻の三字蛇足の感がある、元來韻に新舊の有るべき筈なし、而かも此あるは、宋人の面目、唐人と異なる所以、紀曉嵐曰く、語頗雜沓、句法亦多未二堅老一と、雜沓は蓋し坡公の宗派、雜沓を除けば、坡公の詩は半ば消滅するにあらずや、

次韻朱光庭初夏

朱光庭の初夏に次韻す

朝罷人人識鄭崇。　朝罷んで人人鄭崇を識る、
直聲如在履聲中。　直聲は履聲の中に在るが如し、
臥聞疎響梧桐雨。　臥して聞く疎響梧桐の雨、
獨詠微涼殿閣風。　獨り詠ず微涼殿閣の風、
諫苑君方續承業。　諫苑君方に承業を續ぐ、
醉鄉我欲訪無功。　醉鄉我無功を訪はんと欲す、
陶然一枕誰呼覺。　陶然一枕誰か呼び覺ます、

【字解】〔一〕鄭崇　前漢の鄭崇字は子游、哀帝擢んでて尙書僕射と爲す、數ば諫爭す、上、初め之を納る、革履を曳くを見る每に、上笑つて曰く、我鄭尙書の履聲を識ると、〔二〕梧桐雨　唐の孟浩然の詩、疎雨滴二梧桐一、〔三〕殿閣風　唐の傅公權の詩、殿閣生二微涼一、〔四〕諫苑　隋の樂運字は承業、夏殷以來の諫爭の事を錄して、諫苑と名づく、

牛蟻初除病後聰。

牛蟻初めて除き病後聰たり、

び自ら東皐子と號す、五斗先生傳を著はす、【六】牛蟻「晉書殷仲堪傳」に、父師嘗患耳聾、聞床下蟻鬬、謂之牛鬬、帝素聞之、不知其人、問仲堪、曰、是此者爲誰、仲堪流涕而起曰、臣遠遐雜谷、范石湖の詩に、牛蟻雖知床下鬬、鄰蛩任向夢中鳴とあり、耳を病む者は、大小の聲が混ずるなり、

文帝覽て喜ず、【七】聞鄉　唐書に隋の王頡字は無功、北山の東皐に游

【題義】朱光庭が初夏の詩に次韻して作る、光庭字は公掞、坡公と甲を同じうす、左正言、左司諫の官を歷て國に功あり、青苗法廢止を論じて、天下の志士を動かせり、

【詩意】朝廷を退出するときは、誰も彼も鄭崇（朱を譬ふ）の退出を知る、それは正直の聲が履聲の中にて知れる、我は臥して疎雨が梧桐に滴る響を聞く、君は殿閣に於て微涼の風を詠ずるならん、左司諫たる君の職は樂承業の道を續ぐ、唯醉是れ求むる我は王無功を訪はんと欲するのである、醉後陶然として睡る、睡を覺ますものは誰ぞ、此の時は耳鳴の憂が消えて平常の耳に聰が復したのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、前四句語脈不貫、牽二於韻脚一耳、此の韻脚に牽かるる所を無理に使用せんと欲するが樂天以後次韻家の常習なり、坡公如何に大才なるも、全く時流を脫する能はざるは悲むべきなり、

次韻朱光庭喜雨

朱光庭の喜雨に次韻す

久苦趙盾日、欣逢傅說霖。
坐知千里足、初覺兩河深。
破屋常持傘、無薪欲爨琴。
清詩似庭燎、雖美未忘箴。

久しく趙盾の日に苦み、傅說の霖に逢ふを欣ぶ、
坐して知る千里足るを、初めて覺ゆ兩河深きを、
破屋常に傘を持し、薪無くして琴を爨せんと欲す、
清詩は庭燎に似たり、美なりと雖も未だ箴を忘れず、

【字解】【一】趙盾　晉の文公の臣、「左傳」に、趙衰冬日之日也、趙盾夏日之日也、冬日可愛、夏日可畏、【二】傅說　殷の仁者なり、「尙書」に、高宗謂說曰、若歲大旱、用汝作霖雨とあり、【三】兩河　汴河と蔡河なり、【四】庭燎「詩經小雅」に、庭燎夜未央とあり、宮庭に焚く所のかがりび、羣臣を照らす、

【題義】朱光庭が喜雨の詩に次韻す、

【詩意】久しく趙盾が如き酷熱に苦み、今は傅說が如き仁雨に逢ふを欣ぶ、坐し乍らに千里の間十分に濕ひたるを知る、又兩河の水深く益すを覺ゆ、破屋は常に傘を持する狀態、薪は買ふ能はざれば琴を爨せんとまで思ふ、君が喜雨の詩は古の庭燎詩にも似て居る、唯是れ美なるにあらず、亦以て箴と爲すべきである、

【餘論】起句對を以て作る、魯唐五律の正法、唯五六の二句稍滑調に近くして、大雅には近からず、紀曉嵐評して咄咄怪事と曰ふは當る、

奉勅祭西太一和韓川韻四首

勅を奉じ西太一を祭る、韓川の韻に和す　四首

聖主新除祕祝。

聖主新に祕祝を除し、

古今體詩　次韻朱光庭喜雨　奉勅祭西太一和韓川韻四首

破屋常持傘、無薪欲爨琴。
清詩似庭燎、雖美未忘箴。

【字解】【一】新除　太一を祭る

侍臣來乞豐年。
壽宮神君欲至。
夜半靈風肅然。

侍臣來りて豐年を乞ふ、
壽宮神君至らんと欲す、
夜半靈風肅然たり、

【題義】元祐元年に哲宗の勅を奉じて、西太一を祭るに際し、監察御史たる韓川が詩を作りて示されたるを和したるなり、

【詩意】皇帝が太一を祭らん爲め新に其の祭官を除任せらる、特に侍臣を列せしめて豐年を祈り乞はしむ、祭を設けて居る中に其の神が髣髴と眼前に至るかと思はる、更に夜半に及んでは、靈風が良に肅然として人の襟を正さしむる、

〔二〕

玉璽親題御筆。
金童來侍天香。
禮罷祝融參乘。
前驅已過衡湘。

玉璽親しく御筆を題し、
金童來りて天香に侍す、
禮し罷んで祝融參乘し、
前驅已に衡湘を過ぐ、

【詩意】祭を設くる詔は御筆と玉璽を親裁し玉ふ、天仙の童子は來りて天香に侍坐し、一齊に禮し罷む時に祝融神も參乘し、警蹕嚴然として其の前驅は已に衡湘を過ぎ去る、

〔三〕

解劍獨行殘月。
披衣困臥清風。
夢蝶猶飛旅枕。
粥魚已響枯桐。

劍を解いて獨り殘月に行き、
衣を披きて清風に困臥す、
夢蝶猶ほ旅枕に飛び、
粥魚已に枯桐に響く、

【詩意】劍を解いて以て獨り殘月の曉に向つて行く、衣を披いて清風に向つて困臥す、夢蝶は猶は旅枕を繞りて飛ぶも、曉を報ずる粥魚は已に枯桐に響く、

〔四〕

陂水初含曉渌。
稻花半作秋香。

陂水初めて曉渌を含み、
稻花半ば秋香と作る、

【字解】〔一〕玉璽　「史記秦始皇紀」に、趙高令子嬰受玉璽とあり、〔二〕祝融　南方炎帝の佐、卽ち火の神の名、

【字解】〔一〕夢蝶　「莊子齊物論」に、莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、俄然覺則蘧蘧然周也、不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與とあり、〔二〕粥魚　「晉書張華傳」に、臨平湖出一石鼓、擊之無聲、華曰取蜀中桐材、製爲魚形、扣之則鳴矣、如其言果聲聞數里とあり、佛寺の木魚是と同じ、

〔四〕

【字解】〔一〕皇華　太守の製、

皂蓋却迎朝日。　　皂蓋却つて朝日を迎へ、
紅雲正繞宮牆。　　紅雲正に宮牆を繞る、

【詩意】 陂の水は初めて曉涨を含み、稻花は半ば熟して秋香を作す、官人の乘る車の皂蓋は却つて朝日を迎へ、紅色の雲は正に是れ宮牆を圍繞する、

【餘論】 四首正しく祭を設ける事、天子親臨する事と、臣下が前夜より宿する事と、車駕還御の事と此の四意を含むものの如し、六言詩は漢の司農谷永より始まる、故に古詩の一體たるは論勿し、平仄も近體の如く整正するは却つて其の法にあらず、

西太一見王荆公舊詩。偶次其韻二首

西太一に王荆公が舊詩を見る、偶ま其の韻に次す　二首

秋早川原淨麗。　　秋早くして川原淨麗、
雨餘風日清酣。　　雨餘にして風日清酣、
從此歸耕劍外。　　此從り劍外に歸耕せん、
何人送我池南。　　何人か我を池南に送らん、

【字解】 〔一〕 淨麗 「南史謝裕傳」に、居宇淨麗とあり、〔二〕 劍外 杜甫の詩に、草木變衰行劍外とあり、劍門關外を謂ふ、

【題義】 西太一宮に王荆公が題詩ありしを見て其の韻に次するなり、作者が故人と成りしなれば舊詩と題す、已むを得ざるならんが、余は舊詩を題詩と改むる方可なりと思ふ、

【詩意】 夏去り秋來りて川原も淨麗と爲る、況んや雨の餘風日も清酣である、吾も此より劍門關外に歸耕せんと思ふ、何人か我が池南に返るを送る人なるや、

〔一〕

但有尊中若下。　　但尊中の若下あり、
何須墓上征西。　　何ぞ須ひん墓上の征西を、
聞道烏衣巷口。　　聞く道らく烏衣巷口、
而今煙草萋迷。　　而今煙草萋迷、

【詩意】 但尊中には若下邨にて釀造せる酒がある、生きて酒を飲むは死して征西將軍の墓なぞと題することは無用である、人の道ふ所を聞くと、烏衣巷口の狀態は、只今煙草が萋迷たるのみである、

【餘論】 此の二首は紀曉嵐評して曰く、六言難レ得二如レ此流利一と、荆公の原作は、柳葉鳴蜩綠暗、荷

【字解】 〔一〕 若下 邨の名、美酒を出す地、〔二〕 墓上 今日北京本や上海本には墓上とあり、舊本悉く墓上に作る、魏武紀注、載公十二月己亥令云云、後徵爲二都尉一及二遷爲二典軍校尉一、意途更欲レ爲二國家一討レ賊立レ功、欲レ望二封侯一、作二征西將軍一、然後題二墓道一言、漢故征西將軍曹侯之墓、〔三〕 烏衣巷 金陵に在り、晉の王謝が居りし所、劉禹錫の詩、烏衣巷口夕陽斜とあり、〔四〕 萋迷 荆公金陵に居せしも、是の時已に墓と爲る、荆公は元祐元年四月に卒す、

花落日紅酣、三十六陂春水、白頭相見江南、」二十年前此地、父兄持レ我東西、今日重來白首、欲レ尋二舊迹一都迷、可もなし、不可もなし、

次韻子由送陳侗知陝州

誰か能く鐵牛の如く、身を横へて黄河を負ふ、
滔天沒する能はず、尺箠未だ訶し易からず、
世俗自から常無し、徐公故に逶迤、
別來說く可からず、事浮雲と多し、
當時限り無きの人、毀譽は卽墨阿、
虛聲は了に實無く、夜蟲機梭を鳴らす、
相逢ふ一笑の外、此の白髮を奈何、
天驥は皆雲を簡み、長鳴して芻禾に飽く、
王庭百實を旅ね、大貝弓戈に隨ふ、
君獨り一麾去し去り、五袴の歌に賡がんと欲す、
甘棠古の樂國、白酒金叵羅、
知る君が久しく留まらず、治行新科に中る、
過客嗔喜足り、東堂分鵝を記す、
此の外但坐嘯し、後生揣摩工なり、

【字解】【一】鐵牛　王註偉曰く、陝州有二鐵牛廟一、今封爲二順濟王一、頭在二河之南一、尾在二河之北一、世傳禹以レ此鎮二河患一也、【二】横身　查初白曰く、開元十二年、於二河東縣一開二東西門一、各造二鐵牛四一、其牛並鐵柱、連腹入レ地丈餘、負レ橋跨レ河と、【三】滔水　尚書に洪水滔天とあり、【四】尺箠　韓愈の詩に、恨無二一尺棰一、爲レ國笞二羌夷一とあり、棰と箠同じ、罪人をむちうつなり、【五】徐公　杜甫の詩に、徐公自有レ常とあり、三國の世、魏に徐邈あり、盧欽と云ふ者あり、徐が傳を作る、或人問ふ徐公は武帝の時に當つて、人以て通と爲し、涼州に在りしより、京師に還るに及んで、人以て介と爲すは何ぞや、盧欽曰く、往には毛孝先、崔季珪、事を用ひ、清素の士を貴ぶ、是に於て皆草服を變易して、以て名高を求む、而して徐公其の常を改めず、故に人以て通と爲す、比來天下寄靡、轉た相倣效うて、而して徐公獨尚自若、俗と同じからず、故に前日の通は、乃ち今日の介なり、是れ世の無常にして、徐公の有常なり、【六】逶迤　蜂蠆曲折の義、【七】毀譽　「史記」に、齊の威王、卽墨大夫を召し、語りて曰く、子の卽墨に居りしより、毀言日に至る、吾れ人をして卽墨を觀察せしむ、田野闢け、人民給し、官事を留むる無し、東方以て寧し、是れ子は吾が左右に事へて以て譽を求めざるなり、之を萬家に封す、阿の大夫を召し、語りて曰く、子の阿に在りしより、譽言日に聞ゆ、然して人をして阿を觀察せしむ、田野闢けず、民愁苦す、昔日趙、甄を攻む、子救ふこと能はず、衛は薛陵を取る、子幣を以て吾が左右を厚くして以て譽を求むるなり、是の日之を烹る、【八】夜蟲　蟲に促織の名あり、而して實は未だ嘗て織らず、毀譽無實の義を成す所以なり、【九】天驥　「文選白馬賦」に、漢道興而天驥呈レ才とあり、【一〇】籠雲　籠は字音デフ、カビヤ、鉗なり、「漢書禮樂志」に、籠二浮雲一とあり、驕むと同じ、【一一】旅百實　「左傳」莊公二十二年の條に、庭實旅レ百、奉レ之以二玉帛一とあり、【一二】大貝　「書顧命」に、大貝鼖鼓在二西房一、兌之戈、和之弓、

垂之竹矢、在東房」とあり、【一三】五袴歌　「後漢書」二十一、廉范字は叔度、京兆の人、趙の廉頗の後なり、世世遼郡の守と爲る、甸奴を殺つて功あり、蜀郡の太守と爲つて、民の信頼する所と爲る、民歌うて曰く、廉叔度來ること何ぞ暮きや、平生補無く、今五袴のみと、【一四】甘棠　陝州の地を指す、甘水が山麓の中に導くに因つて、世人其の地を目して甘棠と爲す、魏には甘棠縣、隋には壽安縣、唐は福昌縣と改む、【一五】金匜羅　宋の王楙の「野客叢書」に、北史を引いて曰く、祖珽盜神武金匜羅、蓋酒器也とあり、如何なる器なるや、要するに盃なることは明白、察するに印度地方より來るものならん、金匜羅は漢土の音にあらざるなり、【一六】嗔喜　晉の劉毅傳に曰く、初め江州の刺史庾悅、隆安中に司徒長史と爲る、曾て京口に至る、毅時に甚だ屯蹇、先づ府に就いて東堂を借る、親故と出でて射を爲す、而して從、悅、僚佐と徑ちに來つて堂に詣る、毅之に告げて曰く、毅は屯否の人、一射を合する甚だ難し、君諸堂に於て並に可なり、望むらくは今日を以て讓られよ、悅許さず、既にして悅鵝を食ふ、毅其の餘を求む、悅又答へず、毅嗔に之を病む、義熙中、悅が鑾輿を奪ひ、其の軍府を解く、人をして其の旨を微示せしむ、悅慾懼して死す、【一七】後生　「史記」蘇秦、周書陰符を得、伏して之を讀む、期年、以て揣摩を出して曰く、此れ以て當世の君を說く可し、「鬼谷子」に揣摩篇あり、

【題義】弟の子由が其の友陳侗が陝州に知事と爲つて赴任するを送る詩に坡が次韻したるなり、陳侗が陝州に知たるに際し勸して云ふ、出二入冊府一、幾二十年、安二於分義一、不下妄附麗、以干上進取、願爲二一郡一、以恤幼孤、其の人品概知すべし、

【詩意】誰人か能く鐵牛の如く爲つて、一身を横へて黃河の害を負ふ者であるか、河水滔天なるも、鐵牛の功は沒すべからず、一尺の鑾を持つて決して叱訶することは出來ない、世俗は其の心事常あることなし、徐公の如きは俗の反對に雍容として迫らぬ、一別來の事說くべからず、萬事浮雲と同じく變化多し、當時限り無き多くの官人、毀譽の虛實は古の卽墨と阿との如きものである、阿の如きは虛聲にて了に實の無きこと、宛かも夜蟲が促織と名を持ちながら其の實何物をも織らざると同じ、相逢うて一笑する外、我は此の白髮を奈何せんや、天驥は地上のものにあらず、天上の雲を蒙む、長鳴して芻禾を十分に飽くまで食ふ、王庭は百寶渾て天地の美を旅ねる、而して大貝や精巧なる弓矢も隨うてある、然るに君は何ぞや、王庭の其の名譽なるを一麾し去つて、以て彼の五袴の歌に應せんとするや、但し甘棠も古の樂國である、白酒を盛るに金匜羅を以てするの贅澤である、知る君が茲にも久留しないであらうことを、治行は新科に中るが故に、過客或は嘱り或は喜ぶに足る、東堂に於て分鵝の事は君も記憶して居るであらう、此の外は但坐して長嘯するのみ、其の批評は後生の揣摩に工なる者に任せんのみ、

【餘論】紀曉嵐曰く、以二鐵牛一擬レ人、未レ免二不倫一、又中間を評して曰く、句法好と、又結末を評して曰く、亦未レ免二太露牢騷一、要するに饒舌を弄することを厭はざるは宋人の僻、如何ともすべからざるなり、

送賈訥倅眉二首　賈訥の眉に倅たるを送る　二首

當年入レ蜀歎空回。　當年蜀に入つて空しく回るを歎ず、
未見峩眉肯再來。　未だ峩眉を見ず肯て再び來らんや、
童子遙知頌襦袴。　童子遙に知る襦袴を頌するを、

【字解】【一】峩眉　四川の嘉州に在り、之を望めば、兩山相對して蛾眉の如ければ名づく、【二】襦袴　前首廉范の記事を見よ、【三】歎　歎

〔一〕

老翁山下玉淵回。
手植青松三萬栽。
父老得書知我在。
小軒臨水爲君開。
試看一一龍蛇活。
更聽蕭蕭風雨哀。
便與甘棠同不翦。
蒼髯白甲待歸來。

〔二〕

老翁山下玉淵回る、
手ずから植う青松三萬栽、
父老書を得て我が在るを知り、
小軒水に臨んで君が爲に開く、
試みに看よ一一龍蛇活くるを、
更に聽け蕭蕭風雨哀むを、
便ち甘棠と同じく翦らず、
蒼髯白甲歸來を待つ、

【詩意】老翁山下に玉淵回り、手自ら植う青松三萬栽、鄉黨の父老は書を得て我の健在なるを知り、小軒は水に臨んで開くは君が爲の故である、試みに看よ當年手植の三萬の松は皆是れ龍蛇の勢を爲して活き、更に風雨の時は蕭蕭と聲が哀む如くである、昔召公の息うた地の甘棠は人民が翦らない、今の松もそれと同じく少しも翦らない、松の蒼髯白甲なると同じく、我が先考も蒼髯白髮にして此に神が歸り來るあらん、

【字解】〔一〕老翁　山名にして地名なり、旅公が父老泉の墓の在る所、〔二〕父老　杜甫の詩、父老四五人、問我久遠行とあり、〔三〕龍蛇活　手植の青松が老木と爲りたるを謂ふ、〔四〕甘棠　毛詩に、蔽芾甘棠、勿翦勿伐とあり、〔五〕蒼髯　老泉が老翁井銘に、往歲十年、山空月明、常有老人、蒼顏白髮、偃息於泉上、就之周隱而入於泉、因築亭於其上、又甃石以禦水浸之暴、

使君先已洗尊罍。
鹿頭北望應逢雁。
人日東郊尚有梅。
我老不堪歌樂職。
後生試覓子淵才。

【自注】李大夫眉之賈太守也。
【自注】人日田東郊、渡江游蒙頂山、眉之故事也。

【題義】賈訥が眉州に倅卽ち副使と爲りて赴くを送る詩なり、作中和樂職宣布詩、選好事者、令依鹿鳴之聲、習而歌之、宣帝召見武帝、皆賜官爵とあり、子淵は王褒の字なり、

【詩意】當年僕が蜀に入りしとき何の所得も無く回る、其の時は峩眉山を見ざるが爲めに肯て再來する、眉は敎化が滿ちて居ることは童子が襁褓の歌を誦するにて判る、使君は祖を祭るに用ふる尊罍を自ら洗ふ、鹿頭關に在つて北方の中原を望めば應に雁に逢ふであらう、人日東郊には尙ほ梅花あるを見る、僕は年老いて樂職の歌を作るに堪へない、後進の士卽ち君の如き王子淵に類する才を具へる人を求むるのみ、

尊もサカダル、罍もサカダル、雲雷の形を畫きしものなり、〔三〕鹿頭　關名、綿州羅江縣、〔四〕北望　蜀より中原を望む、〔六〕人日　正月七日なり、「荆楚歲時記」に、一日を雞と爲し、二日を狗、三日を羊、四日を豬、五日を牛、六日を馬、七日を人日と爲すと、唐の高適の人日寄杜甫詩に、梅花滿枝空斷腸とあり、〔七〕子淵　漢の王褒傳に、王褒使蜀、

【餘論】此の篇二律、紀曉嵐評するが如く、前首深穩、後首は一氣渾成と、坡公の面目は實に此に在り、杜甫の詩に、柴門今日爲レ君開とあり、小軒は開くに力無し、坡公の大才も唐賢に及ばざる所多し、

送程建用

先生本舌耕。文字浩千頃。
空倉付公子。坐待發茗穎。
十年困新說。兒女爭捕影。
鑿垣種蒿蓬。嘉穀誰復省。
空餘南陔意。太息北堂冷。
織屨隨方進。採薪教韋逞。
辛勤守一經。菽水賢五鼎。
今年聞起廢。魯史復光景。
公子亦改官。三就繁馬頸。
歸來一笑粲。素髮颯垂領。

程建用を送る

先生本舌耕、文字浩として千頃、
空倉公子に付し、坐待茗穎を發す、
十年新說に困み、兒女爭ひて影を捕ふ、
垣を鑿ちて蒿蓬を種ゑ、嘉穀誰か復た省せん、
空しく南陔の意を餘し、太息す北堂の冷、
屨を織つて方進に隨ひ、薪を採つて韋逞を敎ふ、
辛勤一經を守り、菽水五鼎よりも賢れり、
今年聞く廢れたるを起すと、魯史光景を復す、
公子も亦官を改む、三就馬頸を繁にす、
歸來一に笑粲、素髮颯として領に垂る、

會看金花詔。湯沐奉朝請。
天公不吾欺。壽與龜鶴永。

會す看ん金花の詔、湯沐朝請を奉せん、
天公吾を欺かず、壽は龜鶴と永し、

【字解】〔一〕舌耕「王子年拾遺記」に、賈逵口授經文、獻者積粟盈倉、或云賈逵非力耕所レ得、誦レ經口倦、世所レ謂舌耕也とあり、〔二〕浩千頃　韓退之の詩、歸來閱書史、文字浩千頃とあり、〔三〕茗穎　茗は「詩經小雅」に茗之華、芸其黃矣とあり、ノウゼンカヅラを言ふ、穎は穗の鋒なり、劉禹錫の詩に、茗華一雨後、若穎如雲發とあり、〔四〕新說　王荆公の三經新義を指す、多く性命の說を言ふ、故に捕影を以て之を言ふ、「漢郊祀志」、谷永說レ上曰、姦人挾左道、以欺罔人主、欲其言若神可レ遇、求之鬱鬱如レ俘風捕レ影、終不レ可レ得、〔五〕鑿垣「莊子庚桑楚篇」に、是其於レ辯也、將有鑿垣而植蓬蒿也、〔六〕南陔「東晉補亡詩」に、猶彼南陔、言采其蘭とあり、孝子相戒以養也、〔七〕北堂冷　其母を念ふなり、詩に、焉得諼草、言樹之背とあり、背は北、北堂・萱堂、皆母を謂ふ、〔八〕織屨「漢龔方進傳」、欲レ西至京師、受レ經、母織レ其坐、隨之長安、織レ屨以給とあり、〔九〕採薪「晉書列女傳」に、韋逞年少、母宋氏晝則樵採、夜則教レ逞、遂學成名立とあり、〔一〇〕一經「漢韋賢傳」に、宣帝初即位、賢以先帝師、爲丞相、少子元成、復以明經、位至丞相、故鄒魯諺曰、遺子黃金滿籯、不如一經とあり、〔一一〕菽水「禮記」に、子路曰傷哉貧也、生無以爲養、死則五鼎烹耳とあり、五鼎は美食の代名詞なり、〔一二〕起廢　元豐八年に新法を罷め、元祐元年に青苗法を罷め、二年に安石の經義を禁じ、而して舊に復す、〔一三〕公子　建用を稱す、建用此の時、當に宣德郎を以て、中江縣に知たるべし、〔一四〕三就「禮記」に、大路繁纓一就、先路三就、次路五就とあり、杜預曰く、繁纓馬飾也と、三重に馬の飾りを爲す、粲も笑と同じ、〔一五〕素髮「文選潘安仁秋興賦」に、悟時歲之遒盡、兮、慨俯首而自省、蕤鬢影以承兮、素髮颯以乘レ領とあり、〔一六〕金花詔　退朝錄云、予嘗判官告院、郡夫人使金花羅紙、七寶法錦經袋、盛以湯沐之邑、而奉朝請、乃奉レ親之榮事也とあり、

【題義】程建用字は鞏仲、眉山の人、親を稅居に奉じ、蘇老泉と東西相望む、今宜德郎と爲つて眉山

に歸るを送るなり、

【詩意】建用の父先生は本と舌耕の人である、文章を屬るも亦千言浩浩湖の如し、而して其の逝くや空倉を君に付與して、君をして自立して苕穎を發せしむるの力を養はしむ、是の時や新說なる經義の爲に諸生は皆困めらる、十年間は兒女輩に到るまで爭うて影を捕ふる癡態を學ぶ、其の學たる恰も垣を墜ちて蒿蓬を種うる如き愚事を爲す、嘉穀なりと雖も誰も省視する人は無い、譬へば南陔の如き嘉穀は空骸を餘すのみ、北堂に孝を盡すなどの人は無く古を知る者は太息するのである、昔は履を織つて其の子を學ばしめた母あり、又薪を采りて以て其の子を教へたる母あり、辛勤して一經を眞に守るは黃金百萬にも勝る、菽水は疎末なるものなれど、孝心を以て奉すれば、五鼎なぞ奉するよりも賢る、幸にも今年は新法なぞと云ふ俗欺しは廢して、却つて廢して行はなかつた正法が行はるる樣になつた、魯史の如き正經は原の光景に復り、而して君も亦官が改まつた、三就して馬頸を繁纓するの名譽を見る、歸來して唯一に笑粲する、素髮は颯として領に垂れる、會す敍任の金花詔書を看て、親に奉じて安らかなる天の公は實に吾を欺かない、君の壽は定めて龜鶴の如く長命するであらう、

【餘論】紀曉嵐曰く、氣自適緊、但乏二深味一、又曰く、魯史句未二穩愜一と、如何に作れば深味を含み、如何に作れば穩愜と、余は紀に向つて問はんと欲す、

次韻李修孺留別二首

十年流落敢言歸。
魚鳥江湖只自知。
豈意青天掃雲霧。
盡呼黃髮寄安危。
風流吾子眞前輩。
人物他年記一時。
我欲折儒留此老。
緇衣誰作好賢詩。

十年流落して敢て歸るを言はん、
魚鳥江湖只自ら知る、
豈意はんや青天雲霧を掃ふことを、
盡く黃髮を呼んで安危を寄す、
風流吾子眞に前輩、
人物他年一時を記す、
我儒を折つて此の老を留めんと欲す、
緇衣誰か賢を好むの詩を作る、

【字解】〔一〕流落　官に在つての流落を謂ふ、坡公初め杭州、次に知州に徙り、而して密州、而して徐州、而して湖州、而して黃州と十年間外に在り、〔二〕魚鳥　杜甫の詩に、江湖多白鳥とあり、〔三〕青天　「晉樂廣傳」に、衞瓘命諸子造焉、曰此人之水鏡、見之瑩然若披雲霧而覩青天、今の青天は天子を指して謂ふ、〔四〕黃髮　「書」に、詢芻蕘、則罔所拒とあり、「唐書郭子儀傳」に、以身爲天下安危者二十年とあり、〔五〕吾子　爾汝之稱、孟子に吾子過矣とあり、〔六〕人物　「晉書劉毅傳」に、毅好臧否人物、王公貴人、望風憚之とあり、〔七〕折儒　儒はウスギヌ、帛なり、漢代之を合符に用ふ、「漢書終軍傳」に、終軍年十八、選爲博士弟子、入關、關吏與軍繻、終軍曰、以此何爲、吏曰爲復傳還、當以合符、終軍曰大丈夫西游、終不復傳還、棄繻而去、後爲諫者、建節東出關、關吏識之曰、此使者過前棄繻生也、〔八〕緇衣　「禮記」に、孔子曰、好賢如緇衣、惡惡如巷伯、「毛詩」に、緇衣美武公也、美其德、以明有國善善之功、焉とあり、

【題義】李修孺が留別の詩に次韻して作る、李の事蹟は未考、

【詩意】十年も他郷に流落して敢て歸る歸ると言ふ、魚鳥のみ江湖に於て只自ら知る、意はざりき雲霧散じて再び青天を覩るを得んとは、世人は此の黄髪の老人に依頼して安危を托する、意ふに風流なる吾子は眞に前輩である、人物として他年聞く一時を救ふの力ある人と、我は退官しても此の老は是非遺留を望む、賢を好むの人は彼の緇衣の章の如きものを作りて、此の公の美を歌ふべきである、

〔一〕

此生別袖幾回麾。
夢裏黄州空自疑。
何處青山不堪老。
當時明月巧相隨。
窮通等是思家意。
衰病難堪送客悲。
好去江魚煮江水。
劍南歸路有姜詩。

〔一〕

此の生別袖幾回か麾す、
夢裏黄州空しく自ら疑ふ、
何れの處か青山老に堪へざる、
當時明月巧に相隨ふ、
窮通等しく是れ家を思ふの意、
衰病堪へ難し客を送るの悲み、
好し去つて江魚江水に煮ん、
劍南歸路姜詩有り、

【字解】〔一〕明月　李太白の詩に、人攀ぢ明月に不可得、月行却與人相隨とあり、〔二〕劍南　成都府の地名、〔三〕姜詩　漢の人、其の妻と共に母に事へて至孝、妻ほ率順尤も篤し、母好んで江水を飲む、舍を去る六七里、妻常に流に泝りて汲む、從風に值ひ、時に遽るを得ず、母渴す、詩責めて之を遣る、妻乃ち鄰舍に寄止し、晝夜紡績、鄰母をして其の姑に遺らしむ、是の如きもの久し、姑怪み鄰母に問ふ、鄰母具さに對ふ、姑感慚して呼び還す、因妻愈よ謹む、又姑魚膾を嗜む、又獨り食ふ能はず、夫躬耕して力作して膾を供し、鄰母を呼んで之を共にす、

命側忽ち泉あり、味江水の如し、每旦輒ち雙鯉魚出づ、常に以て二母の膳に供ず、後世其の地を姜師鎮と呼ぶ、

【詩意】此の人生は幾回か別袖を繰り返すや、身は今黄州に在つて猶ほ夢裏かと自ら疑ふ、何の處の青山も老に堪へざる所は無い、當時の明月は變ずること無く影が我と隨處に在る、而かも窮に於て通に於て家を思ふの意は同じである、但衰病の中に在つて客を送るは第一の悲痛である、君は好し去つて江魚を取つて江水に煮よ、劍南への歸路には姜師鎮がある、

【餘論】曉嵐前首を評して、特多情と曰ひ、後首を評して、窮通句精警と曰ふ、前首を多情と言ふは、後首は反對に薄情であるのか、後首五六を精警と言ふは、三四は率易と言ふのであるか、余は寧ろ三四を以て精警と言はんと欲す、五六は平凡、決して精警にあらずと思ふ、堪二字あるは失考、

黄魯直以詩饋雙井茶。次韻爲謝

黄魯直詩を以て雙井茶を饋らる、次韻謝を爲す

江夏無雙種奇茗。
汝陰六一誇新書。
磨成不敢付僮僕。
自看雪湯生璣珠。

江夏無雙奇茗を種う、
汝陰六一新書に誇る、
磨成して敢て僮僕に付せず、
自ら看る雪湯璣珠を生ずるを、

【字解】〔一〕江夏無雙　「後漢書」に、黄香傳に學經典、能文章、京師號曰天下無雙、江夏黄童、今以て魯直を譬ふ、〔二〕汝陰　縣名、今の安徽省阜陽縣治とす、〔三〕六一　歐陽修は自から六一居士と號

列仙之儒瘠不腴。　列仙の儒瘠せて不腴、
只有病渴同相如。　只病渴の相如に同じき有り、
明年我欲東南去。　明年我東南に去らんと欲す、
畫舫何妨宿太湖。　畫舫何ぞ妨げん太湖に宿するを、

【題義】黄魯直卽ち山谷が詩を寄せられ、且つ雙井の茶を饋られたるに酬ゆる詩である、

【詩意】江夏無雙の人が江夏無雙の茶を栽培する、汝陰の六一居士は新著の成るを誇る、茶を製し、茶を烹る童僕の解し得る所でない、必ずや夫子自ら烹ざるべからず、乃ち自ら烹る雪湯が璣珠を生ずるの趣が出る、列仙の儒は瘠せて腴えずと聞く、司馬相如の渴は必ず飲料に依賴せざるを得ない、明年は我も亦東南方に向つて游び、其の時は畫舫を太湖に泛べて茶を舟中に烹て宿せんと思ふのである、

【餘論】紀は評して曰く、眞效二山谷體、却非二山谷之佳者一、此の評は切當なるを覺ゆ、

次韻黄魯直赤目

黄魯直の赤目に次韻す

誦詩得非子夏學。　詩を誦する子夏が學に非ざるを得んや、

【字解】【一】誦詩　卜商字は子夏、詩序を爲る、毛公は其の弟子とす、子夏、子を失して明を失ふ、【二】紬史　「漢司馬遷傳」に、爲二太史令一、紬二史記石室金匱之書一とあり、【三】邱明　司馬遷答二任少卿一書云、左邱失レ明、厥有二國語一、左丘は複姓、明は名、複姓を一字割きて名と合す、諸葛亮を葛亮と稱するの類か、【四】薄相　明目を盲目に變ぜしむる類、是皆薄相なり、【五】幻翳　眼前物無きに物有る如くなるを幻翳と謂ふ、

紬史正作邱明書。　紬史正に作る邱明が書、
天公戲人亦薄相。　天公人に戲る亦薄相、
略遣幻翳生明珠。　略ぼ幻翳を明珠に生ぜ遣む、
賴君年來屏鮮腴。　賴に君年來鮮腴を屏け、
百千燈光同一如。　百千燈光一如に同じ、
書成自寫蠅頭表。　書し成る自寫の蠅頭の表、
端就君王覓鏡湖。　端しく君王に就いて鏡湖を覓む、

【六】屏　坐右に寄せ付けざること、【七】鮮腴　魚肉や獸肉の類、【八】同一如　一燈二燈三燈、乃至百千の燈、燈光は益す明なるも、多きも彼燈と此燈と毫髮も光を妨げず、是を同一如と言ふのである、【九】蠅頭表　細字にて書く表を謂ふ、【一〇】鏡湖　賀知章、天寶の初、病んで夢に帝居に游ぶ、數日にして寤む、乃ち請うて道士と爲り、鄉に還る、詔して之を許す、宅を以て千秋觀と爲して居る、周官湖數頃を求めて、放生池と爲すと、李太白の憶二賀監一詩に、欲レ向二江東一去、定將二誰舉一杯、稽山無二賀老一、卻棹二酒船一回とあり、

【題義】黄山谷が眼病の詩を示されたるを次韻して作る、

【詩意】詩を誦するは乃ち是れ子夏の學統を繼がんが爲である、明を失するも猶ほ書を著はせる丘明は今日に求むれば君である、然るに天公は無情にも惡戲をして其の形を損するや、何の用も無き幻影をして明珠に生ぜしむるや、唯賴とする所は君は年來魚肉を遠ざけて、精進して燈燈は一如なりとの

二二三

す、【六】不敢　茶を製するに、自から用を爲し、童僕の手を勞せず、【七】生璣珠　茶湯の湧沸するを謂ふ、【八】列仙之儒　司馬相如が大人賦序に、以爲列仙之儒、居二山澤間一、形容甚臞、【九】病渴　司馬相

正眼を開きて居られる、所謂慧眼を肉眼の外に具へて如何なる細字でも書き玉ふ、乃ち端正に君王に就いて鏡湖を覓むるの表を呈することが出來る、

【餘論】今體なるが如く、古體なるが如く、再讀三讀、以て古體たるを知る、紀曉嵐曰く、亦傚山谷と、世に山谷を稱して詩魔と稱す、坡公も亦魔道に墮せるものである、

武昌西山　武昌西山

嘉祐中翰林學士承旨鄧公聖求、爲武昌令、常游寒溪西山、山中人、至今能言之。軾謫居黃岡與武昌相望、亦常往來溪山間。元祐元年十一月二十九日考試館職、與聖求會宿玉堂、偶話舊事、聖求嘗作元次山窪尊銘、刻之巖石、因爲此詩、請聖求同賦、當以遣邑人、使刻之銘側。

【訓讀】嘉祐中翰林學士承旨鄧公聖求、武昌の令と爲る、常に寒溪の西山に游ぶ、山中の人、今に至りて能く之を言ふ、軾の謫居黃岡は武昌と相望む、亦常に溪山の間に往來す、元祐元年十一月二十九日、考試館の職、聖求と玉堂に會宿し、偶ま舊事を話す、聖求嘗て元次山窪尊銘を作り、之を巖石に刻す、因つて此の詩を爲る、聖求に同賦を請ひ、當に以て邑人に遣り、之を銘側に刻せしむべし、

【字解】〔一〕嘉祐　北宋仁宗の年號、八年を以て治平に遷る、〔二〕翰林學士承旨　正三品とす、〔三〕爲武昌令　今の湖北省、

春江漾漲蒲萄醅。
武昌官柳知誰栽。
憶從樊口載春酒。
步上西山尋野梅。
西山一上十五里。
風駕兩腋飛崔嵬。
同游困臥九曲嶺。
褰衣獨到吳王臺。
中原北望在何許。
但見落日低黃埃。
歸來解劍亭前路。

【題】謫居黃岡　神宗の元豐三年己未、年四十四を以て公は黃州に貶せらる、嘉祐元年より二十四年後とす、〔四〕元祐元年　哲宗立ち、神宗崩ず、元豐二年より八年後とす、〔六〕玉堂　宋代翰林に玉局觀提舉あり、道觀を守る資格の者を試驗する官、坡公は此職に居る、玉堂は卽ち玉局と同じ、〔七〕元次山窪尊　道家の仙神の名、彼の土の名山勝景、半は佛寺、半は道觀にて占領する、

春江漾漲蒲萄醅す、武昌官柳知誰か栽うる、憶ふに樊口に春酒を載せしより、步して西山に上りて野梅を尋ぬ、西山一たび上る十五里、風兩腋を駕して崔嵬に飛ぶ、同游困臥す九曲嶺、衣を褰げて獨り到る吳王臺、中原北望何の許にか在る、但見る落日黃埃低るるを、歸來解劍亭前の路、

【字解】〔一〕蒲萄醅　春江漾漲の景色を蒲萄醅の如しと形容する、蒲萄酒を飲むのではない、龐樹が東坡詩注に、梁溪漫志云云と評すれども、梁溪漫志を檢するに其の記事無し、〔二〕樊口　「水經注」に、江水右得樊口とある、「名勝志」に、樊山下、爲樊口、亦名樊港とある、〔三〕春酒　張平子の東京賦に、致欣懽於春酒とある、〔四〕兩腋　盧仝の詩に、兩腋生清風とある、〔五〕九曲嶺　「武昌志」に、樊山卽西山、九曲嶺在樊山南嶺、路九折故名、有九曲亭、子由作記とある、〔六〕吳王臺　「名勝志」に、吳王避暑宮在寒溪上、今圓通閣是也、とあ

蒼崖半入雲濤堆。
浪翁醉處今尚在。
石臼抔飲無尊罍。
爾來古意誰復嗣。
公有妙語留山隈。
至今好事除草棘。
常恐野火燒蒼苔。
當時相望不可見。
玉堂正對金鑾開。
豈知白首同夜直。
臥看椽燭高花摧。
江邊曉夢忽驚斷。
銅環玉鎖鳴春雷。
山人帳空猿鶴怨。
江湖水生鴻雁來。
請公作詩寄父老。
往和萬壑松風哀。

蒼崖半は入る雲濤堆、
浪翁醉ふ處今尚ほ在り、
石臼抔飲尊罍無し、
爾來古意誰か復た嗣ぐ、
公妙語有り山隈に留む、
今に至りて好事草棘を除く、
常に恐る野火の蒼苔を燒くを、
當時相望むも見る可からず、
玉堂正に金鑾に對して開く、
豈知らんや白首夜直を同じうし、
臥して看る椽燭高花の摧くるを、
江邊曉夢忽ち驚斷し、
銅環玉鎖春雷鳴る、
山人帳空しく猿鶴怨み、
江湖水生じて鴻雁來る、
請ふ公詩を作りて父老に寄せよ、
往いて和せん萬壑松風の哀むに、

【題義】武昌の西山に游ぶが主意にして、鄧公が武昌の命を爲りて居りしことを客意として記す、序言は記して字の如く別に解し難き所は無い、

【詩意】春江の水色は宛も蒲萄醅を漲らした如くである、武昌城を繞る官柳は初めは誰が栽ゑしものなるや、今に記憶する曾て樊口より春酒を載せて舟にて渉り、それより歩して西山に上りて野梅を尋ねしことを、西山は一直線に上ること十五里、兩腋が全く風に駕して崔嵬に飛び上る、同游の人は疲勞して九曲嶺に困臥するも、我は衣を蹇げて獨り吳王臺址を弔ふ、此の處より中原を北望すれば何許である、但見る何物も無く、落日の黃埃の中に低るるを、下山し來りて解劍亭前の路に至れば、蒼崖は雲濤の堆中に入つて見えず、浪翁が曾て醉ふ處は今尚ほ址が在る、石臼抔飲尊罍無きの風流を想像する、其の風流の古意を誰か復た嗣ぐや、唯鄧公は浪翁に嗣いでの妙語を山隈に留む、今に至るまで好事の者は碑頭の草棘を除き、且つ常に恐る野火が古色愛すべき蒼苔を燒くを、當時同じく官人と爲つて、我は玉堂に在つて鄧公は金鑾殿に在る、而かも相望むも見ることは出來ぬ、豈知らんや兩人と

る、【七】何許　ゆるす、聽許、從許が本義なるも、此と所との二義にも用ふ、坡詩特に多し、【八】黃埃　白樂天の句、風吹黃埃起、落日圖征車とある、【九】解劍亭　武昌に在る、越の子胥江を渡るの處、【一〇】浪翁　唐の詩人、元結、天下兵亂起るや、逃れて猗玕洞に入る、自から猗玕子と稱す、後、瀼濱に家す、乃ち自から浪士と稱す、樊上の人、之を漫叟と呼ぶ、【一一】石臼抔飲　抔はホウとハイとの二義に用ふ、例せば一抔土の如きは、掌の如き小さな土の意義、それと同じく抔飲は、手にて掬ひのむ義、元結は樊上に居て、抔亭の銘を爲る、序に曰く、郡亭四、乳有二鑿石一、石臨二樊水一、漫叟構レ石、顏以爲レ亭、石有二宮觀者一、因修レ之以讌レ酒、孟子源愛レ之、命爲二抔亭一、公は樂來を指す、【一二】金鑾　蓬萊山に在り、【一三】椽燭　金蓮花を以て、椽燭を承ける、杜甫の詩に、空燒夜燭花とある、【一四】帳空　山人が山中に在ちずして、人中

も白首にして夜直を同じうせんとは、而して兩人とも臥して看る椽燭の高花が摧け落つるを、江邊に曉夢が忽ち醒め來れば、銅環玉鎖して唯春雷が鳴り、山人山に在らず其の空帳に對して猿鶴が空しく怨む、江湖には水生じて鴻雁來る、雁は信を傳ふるもの、請ふ公よ余が爲に詩を作りて父老に寄示し玉へ、西山に往つて相和せんかな松風の哀む聲に、

【餘論】此の篇二十八句、二百字、一韻到底の作である、王文簡の「古詩平仄論」に、此の詩を出して曰く、若二平韻到底者一、斷不レ可三雜以律句一、其要在三第五字必平一、第四字第五字平仄既合、第二字可レ平可レ仄、然不レ如二平之諸一也、今此に示さんに春江の句、平平仄仄平平平、武昌の句、仄平平仄平平平、步上の句、仄仄平平平仄平、風駕の句、平仄仄仄平平平、以下悉く此の法、王文簡は平韻到底者と謂ふ、案するに、杜甫の哀江頭にせよ、韋諷錄事宅觀二曹將軍畫馬圖一引にせよ、丹青引贈二曹將軍霸一にせよ、此等は一韻到底にあらず、數度換韻の作、而かも句脚の三字を見るに、皆平平平或は平仄平にして、仄平平は極めて寥寥と爲す、武昌の此の詩を除く外、自二金山一放レ船至二焦山一の詩、答二呂梁仲屯田一の詩、游二徑山一の詩、一韻到底の作として例と爲す、一韻到底の例と爲すは善し、一韻到底にあらざる詩も、亦此の平仄法を守るものと心得て善し、紀評は、筆筆老健とある、

西山詩和者三十餘人。再用前韻爲謝

西山の詩和する者三十餘人、再び前韻を用ひて爲に謝す

朱顏發レ過如春醅。
胸中梨棗初未レ栽。
丹砂未レ易レ掃二白髮一。
赤松却欲レ參二黃梅一。
寒溪本自遠公社。
白蓮翠竹依崔嵬。
當時石泉照二金像一。
神光夜發如二五臺一。
飲レ泉鑒レ面得二眞意一。
坐視二萬物一皆浮埃。
欲レ收二暮景一返二田里一。
遠泝二江水一窮二離堆一。
還レ朝豈獨羞二老病一。
自嘆才盡傾二空罍一。

朱顏過を發して春醅の如し、
胸中の梨棗初未だ栽ゑず、
丹砂は未だ白髮を掃ひ易からず、
赤松却つて黃梅に參せんと欲す、
寒溪は本自から遠公の社、
白蓮翠竹崔嵬に依る、
當時石泉金像を照らし、
神光夜發して五臺の如し、
泉を飲み面を鑒みて眞意を得、
坐ながら萬物を視て皆浮埃、
暮景を收めて田里に返らんと欲す、
遠く江水に泝り離堆を窮む、
朝に還りて豈獨り老病を羞づるのみな
自ら嘆ず才盡きて空罍を傾く、らん、

【字解】〔一〕發過　過つて酒が顏色に出る、白樂天の詩に、朝酒發二紅顏一とあり、清凉案ず、過は或は渦の誤字かと、羅大經の「鶴林玉露」に頰上酒渦と云ふ語あり、酒の爲に頰が赤色に渦を生ずるなり、胡濙菴が記事と幷讀すれば、明白のものがある、〔二〕梨棗　「眞誥」に、右英王夫人、授二許長史一曰、火棗交梨之樹、已生二君心中一、猶有二荊棘相雜一、是以二樹不レ見、可レ剪二荊棘一、出二此樹一、單生とある、〔三〕丹砂　丹砂化爲二黃金一と言ふを聞くも、白髮を黑髮と化することは出來ない、〔四〕赤松　古の仙人、〔五〕黃梅　唐の高僧、姓は周氏、名は弘忍、蘄州黃梅の人、禪宗第五祖とす、代宗の朝、大滿禪師と追諡ざらる、始め破頭山の栽松道者たり、四祖に請うて曰く、道得べきや、祖が曰く汝已に老ゆ、

諸公渠渠若夏屋。
呑吐風月清隅隈。
我如廢井久不食。
古甃缺落生陰苔。
數詩往復相感發。
汲新除舊寒光開。
遙知二月春江闊。
雪浪倒卷雲峯摧。
石中無聲水亦靜。
云何解轉空山雷。

【自注】韋應物詩云。水性本云靜。石中固無聲。如何兩相激。雷轉空山驚。

欲就諸公評此語。
要識憂喜何從來。
願求南宗一勺水。

諸公渠渠夏屋の若く、
風月を呑吐して隅隈を清うす、
我は廢井の如く久しく食はれず、
古甃缺落して陰苔を生ず、
數詩往復して相感發し、
新を汲み舊を除きて寒光開く、
遙に知る二月春江の闊きを、
雪浪倒卷して雲峯摧く、
石中聲無くして水亦靜か、
云何ぞ轉を解く空山の雷、

欲し諸公に就いて此の語を評せんと欲し、
要す憂喜の何より來るを、
願はくは南宗一勺の水を求めて、

若し再來せば、吾尚ほ遲つべし、汝遺者去つて水邊に行け、周氏の女子を見、水邊より笈を回らし、歸山して化す、其の女嘗ち孕む、已にして子を生む、後復た四祖に遇うて得度し、法を破頭山に傳ふ、衣鉢を盧能に付し、安坐して逝く、塔を黄梅東山に建つ、【六】 遠公社　晉の高僧慧遠は道安の弟子なり、姓は賈氏、雁門樓煩の人、義熙中に寂す、廬山を出でざること三十年、東林寺に社を結び、之を白蓮社と稱す、【七】 神光夜發　坡公の寄薬泉銘の序に云ふ、陶侃(晉人)廣州たり、漁人あり毎夕神光を海上に見る、之を跡せしむ、金像を得たり、初め武昌の寒溪寺に送る、其の後慧遠禪師、(雁門の慧遠、江陵の慧遠、歓煌の慧遠と三慧遠あり、此の慧遠は雁門の慧遠ならん)像を廬山に迎ふ、唐の會昌中、天下の寺を毀つ、二僧あり像を負ひ谷に藏す、佛教興復に及んで像を求

往與屈賈瀏餘哀。

往いて屈賈が與に餘哀を瀏がん、

むるも得べからず、而して谷中今に至りて光景の發見するあり、峨眉五臺山見る所の如し、今寒溪の西數百步、泉あり候寶の間より出づ、色白くして甘し、豈昔金像の在る所か、余今案するに五臺を以て云云するより見れば、文殊大士の像なること疑ひを容れず、【八】 暁暮景　夕暮の景色を言ふにあらず、【九】 離堆　山の名、蜀の永康軍に在り、「輿地紀勝」に、蜀守李冰、離堆を鑿ち、沫水の害を避け、二江を成都の中に穿つ、【一〇】 才畫　「南史江淹傳」江淹夢に、郭璞曰く吾、筆あり、卿が處に在ること多年、以て還さるる可し、淹乃ち懷中を探り、五色の筆を得たり、一に以て之に授く、爾後詩を爲る、絕えて美句なし、時人之を才盡と謂ふ、【一一】 渠渠　毛詩、於我乎夏屋渠渠とあり、深廣の貌を言ふ、【一二】 隅隈　「楚辭天問」に隅隈多有とあり、【一三】 廢井　賈島の詩に、一日不讀書、心荒如廢井とあり、「周易」に、井泥不食、舊井無禽とあり、【一四】 古甃　甃は今日の所謂煉瓦の類、井戸の周圍を疊むものなり、【一五】 石中　韋蘇州の詩に、水性本云靜、石中固無聲、如何兩相激、雷轉空山驚とあり、【一六】 南宗一勺水　南宗は北宗に對する語、南宗の一祖を六祖大師慧能とす、姓は盧氏、南海新興の人、少にして薪を賣ひ母を養ふ、偶ま鬻市の間に金剛經を誦するを聞き、悚然として其の人に問うて曰く、此れ何の法なる、曰く金剛經、黄梅の忍大師に得と、師遽かに其の母に告げて、直ちに韶州に抵り、石を抱き て春つき、以て大衆に供ず、後法衣を得、生地に還るを計る、先天二年寂す、俗壽七十六、憲宗追謚して大鑒と曰ふ、【一七】 屈賈　楚の屈原と漢の賈誼、

【題義】 武昌西山の詩を作りて人に示す、人の和詩を作る者三十餘人の多きに至る、坡公乃ち此を賦して謝を爲す、

【詩意】 誤つて朱顏をして春酷の如く爲したるは、胷中に荆棘多く梨棗の如き佳樹を栽ゑざるが爲である、丹砂は仙實として貴きものなるが未だ白髮を變化させる力は無い、赤松子は仙術を得て貴き仙人であるが、而かも黄梅には教を乞はざるを得ない、我が游びし處の寒溪は晉の慧遠法師の隱栖した

る地である、其の白蓮社を繞る翠竹は崔嵬に依つて清風を吹く、當時の史を讀むと石泉が金瑞を照らして神光が夜發して五臺山の如きの狀である、其の清泉を飲み且面を盥れば乃ち眞意を知ることが出來る、是に於てか坐しながら萬物が皆浮埃の如くなるを悟る、世の浮榮なぞは埃に等し、其の埃を愛せんより殘年を收めて田里に返らんと欲する、遠く江水を泝りて離堆の窮まる地まで行かんと思ふ、而かも其の願は空しく又朝に歸りて獨り老病を羞づるのみでない、自ら太息する才力盡きて空轟を傾ける如く何物も胷中より出て來ない、然るに諸公は渠渠深廣にして夏屋の若く、風月を呑吐して隅隈を清うするの才力を具へらる、我は廢井の如く久しく書物を讀まない、所謂古甃が缺落して陰苔を生ずる如くである、諸公の寄せらるる詩を讀んで唯感發するのみ、新を汲み舊を除きて寒光正に開く、遙に知る二月の節は春江が廣闊と爲つて、雪浪倒卷して雲峯摧くの概がある、石中聲無く水も亦靜である、云何がして空山の雷を轉ずることを解せる、我は自解の力なし、諸公に就いて此語を批評せんと思ふ、誠らんと要することは憂喜は何くより來るものにや、願はくは南宗の大悟徹底せる一勺の烈水を求めて、往いて屈原や賈誼が爲に餘哀を瀹がんと思ふ、

【餘論】紀曉嵐は此の篇を評して、忽入二議論一、發二出今昔升沈大感一、波瀾壯闊之至、妙二於本地風光一、不三是橫生二枝節一、此の壯闊波瀾の語は、眞に此の詩に對して切當なるものである、本地風光とは何事を言ふや、佛氏の說を流用して、屈原や賈誼が、現世の事に憂喜を寄せて、終身悟る所無きを、坡公は佛より得たる慧眼を以て、彼等を濟度せんと爲したる事を指すならんが、本地風光では、其の事を評する語とは成らず、坡公は西山が佛寺と關係あるより、說いて此に及びしもの、此等の得力は太白や杜甫や韓退之の及ぶ所でない、況んや楊萬里をや、陸放翁をや、

狄詠石屏

霏霏點輕素。渺渺開重陰。
風花亂紫翠。雪外有煙林。
雪近勢方壯。林遠意殊深。
會有無事人。支頤識此心。

【字解】〔一〕霏霏　細雪の形容、〔二〕渺渺　廣大の形容、〔三〕風花　庾開府の詩に、風花直飄岡とある、

【題義】狄詠字は子雅が石屏、卽ち石が自然に屏風を爲したるものを詠ずるのである、

【詩意】霏霏として輕素を點じたる處もある、渺渺として重陰を開く處もある、風が雪を花の如く散亂して石の紫翠なる處を點す、其の雪の外には別に煙林がある、雪の近き處は勢が方に盛んである、煙林の遠き處に對して意は殊に深きものがある、會ま無事の人、頤を支へて此の心を識認するであらう、

【餘論】此等の詩、坡公として平平凡凡喫茶飯の類であるのみ、

雪林硯屏。率魯直同賦　雪林硯屏、魯直を率へて同じく賦す

西山無時春。巉巖鎖頑陰。　西山時春無し、巉巖頑陰に鎖す、
分明倚天壁。點綴無風林。　分明に天壁に倚る、點綴風林無し、
物固爲人出。興誰於此深。　物固に人の爲に出づ、興は誰か此に於て深き、
窮奇眞自蠹。詩句且娛心。　窮奇眞に自から蠹む、詩句且つ心を娛ましむ、

【詩意】西山は春の來ることは無いかと疑ふ、巉巖が一年中頑陰に鎖すを見て判る、分明に高く天壁に倚りて、曾て點綴して一林も無し、萬物總て固に人の爲に出づる、興味は誰か深く此の景色を見て深くするや、自然の窮奇は自然に蠹む、是に於てか人は詩句を以て心を娛ましむ、

蘇東坡詩集　卷二十八

古今體詩

和周正孺墜馬傷手　周正孺が馬より墜ち手を傷つくるを和す

平生學道已神完。　平生道を學んで已に神完、
豈復兒童私自憐。　豈復た兒童のごとく私に自ら憐まん、
醉墜何曾傷內守。　醉墜何ぞ曾て內守を傷らんや、
色憂當爲念先傳。　色憂は當に先傳を念ふ爲なるべし、
書空漸覺新詩健。　空に書して漸く覺ゆ新詩の健を、
把蟹行看樂事全。　蟹を把つて行くゆく看ん樂事全きを、
賣却老聰爲酒直。　老聰を賣却して酒の直と爲す、
大呼鄉友作新年。　大に鄉友を呼んで新年を作さん、

【字解】〔一〕神完　神氣完全なり、〔二〕私自憐　「楚辭九辯」に、惆悵兮而私自憐とあり、〔三〕色憂　「禮記」に、世子色憂不滿容とあり、祭義に樂正子春、堂より下りて其の足を傷き、數月出でず、猶ほ憂色あり、曰く父母全うして之を生む、子全うして之を歸す、孝と謂ふ可し、今予孝の道を忘る、予是を以て憂色あるなり、是の故に道にして徑せず、舟にして游ばず、敢て父母の遺體を以て殆きを行かず、〔四〕書空　晉

の放浩は放縱ぜらると雖も、口に臭言無し、但終日空に書し、喃喃怪事の四字を作るのみ、【四】把蟹「晉書畢卓傳」に、嘗謂人曰、得酒滿三數百斛船一、四時甘味置二兩頭一、右手持二酒杯一、左手持二蟹螯一、拍二浮酒船中一、便足了二一生一矣とあり、

【題義】周正孺、官は考功郎、醉うて馬より墜ち、手を傷けたる詩を作るを和するのである、

【詩意】平生道を學んで神氣は已に完全である、豈兒童の如くに私に自ら憐むあらんや、醉うて馬より墜つるも神氣完全を傷ることは無い、唯顏色に出して憂ふることは此の身體を毀傷したかしないかである、空に向つて字を書す其の詩は新健である、蟹を把つて行くゆく樂事の全きを期するは卓公と同じ、幸に身無事なるを祝ふ爲め、老馬を賣却して酒錢と交換し、大に鄉友を呼び集めて新年祝賀會を開くべきである、

【餘論】紀評に曰く、色憂句腐、結末粗獷、要するに一時游戲の作、深く論ずるの要は無い、

戲周正孺二絕

周正孺に戲る　二絕

折臂三公未可知。
臂を折つて三公未だ知る可からず、

會當千鎰訪權奇。
會ま當に千鎰權奇を訪ふべし、

勸君鬻駱猶閒事。
君に勸む鬻駱は猶ほ閒事、

腸斷閩中楊柳枝。
腸は斷ゆ閩中の楊柳枝、

【字解】【一】折臂「晉書羊祜傳」に、有二善相一者、言、祜祖墓所有二帝王氣一、若鑿之則無後、祜遂鑿之、相者曰、發出二折臂三公一、祜竟墜馬折臂、位至二三公一、而無子とあり、【三】千鎰　多額の金兩の

典、「太公六韜」に、商王拘二周伯昌于羑里一、太公以二金千鎰一、求二天下珍物一、以免二君之罪一、子是得二犬戎氏文馬名二騂斯之乘一、以獻二商王一、とあり、【三】權奇　顏延年の白馬賦に、雄志倜儻、精權奇令とあり、人の詭計なるを稱するも、赤馬の精强をも稱するか、【四】鬻　駱　白樂天の不能忘情吟序に、樂天既老又病レ眦、乃錄二家事一會二經費一、去二長物一、馬有二駱者一、眼壯駿疎、乘レ之亦有レ年、籍在二長物中一、將レ鬻之、圃人幸レ馬出レ門、馬嘶レ首反顧一鳴、似二知レ去而戀戀者一、予悠然且命迴レ勒とある、【五】楊柳枝　侍妾を謂ふ、

【題義】周正孺が一身上に就いて馬を賣るとか、又は妾を放逐するとかの議起るを聞いて、乃ち此の詩を作りしものと思ふ、戲の字を見て其の事項を知ることが出來る、

【詩意】臂を折つて三公と爲る又爲らざるとは未だ知ることが出來ない、會ず千兩金を以て權奇の門を訪はざるを得ない、僕は君に勸告する駱を賣却することはそれ程の問題でない、閩中の愛妓を去らしむるは腸斷の極である、

〔一〕

天廐新頒玉鼻騂。
天廐新に頒つ玉鼻騂、

故人共敝亦常情。
故人共敝も亦常情、

相如雖老猶能賦。
相如老ゆと雖も猶ほ能く賦す、

換馬還應繼二生一。
馬を換へて還た應に二生に繼ぐべし、

〔二〕

【字解】【一】天廐　宮內省の廐舍、【二】騂　赤黃色の馬を謂ふ、「毛詩」に有騂有騏とある、【三】敝　やぶれる(敗)、つかれる(罷)、我も君も共に馬は罷馬より外はない、查初白の注に曰く、東坡爲二翰林一時、柯レ賜レ馬凡二、其一以贈二李方叔一と、之を破する者は曰ふ、正孺と唱和、元祐二年なり、方叔に馬を贈るは元祐四年なり、此の故人は方叔を謂

ふにあらず、正獨を指すと、正獨にあらずして他の人を指す理由がない、【四】二生　司馬相如と羊勝を指すか未詳。

【詩意】宮廷内の廐舍に飼養する玉鼻騂を下賜せらる、所が今日まで我馬も故人の馬も同じく罷れて居る、二匹賜はらば一匹分與するが常情である、司馬相如は老いたりと雖も猶ほ賦を作る、君も亦馬を交換して還た應に詩を賦して二生の巧に繼ぐべきである、

【餘論】紀曉嵐曰く、折筆却有二思致一、

題文與可墨竹

文與可の墨竹に題す

故人文與可。爲道師王執中。作墨竹。且謂執中。勿使他人書字。待蘇子瞻來。令題詩其側。與可既沒八年。而軾始還朝。見之乃賦一首。

【訓讀】故人文與可、道師王執中が爲に墨竹を作る、且執中に謂ふ、他人をして字を書かしむる勿かれ、蘇子瞻の來るを待つて、其の側に題詩せしめよと、與可既に沒して八年にして軾始めて朝に還る、之を見て乃ち一首を賦す、

【字解】【一】道師　道士ならん、釋師を禪士と稱すると同じ、【二】王執中　未詳、

斯人定何人。游戲得自在。　斯人定んで何人ぞ、游戲自在を得たり、

詩鳴草聖餘。兼入竹三昧。　詩は鳴る草聖の餘、兼ねて竹三昧に入る、

時時出木石。荒怪軼象外。　時時木石を出す、荒怪象外に軼す、

舉世知珍之。賞會獨予最。　舉世之を珍とするを知る、賞會獨り予最、

知音古難合。奄忽不少待。　知音古も合し難し、奄忽少くも待たず、

誰云生死隔。相見如龔隗。　誰か云ふ生死隔つと、相見て龔隗の如し、

【字解】【一】游戲　游化と同じ、佛陀や菩薩が神通に游んで、人を教化し、以て自からの娛樂とするを云ふ、佛典の通用語である、【二】自在　三昧を謂ふ、意の如くに筆が臨ふを謂ふ、三昧は自在を謂ふ、「書苑」に、懷素自言、得二草書筆法三昧一とあり、「法華經」に、佛入二無量義處三昧一とあり、三昧は梵語の音寫、譯して正受と云ふ、【三】軼　超越を謂ふ、象外即ち形の外に超越して氣韻を有するなり、【四】賞會　「宋謝宏微傳」に、叔父混、風格高峻、少レ所二交納一、唯與二族子靈運・瞻曄・宏微一、並以二文義一賞會とある、【五】知音　音律に精しき者を謂ふ、古詩に、不レ憎歌者劣、但傷知音稀、一轉して知己の義と爲る、韓退之の詩に、知音自レ古稱レ難レ遇とある、【六】奄忽　古詩に、人生寄二一世一、奄忽若二飈塵一とある、【七】龔隗　「晉書隗炤傳」に、隗、易を善くす、隗終に版に書し、其の妻に授けて曰く、吾亡びて後五年の春、當に詔使ありて、此の亭に來るべし、娃は龔、此人吾に金を負ふ、即ち此版を以て之を責めよ、期日に龔使者あり、亭中に止まる、妻遂に版を齎らし往いて之を責む、使者惘然、所以を知らず、沈吟良久しうして悟る、乃ち命じて蓍を取りて之を筮し、卦成る、嘆じて曰く妙なる哉隗生、是に於て炤妻に告げて曰く、吾金を負はず、賢夫自から金あるのみ、亡後當に暫く窮すべきを知り、故に金を藏し、以て太平を待つ、吾が易に善なるを知る、故に版に書し、以て意を寄するのみ、金五百斤あり、盛るに青甕を以てし、覆ふに銅梓を以てし、埋めて堂屋の東頭に在りと、之を掘るに昔トの如し、

【題義】亡友の文與可が道士の爲に畫きて與へたる墨竹の讃詩を作る、文與可が此の墨竹を描き、王

執中に贈りし時謂ふ誰人にも字を書かせるな、獨り蘇子瞻をして書かせよと、既にして生前に其の讖を書かせることが出來ずして、死後に坡公が其の通り書いたものである、

【詩意】斯の人卽ち文與可と云ふ人は如何なる人である、丹青に游戯すること眞に自在である、詩も草書も共に聖域に入る、其の上竹に於て特に三昧を發得する、時時には木石をも畫く、其の筆致の荒怪は象外に超軼する、世の中の人皆之を珍賞する、而して眞に賞會する者は獨り予である、眞に知音と云ふ者は古今共に少い、哀しい哉歲月は人を待たず、堂堂と過ぎ去つて生死を隔つるに至る、而かも我と君とは古の龔と隗との如く眞の知音である、

【餘論】紀曉嵐曰く、微覺三局促一而語特沈著と、荒怪軼三象外一の五字を評して曰く、五字有レ神寫二盡高人筆墨一と、要するに游戯又は三昧又は象外等の佛語を運用して詩語と爲すは坡公の獨擅場にて、他人の追隨することを許さない、

潘推官母氏挽詞

南浦淒涼老逐臣。
東坡還往盡幽人。
杯杯慣作陶家客。
絃誦嘗叨孟母鄰。
尙有升堂他日約。
豈知負土一阡新。
今年我欲江湖去。
暮雨連山宰樹春。

【字解】【一】老逐臣　坡公自かち云ふ、【二】還往　東坡より已來往く者はの意味、【三】杯杯　杯盤と同じ、客を鼎走すること、【四】陶家客　晉の陶侃は早に孤貧、縣吏と爲るや、鄱陽の孝廉范逵嘗て過ぎちる、侃時に倉卒、以て賓を待する能はず、其の母妻を截つて雙髮を得、以て酒殽に易へ、飲を樂み歡を極む、【五】孟母鄰　孟軻の母、初め其の舍墓林に近し、孟子の嬉戯、墓間の事を爲す、去つて市中に舍す、嬉戯衒賣の事を爲す、又去つて學宮の傍に舍す、嬉戯乃ち俎豆を設けて揖讓進退す、孟母曰く、此れ眞に以て居る可きなりと、【六】升堂　王註に、後漢書范式傳を引いて曰く、范式字巨卿、少游二太學一、與二汝南張劭一爲レ友、劭字元伯、二人竝告二歸鄉里一、式謂二元伯一曰、後二年當レ還、將レ過拜二尊親一、見二孺子一焉、乃共期日、後期方至、元伯具以白レ母、請二設レ饌以俟一之、母曰二年之別、千里結言、爾何相信之深耶、對曰其期信士、必不二乖違一、至二其日一、巨卿果到、升レ堂拜飲、盡レ歡而別、【七】負土　「孝子傳」に、宗承字世林、母歿負レ土作レ墳、不レ役二童僕一、一夕之間、土壤自高五尺、松竹生焉とある、【八】宰樹春　宰樹は宰木と義同じ、公羊傳に宰上之木拱矣とある、宰は冢なり、墓木を謂ふ、盧仝の詩に、夕風吟二宰樹一とある、釣夢得の詩に、千行宰樹荆州道、暮雨蕭蕭聞二子規一とある、

【題義】潘推官は潘彥明、其の母の李氏を挽する爲に作る、

【詩意】我は黃州の南浦に放逐せられたる淒涼たる人である、但し我より以還此に至る人は盡く幽人であつて俗人では無い、例へば客に馳走するにも、母氏が賢明であればこそ其の髮を鬻いで以て酒を買ひし陶侃が家母の如き人がある、又禮樂や讀書の爲め子を思ふ孟母の樣な人もある、僕も潘家を

訪うて老母の爲め世話に再びなるべしと嘗て約したるに、豈知らんや今は土を負うて一阡の新なるを見るに至らんとは、今年は僕も退官して自由の身と爲らんと思うて居る、其の時は暮雨蕭蕭たる中に母氏墓前の春を弔ふべきである、

【餘論】當面殊更に哀詞を敍べず、而して其の中言ふべからざる哀詞を含む、人の母氏を哭す、後生宜しく此の篇を以て法と爲すべきである、紀曉嵐七律を以ての故に採らざるは何ぞや、

玉堂栽花。周正孺有詩次韻　玉堂に花を栽う、周正孺詩あり次韻す

故山桃李半荒榛。
粗報君恩便乞身。
竹簟暑風招我老。
玉堂花蕊爲誰春。
纖纖翠蔓詩催發。
皎皎霜葩鬢鬬新。
只有來禽青李帖。

故山の桃李半は荒榛、
粗ぼ君恩に報じ便ち身を乞ふ、
竹簟の暑風我が老を招き、
玉堂の花蕊誰が爲に春なる、
纖纖なる翠蔓詩發するを催し、
皎皎たる霜葩鬢新を鬬はす、
只來禽青李帖有り、

【字解】【一】君恩　公の爲め、【二】乞身　私の爲め、【三】翠蔓　唐の皮日休の詩に、翠蔓飄颻欲レ挂レ人とある、【四】來禽　果名、「廣志」に、林檎似ニ赤奈子一、一名黑禽、亦名ニ來禽一、甘熟則來レ禽也とある、王羲之取つて以て其帖に名づく、【五】青李　果名、亦以て帖名とす、「淳和法帖」數むる所、王羲之が書せる四百六十五帖の一とす、

他年留與學書人。

他年留與す學書の人、

【題義】玉局の官庭に花を栽ゑ、周正孺が詩を作れるを次韻したのである、

【詩意】故山に於ては主人不在、從つて荒榛であらう、今身は官に在るも國恩に報じたる後は退役を願うて故山に歸るであらう、竹簟の暑風は早く歸りて老を養へと示すものの如くである、さらばとて玉堂に栽ゑし花蕊は要するに誰が爲の春である、纖纖たる翠蔓を見れば詩を作れとの催促でもある、皎皎たる霜葩を觀れば白髮と爭ふものの如くでもある、自分が去つて後も官堂に留むるものは何である、それは來禽帖と青李帖との二帖、後來玉堂に住して學書する人の爲め、是は留めて置く、

【餘論】此等の詩は唐詩を讀むが如く、聊かも勅率の態無く、情思景趣兩ながら議すべき所は無い、

杜介送魚　杜介魚を送る

新年已賜黃封酒。
舊友仍分赬尾魚。
陋巷關門負朝日。
小園除雪得春蔬。

新年已に賜ふ黃封酒、
舊友仍ほ分つ赬尾魚、
陋巷關門朝日を負ひ、
小園除雪して春蔬を得、

【字解】【一】黃封酒　前已に注す、【二】赬尾魚　前已に注す、【三】銀絲鱠　杜甫の詩に、鮮鱗銀絲鱠、香芹碧澗羹とあり、【四】讙　懽、驩、同義の字にて叫讙と成語、種子が喜悅して、かまびすしくよろ

病妻起斫銀絲鱠。　病妻起つて斫る銀絲鱠、
稚子讙尋尺素書。　稚子讙び尋ぬ尺素書、
醉眼朦朧覓歸路。　醉眼朦朧歸路を覓む、
松江煙雨晚疎疎。　松江の煙雨晚に疎疎たり、

【詩意】新年に際し已に黄封酒の恩賜がある、それに又舊友から赬尾魚の分與を蒙る、陋巷の關門も暖かき朝日を負うて、小園の中は除雪して春蔬を發見する、病妻は新年なれば起つて銀絲鱠を料理する、稚子は母の料理したる魚の中から尺素書を探し尋ねる、醉眼は朦朧として己が歸路を覓むれば、松江の煙雨は晚に疎疎として落つ、

【餘論】釋迦に向つて法を說き、孔子に向つて道を說く、狂人でなければ、稚子の態、笑ふべきであるが、此の詩、前六句は自家に於ける情致である、而して第七句に至り、覓二歸路一とある、他人の家を訪問して、馳走されて歸宅するならば明白であるが、自分の家にては、詩脈が貫かざるの憾がある、但し詩體は極めて杜甫に類してある、こぶのである、

送杜介歸揚州

杜介が揚州に歸るを送る

再入都門萬事空。　再び都門に入つて萬事空し、
閒看淸洛漾東風。　閒に看る淸洛東風に漾ふを、
當年帷幄幾人在。　當年帷幄幾人か在る、
回首觚稜一夢中。　首を回らせば觚稜一夢の中、
采藥會須逢薊子。　采藥會須らく薊子に逢ふべし、
問禪何處識龐翁。　問禪何の處にか龐翁を識らん、
歸來鄰里應迎笑。　歸來鄰里應に迎笑すべし、
新長淮南舊桂叢。　新に長ず淮南の舊桂叢、

【題義】杜介の傳は詳かならず、此の人が故郷の揚州に歸るを送るのである、

【詩意】再度都門に入つてからは、從前のもの皆已に空と爲つてゐる、唯閒に看る所は洛水が淸く東風の爲め漾ふ景色のみである、當年帷幄に同じく在りし人は今は幾人を存するであらう、首を回らし馬組と石頭の兩處に參して頌を作る、錄に曰く、居士辭二藥山一、山命二十人禪客一、相送至二門首一、居士指二空中雪一云、好雪片片、不レ落二別處一、時有二全禪客一云、落二在什麼處一、士打一掌、全云、居士也不レ得二草草一云云、龐蘊は衡州衡陽縣の人、字は道玄、世世儒を業とす、嘗居士は少うして俗を脫し、禪法を志求す、貞觀中に石頭に謁して乃ち禪を問ふ、【六】淮南「招隱士」は淮南の小山作る所、其の辭に、桂樹叢生兮山之幽、偃蹇連卷兮枝相繆とある、

【字解】【一】再入　坡公愉林學士と爲つて都門に入る、【二】帷幄　「漢書高祖紀」に、運二籌帷幄之中一、決二勝千里之外一とある、【三】觚稜　堂殿上の最高轉角の處を謂ふ、上、屋背より下、前後の蒼際に訖るまで次を以て斜に削り、正三角形を成すもの是である、【四】薊子「後漢薊子訓傳」に、有二百歲翁一、自說兒童時、見二子訓賣二藥於會稽之市一、顏色不レ異二於今一、とある、【五】龐翁　「碧巖錄」の第四十二則に、龐居士は

て飄稜の方を看る十年は一夢の中であつた、君も歸つたら會ず劇子訓の如き隱士に逢ふであらう、又禪を問うて俗を脫したる龐翁の如き高人がドコかにあらう、乃ち鄰里も應に迎笑するであらう、殊に新に生長する淮南の舊桂叢も香氣が好からう、

【餘論】前半は自身が事を敍し、後半は杜介の事を敍す、律體として作法嚴密である、

和黃魯直燒香二首

四句燒香偈子。
隨香徧滿東南。
不是聞思所及。
且令鼻觀先參。

黃魯直の燒香に和す　二首

四句燒香偈子、
隨香東南に徧滿す、
是れ聞思の及ぶ所にあらず、
且く鼻觀を先參せしむ、

【字解】〔一〕四句偈　普通には諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂を指すが、今は金剛經の若復有人、於此經中、受持乃至四句偈等、爲他人說、其福勝彼の句を指すのである、偈は詩と同じく偶數を以て定む、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀(四句)、無我相、無人相、無壽者相、無衆生相(四句)、三句や五句の奇數は例外である、〔二〕聞香　微塵の香も、微塵の香も、十方に徧滿すると云ふが佛說である、〔三〕聞思　聞と思と修とを佛家にて之を三慧と云ふ、「楞嚴經」に、觀音由聞思修、入三摩地とある、〔四〕鼻觀　「楞嚴經」に、二十五圓通と云ふ說がある、其の第十四に謂はく、孫陀羅難陀、從佛出家、雖具戒律、心多散動、世尊教其觀鼻端白、逆觀鼻中之氣、出入如煙、身心內明、圓洞虛淨、極相漸消、鼻息成白、とある、

【題義】黃山谷が端坐して香を燒きし詩に和して作る、

【詩意】四句の偈を誦して香を燒いて坐する、其の妙香の氣や東南に徧滿して功德が多い、聞慧や思慧の及ぶ所でない、人の人品を淸うせんと欲するには、鼻觀を以て第一と爲すべきである、

〔一〕

萬卷明窗小字。
眼花只有爛斑。
一炷煙消火冷。
半生身老心閒。

〔二〕

萬卷明窗の小字、
眼花只爛斑あり、
一炷煙消して火冷か、
半生身老いて心閒なり、

【字解】〔一〕眼花　李白の詩、眼花耳熱後、意氣靑冥生とある、杜甫の詩、眼花落井水底眠とある、〔二〕爛斑　文采燦然の貌を謂ふ、李と杜との眼花は、醉人の眼に就いて言ふ、此の句は酒に關係無く、只文采の光曜を言ふか、

【詩意】萬卷の書を把つて明窗に讀む如何にも小字である、眼花が爛斑としてあるが爲め小字でも讀破する、今は靜坐して香を燒き煙消して火は冷かとなる、乃ち前半生は讀書の爲め勞勞と爲したのに、身老いて後の心の閒は眞に悟の境界である、

【餘論】前首は四句共に燒香今日の事を敍し、後首は萬卷の十二字、徒に讀書するも世俗と同じ、一炷の十二字は讀書以外に香を燒いて眞の境界に入るを敍す、人に和する詩は必ず其の人の詩體に擬し

て作る、和の本意は此に在る、此の二首卽ち山谷の宗旨を遺憾なく發揮するものである、

再和二首

置酒未逢休沐。　酒を置きて未だ休沐に逢はず、
便同越北燕南。　便ち越北燕南に同じ、
且復歌呼相和。　且く復た歌呼し相和す、
隔牆知是曹參。　牆を隔てて知る是れ曹參なるを、

【詩意】公然と未だ休浴の日を賜はつて酒を置くことは出來ぬ、便ち身は越北燕南定まりあることは無い、是の故に且く此に歌呼し相和して、長官も下官も共に同じく醉はんかな、

【字解】〔一〕越北燕南　「莊子天下篇」に、我知ニ天下之中央一、燕之北、越之南是也とある、燕は天下の北、越は天下の南、有窮の上より然るも、無窮の上よりは、北の更に北がある、南の更に南がある、〔二〕歌呼　「漢書曹參傳」に、相會後園近ニ吏舍一、吏舍日飲歌呼、從吏調ニ參游ニ後園一、幸ニ召按ニ之、廼反取ニ酒張ニ坐飲、大歌呼與相和とある、

〔二〕

丹青已是前世。　丹青已に是れ前世、
竹石時窺一斑。　竹石時に一斑を窺ふ、

【字解】〔一〕丹青　唐の王維の詩に、前身定畫師とある、〔二〕靖節　陶淵明、〔三〕高閒　韓退之の五字當ニ還ニ靖節一。　五字當に靖節に還るべし、
數行誰似高閒。　數行誰か高閒に似る、

文、送ニ高閒上人一序に、往時張旭善ニ草書一、不ニ治ニ他技一、喜怒窮窘、憂悲愉懌、怨恨思慕、酣醉無聊、不平有ニ動ニ於心一、必於ニ草書一發ニ之、故旭之書、變動騰ニ鬼神一、不ニ可ニ端倪一、以ニ此終ニ其身一、而名ニ後世一、今閒之於ニ草書一、有ニ旭之心一哉、又云閒師一ニ死生一、解ニ外縛一、是其爲ニ心泊然無ニ所ニ起、其於ニ世無ニ所嗜、泊與ニ淵相遭とある、

【詩意】詩を以て鳴り而かも丹青も前世の宿習であらう、是の故に其の描く所の竹石にても其の技の一斑を窺ふことが出來る、而して五言の詩は特に晉の淵明にも似て居る、數行書く草書も唐の高閒に似て居る、

【餘論】韻字を運用せん爲なるも、初めは曹參次は靖節次は高閒、妥當ならざるを覺ゆ、殊に高閒は韓文有るが爲め名を留むるのみにて、韓文が微りせば此の人の名は傳はらざるのである、然るに靖節を承けるに此の人を以てするは、不倫と言ふの外はない、坡公が靈にして如何に强辯するも余は其の不倫を叫ぶものである、

送楊孟容

我家峨眉陰。與子同一邦。　我が家は峨眉の陰、子と同一邦、
相望六十里。共飲玻璃江。　相望む六十里、共に玻璃江を飲む、

江山不レ達レ人。徧滿千家窗。
但苦窗中人。寸心不二自降一。
子歸治二小國一。洪鐘噎微撞。
我留侍二玉座一。弱歩敲豐扛。
後生多二高才一。名與黃童雙。
不肯入二州府一。故人餘老龐。
殷勤與問訊。愛惜雙眉厖。
何以待二我歸一。寒酷發春缸。

【字解】〔一〕峨眉陰　峨眉山は嘉州の峨眉縣に在り、而して眉州則ち其の陰に面す、故に州は此を以て名を得、山北を陰と曰ふ、〔二〕玻璃江　范石湖の「吳船錄」に、眉州城外、卽玻璃江也、冬時水色如レ此とある、〔三〕寸心不自降　心降は「詩」に、亦既覯止、我心則降とある、「三略」に、賢人之政、降レ人以レ體、聖人之政、降レ人以レ心、體降可二以國一始、心降可二以保一終、杜甫の詩に、悲傷君陣倒、更覺片心降とある、心降は所謂安心すること、不自降は卽ち反對にて不安心の態度を謂ふ、〔四〕噎微撞　洪鐘を力の無き者が撞つときは、音を發せざるを謂ふ、「魏志杜襲傳」に、萬石之鐘、不レ以二莛撞一起レ音とある、莛は草莖である、　噎は咽に同じ、〔五〕玉座　公が神女廟の詩に、玉座閑且閉とある、玉局に官を守ることを曰ふ、〔六〕敲豐扛　敲は敲傾、豐は豐偉、扛は扛舉、廣脚の人、重大なる責任は無理なりとの意である、〔七〕黃童　「後漢書黃香傳」に、黃博二學經典一能二文章一、京師號曰二天下無雙、江夏黃童一、山谷も黃姓、乃ち以て今山谷を稱したのである、〔八〕老龐　前首に記したる龐居士、〔九〕雙眉厖　一本霜眉龐に作る、龐も厖も同義であるが、厖の字が可い、

【題義】楊孟容は眉山の人、治安軍に知たるも、新法と議合せずして、元祐中退官す、哲宗、清節の二字を書して賜ふ、其の人品知るべきである、

【詩意】我が家は峨眉山の陰に在る、子と同一の邦である、其の地は六十里を隔たるも、飲む所の水は玻璃の同一江である、其の國の江山は人に背かず、其の翠色を以て千家の窗に入る、但苦む所は窗中に在るの人、各の生活に安心して居る者は無い、子の歸りて小國を治むるは良に可いが、惜むらくは子は洪鐘の若き人で小國なぞ治むる人ではない、我は留まりて玉座に侍する身なれども、君の洪鐘と反對に極めて弱歩の人間、重大なる責任を負ふ者でない、思ふに後生は高才が多い、君の名は山谷と雙んで高い、是の故に歸國しても肯て州府の中に入つてはならぬ、游ぶべき故人には老龐がある、其の老龐を殷勤に問訊し玉へ、僕は愛惜する子と山谷との雙眉の厖を、何を以てか子に我が歸を待てと言ふ、寒酷が正に春缸を發して飲むに宜しい、三人して飲むに宜しい、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、以二窄韻一見レ長、別無二佳處一と名評と謂ふ可し、山谷の詩、我詩如二曹郎一、淺陋不レ成レ邦、公如二大國楚一、呑二五湖三江一、赤壁風月笛、玉堂雲霧窗、句法提二一律一、堅城受二我降一、枯松倒二澗壑一、波濤所二春撞一、萬牛挽不レ前、公乃獨力扛、諸人方嗤點、渠非二鼂張雙一、但懷相識察、牀下拜二老龐一、小兒未レ可レ知、客或許二敦龐一、鹹堪レ壻二阿巽一、買レ紅纏二酒缸一、

見子由與孔常父唱和詩。輒次其韻。余昔在館中同舍。出入輒相聚飲酒賦詩。近歲不復講。故終篇及之。庶幾諸公稍復其舊。亦太平盛事也。

子由が孔常父と唱和の詩を見る、輒ち其の韻に次す、余昔館中に在つて、舍を同じうす、出入輒ち相聚まり酒を飲み詩を賦す、近歲復た講せず、故に終篇之に及ぶ、庶幾はくは諸公其の舊に稍復せよ、亦太平の盛事なり、

君先魯東家。門戸照千古。
君が先は魯の東家、門戸千古を照らす、

文章固應爾。須鬣餘似處。
文章固より應に爾るべし、須鬣似處を餘す、

雖非蒙倀狀。尙肖歷國苦。
蒙倀の狀にあらずと雖も、尙ほ歷國の苦に肖たり、

誦書口瀾翻。布穀雜杜宇。
書を誦して口瀾翻り、布穀杜宇に雜はる、

十年困奔走。櫛沐飽風雨。
十年奔走に困み、櫛沐風雨に飽く、

吾道其非邪。野處豈兕虎。
吾道其れ非邪、野處豈兕虎ならん、

灞陵閒老將。柏直口尙乳。
灞陵 老將 閒なり、柏直口尙ほ乳、

自君兄弟還。鼎立知有補。
君が兄弟還りてより、鼎立補ひ有るを知る、

蓬山耆舊散。故事誰刪去。
蓬山耆舊散じ、故事誰か刪去する、

來迎馮翊傳。出餞會稽組。
來迎馮翊傳ふ、出でて餞す會稽の組、

吾猶及前輩。詩酒盛冊府。
吾猶ほ前輩に及ぶ、詩酒冊府盛ん、

願君倡此風。揚觶斯杜舉。
願はくは君此の風を倡へよ、觶を揚げ斯に杜舉、

【字解】【一】孔常父　兄を文仲と曰ひ、弟の武仲字を常父と曰ふ、起居舍人、中書舍人、正字、校書郎等の官に歷任せり、【二】魯東家　「孔子家語」に、魯人不ㇾ識ニ孔子聖人一、乃曰彼東家邱者吾知ㇾ之矣とある、【三】門戸　孔子が門戸、魯縣闕里は孔子が居る所、【四】須鬣　須は鬚なり、【五】蒙倀狀　「荀子非相篇」に、仲尼之狀面如ニ蒙倀一とある、注に倀方相とある、四目の鬼の假面が方相にて、二目の假面を倀と曰ふ、【六】歷國苦　「莊子天運篇」に、孔子謂ニ老聃一曰、丘治ニ詩書禮樂易春秋六經一、自以爲久矣、執知ニ其故一矣、以好者、七十二君、論ニ先王之道一、而明ニ周召之迹一、一君無ㇾ所ニ鉤用一、莫矣夫、人之難ㇾ說也とある、【七】口瀾翻　自在に辯舌するを謂ふ、「漢書劉通傳」に、說ㇾ信曰鄙生一士伏ㇾ軾、掉ニ三寸舌一、下ニ齊七十餘城一とある、韓退之の詩に、掣拋陣維口瀾翻とある、【八】布穀　鳲鳩の異名、【九】杜宇　杜鵑なり、【一〇】兕　野牛にて一角にて青色の動物、「史記孔子世家」に、楚使ニ人聘ニ孔子一、陳蔡大夫謀曰、孔子用ㇾ於楚、則陳蔡用ㇾ事大夫危矣、於ㇾ是乃相與發ニ徒役一、圍ニ孔子於野一、不ㇾ得ㇾ行、孔子曰、詩云、匪ㇾ兕匪ㇾ虎、率ニ彼曠野一、吾道非耶、吾何爲於ㇾ此と、【一一】灞陵　漢の李廣、屏きて藍田南山中に居り射獵す、嘗て夜、一騎を從へて出で、人に從つて田間に飲し、還りて灞陵亭に至る、灞陵の尉、醉うて廣を呵止す、廣が騎曰く、故の李將軍なり、尉曰く、今の將軍すら夜行するを得ず、何ぞ乃ち故なるをや、廣を止めて、亭下に宿せしむ、幾何も無く、右北平の太守と爲る、灞陵の尉を軍中に伴ひ行き之を斬る、【一二】柏直　「漢書」に、魏王豹反す、漢王問ふ魏將は誰なる、對へて曰く柏直と、王曰く是口尙ほ乳臭、韓信に當る能はずと、【一三】鼎立　孔經父と孔常父と孔穀父の三人、【一四】馮翊　「前漢書蓋寬之傳」に、以爲ニ左馮翊一、寬之從ニ少府一出爲ニ左遷一、恐有ㇾ不ニ合ㇾ意とある、【一五】會稽組　「前漢書朱買臣傳」に、拜爲ニ會稽太守一、衣ニ故衣一、懷ニ其印綬一、步歸ニ郡邸一、入ニ室中一、守邸與共食、食且飽、少見ニ其綬一、守邸怪

レ之、前引ニ其綬一、觀ニ其印一、會稽太守章也、守邸驚列ニ中庭一拜謁、有レ頃長安廐吏、乘ニ駟馬一來迎、賈臣遂乘レ傳去と、【一六】 摺府　藁ニ書冊ニ之府、圖書寮、圖書館皆是れ、【一七】 揚觶　「禮記檀弓」に、知悼子卒未レ葬、平公飲レ酒、師曠、李調、侍坐鼓レ琴、杜蕢入レ斝、酌而飲ニ寡人一、杜蕢、洗而揚レ觶、公謂ニ侍臣一曰、如ニ我死一則必毋レ廢ニ斯斝一也、至ニ於今一飲レ斝、斯揚レ觶、謂ニ之杜舉一とある、

【題義】 子由と孔常父とが唱和せる詩を見て、其の韻に次し、坡公自心の思ふ所を記するのである、昔は館中に於ても同僚が勤務の餘暇、會飲して互に胷襟を披きたることがある、其の事が今絶えて居る樣であるが、昔日に回復するが、是れ太平を喜ぶ一助であると云ふ、

【詩意】 孔常父の家は孔子の系統なれば、其の家門の光彩は千古までも映照する、常父が作る文章は固より語の如く簡勁である、鬚髮も先聖に似たる處あるかと思ふ、面貌は俱を蒙る樣な狀ではないが南船北馬辛勞せられたることは極く肖てゐると思ふ、書を誦すること口に瀾を翻す如く、又布穀と杜宇とが鳴聲頻なると同じく、余は其の息むこと無きを知る、而かも十年は所謂衣食の奔走に困み、風に櫛り雨に沐する辛苦を嘗めた、吾が道は其れ非であるか、假令野に處し山に奔るも我は兕虎では無い、李廣の如き名將も灞陵に苦み、柏直は奇才あるも尙ほ乳臭である、所が君が兄弟が歸還してより、鼎立するの才智を以て各の補ふ所がある、昔游びし蓬山には耆舊四散して、故き事は皆刪り去る、幸にして來迎せる馮翊の傳がある、出でて餞するに人にも會稽の組の淸廉がある、吾輩も吾輩の前輩も共に冊府に於て詩酒を盛んに太平を頌すべきや、願はくは君不遇は世の常、文酒を以て此の間に樂むことを求めよ、古も觴を揚げて斯に之を杜舉せんと謂ふであらう、

【餘論】 孔子が道の爲め困厄せられしことより、李廣に及び朱買臣に及び、言はんと欲したる所、言ひ盡したるの感がある、但し余が若し紀曉嵐ならば、結句の五字は不レ成レ語と評したいのである、

趙令晏崔白大圖幅徑三丈

扶桑大繭如ニ甕盎一。
天女織レ綃雲漢上。
往來不レ遣ニ鳳銜梭一。
誰能鼓レ臂投ニ三丈一。
人間刀尺不敢裁。
丹青付與濠梁崔。
風蒲半折寒雁起。
竹間的皪橫ニ江梅一。
畫堂粉壁翻ニ雲幕一。

趙令晏の崔白が大圖幅徑三丈

【字解】 【一】 甕盎　宋の李昉等の編する「太平廣記」に、聞客者、濟陰人、嘗種ニ五色香艸一、積數十年、服ニ食其實一、忽有ニ五色蛾一、集ニ香艸上一、客收而瘞レ之以レ布、生ニ繭甕一焉、甕田時有ニ一女一、自來助レ客養レ甕、亦以ニ香艸一飼レ之、得レ繭百二十頭、繭大如レ甕、每ニ一繭繰一、六七日乃盡、繰訖俱去とある、【二】 天女　「史記天官書」に、織女天女孫也とある、左太沖が「吳都賦」に、泉室潛織而卷レ紬とある、【三】 鳳銜梭　唐の韓叔倫の詩に、織女辭ニ鳳梭一、停レ織歸

十里江天無處著。　十里江天處著無し、
好臥元龍百尺樓。　好し臥さん元龍の百尺樓、
笑看江水拍天流。　笑つて看る江水天を拍つて流るるを、

神・山林・人物・飛走の類、絶妙ならざるは無し、宋の畫院教諭の者、必ず黄筌父子を以て式と爲す、白と吳元瑜出づるに及んで、其の格遂に變ず、【四】雲幕　漢の武帝作る所の宮殿の名、杜甫の詩に、雲幕椒房親とあり、【六】元龍　「三國志」に、許汜與劉備に在劉表座、共論天下人、汜曰陳元龍、湖海之士、豪氣不除、昔遭亂過下邳、元龍無客主之意、自上大牀臥、使客臥下牀、備曰、君今天下大亂、所望君、憂國忘家、有救世之意、而君求田問舍、是元龍所諱也、何緣當與君語、如小人、欲臥百尺樓上、臥君於地、何但上下牀之閒邪とある、【七】水拍天　韓退之の詩、海氣昏昏水拍天とある、劉禹錫の詩に、蜀江春水拍天流とある、

【題義】趙令晏が家に蓄ふる崔白の大幅を觀て其の畫を讃して作る、

【詩意】扶桑の大繭は宛かも甕盎の如くである、思ふに天女が雲漢の上で織綃したるものであらう、天女の使令と爲つて鳳凰が往來して梭を銜むの役を務むるのでなければ、誰か能く臂を鼓して三丈も有る大なるものを投ずることが出來るか、人間の刀尺を以て裁縫したものとは思へず、而して此の壯大美麗なる絹上に筆を染めたる人は誰である、それは濠梁の崔白で、其の描ける圖は何であるか、風蒲が半ば折れたる處より寒雁が起たんと欲し、竹間の的皪たる處に江梅が横出せる畫である、是の圖を挂ける處は如何なる處である、畫堂粉壁の上に於て雲幕翻る、十里の江天は物の一微塵も著處は無い、展觀して好し臥せん元龍の百尺樓に、而して笑うて看る江水の天を拍つて流るる雄壯なるを、

【餘論】紀曉嵐は扶桑以下四句二十八字を批圈して以て奇偉と評す、查初白は誰能の十四字を評して近俚と評す、奇偉の評は的確なりと思ふ、近俚の評は當らずと思ふ、三換韻にて作る、

次韻張昌言給事省宿

張昌言給事が省に宿するを次韻す

馮顚久已敝殘雪。　馮顚久しく已に殘雪に敝ち、
戎眼何曾眩落暉。　戎眼何ぞ曾て落暉に眩せん、
朔野按行猶僻躍。　朔野按行して猶ほ僻躍、
東臺瞑坐覺烏飛。　東臺瞑坐して烏飛を覺ゆ、
漫誇年少容吾在。　漫に誇る年少吾を容るる在るを、
若鬬尊前舉世稀。　若し尊前に鬬はば舉世稀なり、
待向嵩陽求水竹。　嵩陽に向つて水竹を求むるを待つて、
一犂煙雨伴公歸。　一犂の煙雨公に伴うて歸らん、

【字解】【一】馮顚　漢の馮唐を謂ふ、顚は頭を謂ふ、郎中と爲つてより一官遷まず、頭髮雪の如くなるに及ぶ、【二】戎眼　晉の王戎、裴楷は戎を目して曰く、戎眼爛爛、如電下電と、日を觀るも眼眩せず、【三】朔野　朔北塞野を謂ふ、【四】東臺　唐龍朔二年に給事中を改めて東臺舍人と爲す、【五】烏飛　披公の自注に、道家有烏飛入宮之說とある、【六】漫誇　樂天の句に、猶有誇長少年處、笑呼張丈與殷兄とある、【七】尊前　唐の牛僧孺が席上贈劉夢得詩に、休論世上昇沈事、且圍尊前見在身とある、

【題義】張昌言名は問が給事の官にて省中に宿泊せる詩に次韻して作る、昌言は良吏として民に信

敬せらるる人、

【詩意】漢の馮唐は官吏と爲りて、一官久しく移らず頭上に殘雪を敍する年と爲る、又晉の王戎は其の人相眼光が爛爛として、落暉に對して聊かも眩しない、君は曾て朔北に使節と爲つて行き而かも意氣は崔躍したのである、又時には東臺卽ち門下省に在つて天仙の道をも慕ふ、自ら誇りて言ふ年少も吾が元氣を容れて同游すると、酒を飲んで娛樂するときは決して人後に落ちた事は無い、君が嵩陽に向つて歸る日を待ち、同じく一犂の煙雨に水竹を看んと思ふのである、

【餘論】別に議すべき所の無き詩なるが、第二句、眩二落暉一とあるが、普通人でも落暉には眩することが無い、況んや眼光の爛爛たる者に於てをや、日暉と改むれば可と思ふ、傳にも視レ日不レ眩とあるも、落暉とは無い、殘の字に對を取る爲であらうが、戎眼の字が死んでしまふ、

次韻三舍人省上【自注】三月二十九日作。明日駕幸二景靈宮一。

三舍人の省上に次韻す【自注】三月二十九日作る、明日駕、景靈宮に幸す、

紛紛榮瘁何能久。
雲雨從來翻覆手。
悅如一夢墮枕中。
却見三賢起江右。
【自注】曾子開。劉貫父。孔經父。皆江西人。
嗟君妙質皆瑚璉。
顧我虛名俱箕斗。
明朝冠蓋蔚相望。
共扈翠輦朝宣光。
武皇已老白雲鄉。
正與羣帝驂龍翔。
獨留杞梓扶明堂。

紛紛たる榮瘁何ぞ能く久しからん、
雲雨從來手を翻覆す、
悅として一夢の枕中に墮するが如く、
却つて三賢の江右に起るを見る、
嗟す君が妙質皆瑚璉、
顧みるに我が虛名俱に箕斗、
明朝冠蓋として相望み、
共に翠輦に扈して宣光に朝す、
武皇は已に老す白雲の鄉、
正に羣帝と驂龍翔り、
獨り杞梓を留めて明堂を扶く、

【字解】【一】雲雨　杜甫の詩に、翻レ手作レ雲覆レ手雨、紛紛輕薄何須レ數とある、悅は悅惚、ウツトリする貌、【二】三賢　曾子開と劉貫父と孔經父、【三】瑚璉　殷の六瑚、夏の四璉、宗廟に黍稷を盛る器、「論語公冶長」に、子貢問曰、賜也如何、子曰女器也、曰何器也、曰瑚璉也とある、【四】虛名　古詩に、南箕北有レ斗、牽牛不レ負レ軛、良無二磐石固一、虛名復何益とある、【五】冠蓋　前に注せり、【六】宣光　王明清の「揮麈錄」に、英宗御容殿、舊名英德、元豐中、改曰二治隆一、元祐初、卽二治隆之後一、建二宣光殿一、以奉二神宗一とある、【七】武皇　「飛燕外傳」に、飛燕進二合德一、成帝謂爲二溫柔鄉一、曰吾老二是鄉一矣、【八】驂龍翔　杜甫の詩に、矯如二羣帝驂レ龍翔一とある、【九】杞梓　孔穎達が攜と稱する「孔叢子」に、聖人官レ人、猶二大匠用レ木、取二其長一、棄二其短一、故杞梓運斤、而有二數尺之材一、良工不レ棄とある、杞は柳に似、梓は楸に似た喬木である、

【題義】曾劉孔の三舍人が省上にて作れる詩を次韻したのである、

【詩意】世上に紛紛として多き榮や瘁は久しきものは無い、或は雲と爲り、或は雨と爲り、一寸手を翻覆する間に變る、宛かも恍惚として邯鄲一夢中に過ぎたのと同じである、卻いて見るに三賢は皆江

右より身を起し、其の藝術に於ける妙質は皆瑚璉である、而して我自身を顧みれば名と實と副はざる箕斗の如きである、思ふに明朝は參內するに冠蓋が蔚として盛んなる望であらう、共に翠蓋に扈從して宣光殿に朝謁する、其の宣光殿に謁する天子は已に白雲の鄉に老いて久しい、正に羣帝と龍馬を驂にして翔つて居らるるであらう、人間には三賢の如き杞梓を留めて明堂を扶翼せしめらる、

【餘論】此の篇は兩度換韻して作る、初めは世上一般を敍し、次は三賢を敍し、而して我に及び、結末は天子の事を敍し、作旨明白である、

送錢承制赴廣西路分都監

錢承制が廣西路分都監に赴くを送る

當年我作表忠碑。
坐覺江山氣未衰。
舞鳳尙從天目下。
收駒時有渥洼姿。
踞牀到處堪吹笛。
橫槊何人解賦詩。
知是丹霞燒佛手。
先聲應已懾羣夷。

【字解】【一】表忠碑　表忠觀は吳越王錢氏の墳廟、杭州臨安に在る、熙寧十年、趙抃が奏して以て立つる所、公が碑文を作る、「施注」に、東坡作表忠觀碑、有持以觀王荊公、讀之沈吟曰、此何語耶、時客有在旁者、遽指摘而詆譏之、荊公不答、讀之再三、又攜之而起、行且讀、都歎曰、此三王世家也、可謂奇文、客大慚、或云客乃其壻蔡卞也、【二】江山　錢唐江と天目山を特に言ふ、【三】舞鳳　「杭州圖經」に、錢氏世葬臨安、先是有鳳舞於上者云、天目山前兩乳旁、鸞飛鳳舞下錢塘、【四】渥洼　水の名、甘肅安西縣に在り、黃河の支流、「史記」に、嘗得神馬渥洼水中とある、【五】吹笛　「晉書桓伊傳」に、伊有蔡邕柯亭笛、常自吹之、王徽之、赴召京師、泊舟青溪側、素不相識、伊於岸上過、徽之令人謂曰、聞君善吹笛、試爲我一奏、伊時已顯貴、素聞徽之名、便下車踞胡牀爲作三調、弄畢便上車去、客主不交一言、「杜甫傳」に建安之後、曹氏父子、鞍馬間爲文、往往橫槊賦詩、故其狀拘揚寬衰、悲壯之作、尤極於古とある、【六】丹霞　丹霞名は天然、唐の元和中、洛京に至りて、伏牛和尙と友となる、後慧林寺に於て、天大に寒きに遇ふ、木佛を取つて之を焚く、或之を譏る、師曰く吾燒いて舍利を取る、人曰く木頭何か有る、師曰く爾が若き者、何ぞ我を責めんやと、元和中、南陽丹霞山に挂錫す、長慶四年入寂す、年八十六、【七】先聲　「漢書韓信傳」に、先聲而後實とある、

【題義】錢氏が承制の官を帶し、而して廣西路の分都監と爲つて赴任するを送る詩である、嘉祐五年各路に兵馬都監を置いたのである、

【詩意】當年に於て我は君が祖先の爲め表忠觀碑を作つた、坐に覺ゆ江山の秀氣が依然として盛んなるを見る、瑞を報する鳳凰は天目山より降下する、祥を表する駒は收め取つて知る是れ渥洼の靈種である、且つ君は吹笛に巧なれば、到處に牀に踞して吹くであらう、槊を橫へて詩を賦す是れ豪傑の爲す所である、君の技能は當年丹霞が燒佛したのと同じ、君が名聲を聞いただけにて已に羣夷を懾れ知る是れ丹霞燒佛の手、先聲應に已に羣夷を懾れしむべし、

雨山空缺橫爲案、數百年中出五王、【八】渥洼　水の名、甘肅安西縣に在り、黃河の支流、「史記」に、嘗得神馬渥洼水中とある、

しむるに足る、

【餘論】紀曉嵐は此の篇を評して曰く、亦是應酬之作、而有二點綴一、有二開合一、便覺二情致不レ同、余案ずるに一句より六句に到る間は一氣呵成なるも、第六句に至りて禪偈に墮したるの感がある、蓋し此の時廣西の佛寺紛紜の事ありて、錢氏佛像を碎きて江中に投じたることを表はさんと欲したからであらうが、然らば別の文字を以て出すを可と思ふのである、余先年甲州の慧林寺に游び、一絕を得、

欲レ見奇珍與二怪珍一、私希院主幸無レ瞋、丹霞順世經二千載一、我是曾非燒佛人

次韻曾子開從駕二首　曾子開が從駕に次韻す　二首

槐街綠暗雨初勻。
瑞霧香風滿後塵。
清廟幸同觀濟濟。
豐年喜復接陳陳。
雍容已饗天庖賜。
俯伏初嘗貢茗新。

【字解】〔一〕槐街　韓退之の詩に、槐樹十二街とある、〔二〕滿後塵　杜甫の詩に、青雲滿後塵とある、〔三〕濟濟　美くしく且つ盛なる貌、「毛詩大雅」に、濟濟多士、文王以寧とある、〔四〕陳陳　「前漢書」に、太倉之粟、陳陳相因とある、〔五〕雍容　「隋書音樂志」に、雍容千門、王城九軌とある、天子幸する路、〔六〕

槐街綠暗雨初勻。
瑞霧香風後塵滿。
清廟幸同觀濟濟。
豐年喜復接陳陳。
雍容已饗天庖賜。
俯伏初嘗貢茗新。

槐街綠暗くして雨初めて勻し、
瑞霧香風後塵滿つ、
清廟幸に同じく濟濟を觀、
豐年喜ぶ復た陳陳に接するを、
雍容已に饗く天庖の賜に、
俯伏初めて嘗む貢茗の新なるを、

輦路歸來聞好語。
共驚堯顙類高辛。

輦路歸來好語を聞く、
共に驚く堯顙高辛に類するに、

【詩意】馳道の兩街路樹である槐は綠色が雨の爲め一樣に濕うて勻しく、瑞霧と香風は後塵に布滿する、天子が清廟に幸するとき從ふ者は濟濟である、又豐年が連續する爲に倉には粟が陳陳と積んである、雍容として已に天庖卽ち宮廷の料理を賜はるに饗くのみではない、俯伏して初めて貢茗の新味を嘗むることもある、輦路を歸來して君は好語を聞かされた、君も我も共に驚いたのは先帝と今帝との風彩が餘りに肖て居られることだ、

堯顙　哲宗を指す、【七】高辛　神宗を指す、

〔二〕

入仗魂驚媿草萊。
一聲清蹕九門開。
暉暉日傍金輿轉。
習習風從玉字來。
流落生還眞一芥。
周章危立近三槐。

入仗魂驚きて草萊を媿づ、
一聲の清蹕九門開く、
暉暉たる日は金輿に傍うて轉じ、
習習たる風は玉宇より來る、
流落して生還眞に一芥、
周章危立三槐に近し、

【字解】〔一〕入仗　杜甫の詩に、侍臣請二入仗一とある、百官が參內するを入仗と謂ふ、〔二〕草萊　「史記趙世家」に、文レ身斷レ髮、投二草萊一而邑居とある、荒れたる地を謂ふ、〔三〕清蹕　天子の出幸を報じて道路を清めて警戒する、〔四〕暉暉　杜甫の詩に、竹日靜暉暉とある、〔五〕習習　「詩經風」に、習習谷風、

【自注】學士 近ニ執政一

道傍倘有山中舊。　道傍倘し山中の舊あらば、
問レ我收レ身早晚回。　我に問はん身を收めて早晚か回ると、

輕禽狡獸、周章爽騎とある、あわてる氣味にも、周旋殷舒の意にも用ふ、【八】三槐　三公の義、周代の制として、朝廷に三槐樹を植ふ、三公が之に面して坐し、左右に九棘樹を植ふ、公卿大夫等が之に對して坐し、以て訟を聽く、

【詩意】入仗して第一に驚魂することは草萊に甘んじて居るを媿づ、一聲清蹕するや九門忽ち開き、暉暉たる日色は金輿に傍ひ得て轉ずるを見る、習習たる風聲は玉宇の高きより來るを聞く、我は流落して幸に生還を許された一芥の如き身である、是の故に三槐に近くも周章して危立する狀である、道傍に倘しや山中の舊知あらば、我に向つて問ふであらう、汝は身を收めて早晚か回るのであると、

【餘論】紀曉嵐の評に曰く、此種非二東坡所一長、凡詩人亦多不レ長二於此一、而長二於此一者、又往往非二詩人一と、入仗の詩を評して、如レ此說來、又不レ合二廟廊之體一と、二評の中、後首の評は實に當れるを覺ゆ、前首の評の如きは要するに何事を言つたのであるか、此の評を評する人あらば、余は數を乞はんと欲するのである殊に、一聲、一芥、日傍、道傍、此の如き同字の使用法、全く邪魔外道である、坡公の眞に非ずと思ふ、

再和二首

眼花錯莫鬢霜勻。
病馬羸驂只自塵。
奉引拾遺叨侍從。
思歸少傅羨朱陳。
衰年壯觀空驚目。
險韻清詩苦鬬新。
最後數篇君莫厭。
搗殘椒桂有餘辛。

再和　二首

眼花錯莫として鬢霜勻し、
病馬羸驂只自ら塵る、
引を奉ずる拾遺侍從を叨にし、
歸を思ふ少傅朱陳を羨む、
衰年の壯觀空しく目を驚かし、
險韻の清詩苦んで新を鬬はす、
最後の數篇君厭ふ莫かれ、
搗殘の椒桂餘辛あり、

【字解】【一】眼花　前に辨ぜり、【二】錯莫　蕭索と同じ、【三】奉引　杜甫の詩に、拾遺會奏數行書、爛性從來水竹居、來引遙騎沙苑馬、岡棲罷釣錦江魚とある、杜甫は官拾遺である、【四】思歸　白樂天の詩に、憶昨旅游初、迨レ今五十春、孤舟三迴レ楚、羸馬四經レ秦、一生苦如レ此、長羨朱陳民と、樂天は官太子少傅を以て致仕す、【五】衰年　白樂天の詩に、攬レ手驚二衰年一とある、【六】險韻　窄韻と同じ、【七】椒桂　「庾溪詩話」に曰く、東坡兩和、辛字皆工、最後數篇君莫レ厭、搗殘椒桂有二餘辛一、案楚辭、昔三后之純粹兮、固衆芳之所レ在、雜二申椒與二菌桂一兮、豈唯紉二夫蕙茝一、蓋以二椒桂蕙茝一、皆芳木之香者一、喻二賢人一也、而四溟詩話改二其句一云、讀二祖君詩一、何所レ似、搗殘蕙桂有二餘辛一、以爲坡讀二首唱多二辣氣一、此何理也、坡爲レ人慷慨疾レ惡、亦時見二於詩一、有二古人規諷體一、然亦距青效ヲ閒閒以二鄙語一相譬二說、恐レ誤二後人心術一、不レ得レ不レ辨、「韓詩外傳」に、蕙桂不レ因レ地而辛とある、

【詩意】唯眼花が錯莫たるのみでは無い鬢霜も一列に勻し、譬へて見れば病馬や羸驂が只自ら塵るる

と同じものである、引を奉ずるの拾遺は侍從の職を叨にして、歸を思ふの少傅は朱陳邨を羨む、衰年に及んで壯觀は唯空しく目を驚かすのみである、險韻なる清詩は苦んで新を闘はす、最後の數篇は益す努力して厭うてはならぬ、搗き殘せる椒桂は殊に餘辛がある、

〔一〕

憶觀滄海過東萊。
日照三山迤邐開。
桂觀飛樓凌霧起。
仙幢寶蓋拂天來。
不聞宮漏催晨箭。
但覺簷陰轉古槐。
供奉清班非老處。
會稽何日乞方回。

〔一〕

滄海を觀て東萊を過ぎんと憶ふ、
日は三山を照らして迤邐として開く、
桂觀飛樓霧を凌ぎて起り、
仙幢寶蓋天を拂うて來る、
聞かず宮漏の晨箭を催すを、
但覺ゆ簷陰古槐轉ずるを、
供奉清班老處にあらず、
會稽何の日か方回を乞はん、

【字解】〔一〕東萊　地名、漢代之を置く、今の山東掖縣治、滄海の南岸である、〔二〕三山　李白の詩に、三山半落青天外とある、〔三〕迤邐　旁行遠延也と注して、つらなりつづくのである、梁の簡文帝の詩に、迤邐觀鳥翼とある、〔四〕桂觀　「史記封禪書」に、公孫卿言、仙人好樓居、於是上令長安作蜚廉桂觀とある、「吳越春秋」に、范蠡爲句踐、立飛翼樓、以象天門とある、〔五〕仙幢寶蓋　幢は幡と同じ、旌旗の屬、蓋は傘に似たるもの、仙觀佛寺には必ず是を用ふ、〔六〕宮漏　「周禮」に、時を計る具を漏と曰ふ、晝以爲漏、漏之筒畫夜共百刻、冬夏之間、有長短焉、太史立成、法有四十八節とある、杜甫の詩、五夜漏聲催曉箭とある、〔七〕供奉　杜甫の詩に、投老歸來供奉班とある、〔八〕會稽　公の自注に、時方閑會計守とある、「晉都愔傳」字方回、除太常、固讓不拜、樂補遠郡、從之、出爲會稽內史、久之乞骸骨、因居會稽とある、

【詩意】滄海を觀ることを憶念して今東萊を過ぎる、時宛かも日光が三山を照らして迤邐として山色が開く、而して桂觀も飛樓も高く霧を凌ぎて起り、仙幢も寶蓋も天を拂うて來るを見る、宮漏が晨箭を催すことは未だ聞かぬが、簷陰に當つて古槐の影が轉じたるは知覺する、供奉の清班は重き役なるも是にて老ゆるは志でない、會稽郡の邊土に向つて古の方回と節を同じうするは何の日である、

【餘論】此の篇に憶觀と桂觀と同字あるが、使用法上、名詞と動詞との別あれば、妨げざるものと思ふ、

次韻劉貢父省上

劉貢父が省上に次韻す

密雲今日破郊西。
疎雨翛翛未作泥。
要及清閒同笑語。
行看衰病費扶攜。
花前白酒傾雲液。

密雲今日郊西に破る、
疎雨翛翛未だ泥を作さず、
要ず清閒に及んで笑語を同じうせん、
行くゆく看る衰病扶攜を費すを、
花前の白酒雲液を傾け、

【字解】〔一〕密雲　「易」に、密雲不雨、自我西郊とある、〔二〕翛翛　毛詩豳風に、予尾翛翛とある、〔三〕未作泥　杜甫の詩、山雨不作泥とある、〔四〕雲液　前に辨ぜり、〔五〕月題　「古樂府焦仲卿妻」の詩に、鶏鳴青雀鳥月題とある、「莊

戸外青驄響月題。　戸外の青驄月題響く、
不用臨風苦揮涙。　用ひず風に臨んで苦に涙を揮ふを、
君家自與竹林齊。　君が家自から竹林と齊し、

【自注】貢父詩中。有不及與其兄原甫同舟時之嘆。然其兄子仲馮今爲起居舍人。

【詩意】密雲が天を鎖してあつたが、今日は郊西の方より先づ破れて來た、疎雨が倘倘と過ぎ、路は未だ泥土と作らない、要ずや清朗を得て笑語を同じうせんと思ふ、且つ行くゆくは互に衰病の身と爲らば其の扶攜を費すに惜んではいかぬ、花前に於て白酒は雲液の美を飲み、戸外に於て青驄の嘶く聲を聞いて直ちに知る月題であることを、風に臨んで泪を揮ふ事なぞは用らぬ、君が一家は皆俊秀にて竹林と齊しと思ふ、

【餘論】貢父は兄を原父と稱し、兄の子を仲馮と稱し、今起居舍人の官に居て、一家は良に闕事無し、原父の如きは雄文博學、天下師表と仰がる、坡公が此の結句を以て稱揚する所以である、密雲、雲液、此の同字は法として許さぬもの、病と謂ふべきか、

再和

當年曹守我膠西。　當年曹守我は膠西、
共厭餔糟與汨泥。　共に厭ふ餔糟と汨泥と、
自古赤丸成習俗。　古より赤丸習俗を成し、
因公黃犢免提攜。　公に因つて黃犢提攜を免る、
生還各有青山興。　生還して各の青山の興あり、
病起猶能小字題。　病起して猶ほ能く小字を題す、
莫怪歌呼數相和。　怪む莫かれ歌呼數ば相和するを、
曾將獄市寄全齊。　曾て獄市を將て全齊を寄せたり、

【自注】貢父爲曹州。盜賊皆奔鄆境。曾有詩云。從教晉盜稍奔齊。

劍を賣つて牛を買ひ、刀を賣つて犢を買はしめて曰く、何爲れぞ牛を帶び、犢を佩ぶるやと、【癸】其後相一曰、以齊獄市一爲寄、愼勿提也、注に曰く、獄市者、衆受善惡、若窮極姦人、姦人無所容竄、久且爲鳳、秦人極刑而天下畔とある、貢父が曹州に知と爲る、盜賊皆鄆境に奔る、

【詩意】當年君は曹州を守り我は膠西を守りしことがある、而して醉うたる世人と共に醉ひ、濁りたる衆人と共に濁ることは、君も我も共に厭うた、前古より赤丸や黑丸を探りて惡事をする習俗は如何ともすることが出來ない、幸に君の力に賴つて刀犢賣買の徒と提攜することを免る、生還して後は各の青山に游ぶの興がある、病後と雖も猶ほ能く小字を題書することができる、他人は怪んではならぬ、

【字解】〔一〕曹守　貢父は熙寧中曹州に知と爲り、坡公は膠西即ち密州に知たり、〔二〕餔糟與汨泥　「楚辭」に、漁父謂屈原曰、世人皆濁、何不淈其泥而揚其波、衆人皆醉、何不餔其糟而歠其醨とある、〔三〕赤丸　「前漢書尹賞傳」に、人殺しを職と爲す不良少年數、探丸の法あり、赤丸を得る者は武吏を斫り、黑丸を得る者は文吏を斫り、白丸を得る者は屍斂を始末する、〔四〕黃犢　漢の龔遂は渤海太守と爲る、民に刀劍を帶持する者あり、〔五〕獄市　「漢書龔遂傳」に、參去、屬之市、

我輩が歌呼して唱和を數ばするを、曾ては獄市を將て全齊を寄せし同官の人である、

【餘論】此の篇は可も無く、又不可も無し、坡公として平平凡凡に屬するもの、

送顧子敦奉使河朔

顧子敦が使を河朔に奉ずるを送る

我友顧子敦。軀膽兩俊偉。
便便十圍腹。不但貯書史。
容君數百人。一笑萬事已。
十年臥江海。了不見慍喜。
磨刀向豬羊。釃酒會鄰里。
歸來如一夢。豐頰愈茂美。
平生批勅手。濃墨寫黃紙。
會當勒燕然。廊廟登劍履。
翻然向河朔。坐念東郡水。
河來屹不去。如尊乃勇耳。

我が友顧子敦、軀膽兩ながら俊偉、
便便十圍の腹、但書史を貯ふるのみならず、
容るる君數百人、一笑萬事已む、
十年江海に臥し、了に慍喜を見ず、
刀を磨して豬羊に向ひ、酒を釃みて鄰里を會す、
歸來一夢の如く、豐頰愈よ茂美、
平生批勅の手、濃墨黃紙に寫す、
會す當に燕然に勒し、廊廟劍履登るべし、
翻然河朔に向ふ、坐に念ふ東郡の水、
河來るも屹として去らず、尊の如きは乃ち勇のみ、

【字解】〔一〕十圍　「三國志」に、董卓腰十圍とある、〔二〕磨刀　「古樂府木蘭歌」に、小弟聞二姉來一、磨刀霍霍向二豬羊一とある、〔三〕釃酒　「毛詩」に、釃レ酒有レ衍、籩豆有レ踐とある、〔四〕豐頰　馮應榴は云ふ、「獨醒雜志」に、子敦肥碩、嘗レ暑袒揭據レ案而寐、東坡書二四大字於其側一曰、顧屠肉案、余曾敍行の著はせる「獨醒雜志」を閲するに十卷中に此の記事無し、且らく合注存する後を記す、〔五〕批勅手　「唐李藩傳」に、遇二給事中一、側有レ不レ便、就二勅尾一批レ卻之、吏驚請レ聯二他紙一、藩曰聯レ紙是牒、豈曰レ勅耶と、〔六〕勒燕然　後漢竇憲、擊二匈奴一大破レ之、遂登二燕然山一、刻レ名勒レ功、紀二漢威德一、令二班固作一銘、東軒筆錄、顧子敦、好談レ兵、劉攽目爲二顧將軍一云云、故先生詩亦用レ勒二燕然一事也とある、〔七〕廊廟登劍履　孔武中が顧子敦の河北に赴くを送る序に云ふ、上之二年、子敦自二河東轉運使一召二給事中一、在二門下省一、事有レ不レ便、輒爭辯之、議論堅決、不二少迎合一、時河北數有二水災一、澶魏故道、久湮未レ復、子敦拜二天章閣待制一、使二河北一、士大夫以爲何爲二數州患一、雖レ急一方事也、子敦獨日夜計畫、以爲二己任一、非二確然不易一、其肯爲レ之乎、〔八〕東郡水　公が送二巻元輪一の詩に、聽前劉、不二肯徑往一、以蹈二後悔一、子敦獨日夜計畫、以爲二己任一、非二確然不易一、其肯爲レ之乎、〔八〕東郡水　公が送二巻元輪一の詩に、坐憂東郡決、老守思二王尊一とある、今も同じ意である、〔九〕屹不去　王尊が東郡太守と爲る、其の時や水災あり、老嫗奔走して防水に努む、王尊は主簿が泣いて其の危救を說くも聽かずして、獨り屹然として、動き去らざるのである、

【題義】顧子敦が勅使と爲つて河朔に赴くを送る詩である、

【詩意】我が友人の顧子敦は、軀も膽も共に俊偉である、便便たる其の腹は十圍もある、其の腹中に貯ふるものは但書史のみではない人を容れるの量が十分にある、而して一笑の裏に萬事を解決する、十年の間浪人を爲したるも、其の間一度も慍と喜との顏色を見せない、客を遇せんと欲するときは自ら刀を磨して豬羊を屠り、酒を釃みて以て鄰里の諸人と會談する、其の十年間を過ぎ歸來して見れば一夢と同樣である、豐頰愈よ茂美で衰容は聊かも無い、今や給事中の官に在り、濃墨を以て黃紙に書して詔勅を批評し、少しも迎合することは無い、會す當に功を燕然山に勒し、劍履のままにて殿に上

るの優遇を受けらるるに至るであらう、翩然として河朔郡に向はる、僕は公の赴任を聞いて昔の王尊の事を想像する、東郡に若しや水災ある場合、公は屹然として獨守するの人であることを、

【餘論】此の篇二十句一韻の詩である、顧子敦の面目躍如たるものがある、

次韻子由送家退翁知懷安軍

子由が家退翁の懷安軍に知たるを送るに次韻す

吾州同年友。粲若(一)琴上星。　吾州同年の友、粲として琴上の星の若し、
當時功名意。豈止拾(二)紫青。　當時功名の意、豈止だ紫青を拾はん、
事既與(三)願違。天或不(四)假(五)齡。　事既に願と違ふ、天或は齡を假さず、
今如(六)圖中鶴。俯仰在(七)一庭。　今圖中の鶴の、俯仰して一庭に在るが如し、

【自注】吾州同年友十三人。今存者六人而已。故有琴上星圖中鶴之語。

退翁守(八)清約。霜菊有(九)餘馨。　退翁清約を守り、霜菊餘馨あり、
鼓笛方入(十)破。朱絃微莫(十一)聽。　鼓笛方に破に入る、朱絃微にして聽くこと莫し、
西南正春旱。廢沼黏(十二)枯萍。　西南正に春旱、廢沼枯萍黏す、
翩然一麾去。想見靈(十三)雨零。　翩然一麾し去つて、想ひ見る靈雨の零つるを、
我無(十四)謫仙句。待詔沈香亭。　我に謫仙の句無し、待詔沈香亭、
空騎內(十五)廐馬。天仗隨(十六)雲軿。　空しく騎る內廐の馬、天仗雲軿に隨ふ、
竟無(十七)絲毫補。眷焉誰汝令。　竟に絲毫の補無し、眷焉誰か汝を令せん、
永懷舊山叟。憑(十八)君寄(十九)丁寧。　永く懷ふ舊山叟、君が丁寧を寄するに憑る、

【字解】【一】琴上星　次公曰、晉十三徽也、【二】拾紫青　漢の制、金印紫綬、銀印青綬、【三】不假齡　左傳僖公二十八年、楚子曰、晉侯天假之年、而除其害とある、【四】圖中鶴　查注に曰く、琴上星以當十三人數、則圖中鶴、當是六數と、又「圖畫見聞志」に、孟蜀後主、廣政甲辰、淮南臨聘、期以六鶴、蜀主遂命黃筌、寫六鶴於便坐之壁、名曰六鶴殿と、六鶴は一曰唳天、二曰警露、三曰啄苔、四曰舞風、五曰梳翎、六曰顧步とある、【五】入破　「唐書五行志」に、天寶後詩人、多爲流寓之思、樂曲亦多以邊地爲名、至其曲遍繁聲、謂之入破とある、【六】靈雨零　毛詩に、靈雨既零、命彼倉人、星言夙駕、秩于桑田とある、【七】沈香亭　開元中、禁中牡丹を重んじ、興慶池の東、沈香亭前に植う、李白の詩、解釋春風無限恨、沈香亭北倚欄干と、【八】內廐馬　翰林學士、初めての入院、例として名馬を賜はる、

【題義】蘇子由が蘇家の一族である、退翁名は定國が劍南西道懷安軍に赴くに就いて之を送る詩を作る、乃ち次韻せるものが此の詩である、定國の弟を安國と曰ひ、東坡の弟を子由と曰ふ、此の四人、少時皆眉州の劉微之に從うて學びしものである、

【詩意】我が鄕の眉州にて同年の友を見ると、其の人粲然として十三が琴上の星の如く光を放つ、各

の其の當時の意氣は功名の念を抱き、而かも其の意氣は勅任官となるとか、奏任官になるとかのみの小希望ではない、所が事は志願と違ふことが多く、多くは年壽長からずして逝き、殘存する者は六羽の鶴の如く、六人が現在するに過ぎない、而して其の一人なる退翁は清約を守りて、霜菊が秋後に餘馨を放つが如きである、任地にて聞く所のものは何である、鼓笛は方に入破して名曲なるが、朱絃の如く高尚なる樂は恐らくは聽くことは莫からう、その上西南の地は春旱と同じく敎化も旱にて、廢沼も廢校も共に枯萍が點りつき居るのである、君の力にてそれらの惡を一麾し去つて、靈雨を下して地を沾すことを我はそれを想ふのである、我は謫仙の如き詩を作るものではないが、翰林院に待詔して空しく天上賜ふ所の馬に騎り、天仗を將て雲軿に隨ふ身である、自ら知る竟に國家に於て絲毫も補ひなきを、睿焉として思ふ誰か汝を令となしたるや、余は永く懷ふ舊山の舊友叟を、君を煩はして丁寧に語を寄せたと述べて吳れ玉へ、

【餘論】紀曉嵐は評して、應酬詩之清歷者と曰ふ、案ずるに坡公の詩餠として龍頭にして虵尾と思へるもあり、此の篇は然らずと思ふ、

諸公餞子敎軾以病不能往復次前韻

諸公、子敎を餞す、軾病を以て往く能はず、復た前韻に次す

君爲江南英面作河朔偉。　君は江南の英たり、面は河朔の偉を作す、

人間一好漢誰似張長史。　人間一好漢、誰か張長史に似ん、

上書苦留君言拙輒報已。　上書して苦に君を留む、言拙にして輒ち報ずるのみ、

置之勿復道出處俱可喜。　之を置いて復た道ふこと勿かれ、出處俱に喜ぶ可し、

攀輿共六尺食肉飛萬里。　攀輿六尺を共にし、肉を食して萬里に飛ぶ、

誰言遠近殊等是朝廷美。　誰か言ふ遠近殊なると、等しく是れ朝廷の美、

遙知送別處醉墨爭淋紙。　遙に知る別を送る處、醉墨爭うて紙に淋ぐ、

我以病杜門商頌空振履。　我病を以て門を杜ぢ、商頌空しく振履、

後會知何日一歡如覆水。　後會知る何の日ぞ、一歡覆水の如し、

善保千金軀前言戲之耳。　善く千金の軀を保てよ、前言は之に戲るるのみ、

【字解】【一】張長史「舊唐書狄仁傑傳」に、武后問曰、朕要二一好漢任使一、有乎、仁傑曰、荆州長史張柬之、其人雖レ老、宰相才也、若用レ之必能盡二節於國家一とある、【二】留君　坡公別に乞レ留二顧臨一狀云、方今二聖臨御、當二正紀綱一、如二臨等輩一、正當レ置二之左右一、以輔二闕遺一、【三】攀輿「漢袁盎傳」に、天子所レ與二共六尺輿一者、皆天下英豪とある、【四】食肉「後漢班超傳」に、超行詣二相者一、曰生燕頷虎頸、飛而食レ肉、此萬里侯相也とある、【五】商頌「新序」に、原憲曳レ杖拖レ履、行歌二商頌一而反、聲滿二天地一、如レ出二金石一、天子不二得而臣一、諸侯不二得而友一、【六】覆水「後漢何逈傳」に、覆水不レ收、悔將二何及一と、太白の詩に、雨霽不レ上レ天、水覆難二重收一とある、【八】善保　杜甫の詩に、善保千金軀とあ

る、【六】前言戲之耳　この五字は論語の語を用ふ、「王立之詩話」に、元祐中、顧子敦、有二顧居之號一、以二其極肥偉一也、其後率二使河期一、居士有レ詩送レ之云、我友顧子敦、駕鼎兩俊偉、便便十圍腹、不二但貯二書史一、又云、磨レ刀向二豬羊一、屢レ酒會二鄰里一、又云、批勳手、皆用二居家語一也、子敦讀レ之頗不レ樂、所以居士復和二前篇一云、善保千金軀、前言戲レ之耳、

【題義】諸公が子敦の爲め送別會を設けたるも、余は病臥して往く能はざるを以て、前韻を用ひて其の意を敍したのである、

【詩意】君は眞に江南の俊英である、其の面は河朔に於ける偉傑である、人間の一好漢は曾て漢の張長史を稱したのであると思うたが君は卽ち其の人である、僕は君が地方官と爲らず、中央の官吏として都に留まる樣に上書したのであるが、其の言が拙で其の意は通せずに竟つた、そんな事は復た道ふの要はない、丈夫は出も處も俱に喜ぶべきである、生れて王公と六尺の攀輿を同じうし、其の志を萬里に馳するを得れば足る、遠の近のと論ずる者は誰ぞ、遠も近も皆一朝廷の支配下である、謂ふに其の送別の會は、定んで諸公が醉墨を揮うて紙面に淋漓としたであらう、我は病んで門を出ることが出來ず、從つて商頌振履の盛狀を見ることも出來なかつた、後會は何の日であるか知ること能はざるが、恐らくは此の一獄は今日去つては全く覆水の如くである、幸に君は國家の爲め善く千金の軀を保てよ、前に彼れ此れ言うたことは皆戲言であるから恕し玉へ、

【餘論】紀曉嵐曰ふ、一好漢究竟不レ雅と、武后の言を其の儘使用したるもの、此の語に因つて下の張長史が出るのであるから此の一句のみに就いて雅不雅を論ずることは出來ない、坡詩を讀む者注意して見るの要がある、

走筆謝呂行甫惠二子魚一

筆を走らし呂行甫が子魚を惠むを謝す

(一)臥沙(二)細肋吾方厭。
(三)通印長魚誰肯分。
好事東平(四)貴公子。
貴人不(五)レ與與蘇君。

【字解】【一】臥沙　「詩義疏」に鯊魚吹レ沙也、似二鮒魚一而小、常張レ口吹レ沙、背上有レ刺螫レ人とある、【二】細肋　「埤雅」に、肋魚似二鮒魚一而小、身薄首細とある、【三】通印　「遯齋閒覽」に、莆陽通靈子魚、名著二天下一、蓋其地有二通應侯廟一、廟前有レ洪、港中之魚最佳、今人必求二其大可レ容レ印者一、謂二之通印子魚一、又「西陽雜俎」に、印魚長一尺三寸、類上四方如レ印有レ字、諸大魚膠レ死者、先以レ印封レ之とある、【四】東平　地名、【五】貴公子　「晉書劉廣傳」に、潁川鍾會貴公子也とある、【六】不與　「類說」に、宋顯仁后、謂二秦檜妻一曰、子魚大者絕少、對曰、妾家有レ之、檜咎二其失言一、乃以二青魚百尾一遺、太后笑曰、我道這婆子鄙、可レ見子魚大者、非二權貴一不二多得一也、

【題義】忽卒に筆を走らして呂行惠が子魚を惠まれたるを謝して作れる詩、

【詩意】沙上に多く取れる肋筋の多い魚は吾は厭であるが、然りと云うて通印の長魚は誰も分與して呉れることはない、幸に好事の東平貴公子は、其の貴人に貽るべき魚を我に貽られたるは有り難い、

【餘論】紀曉嵐の評に、此在二當日一只簡代、東原不二以レ詩論一とある、詩を以て簡の代用と爲すのが

坡公の長所である、豈此詩のみならんや、他に往往有る、東原が詩を以て論せずと曰ふも、東原自身の作は多く此の類の作である、他面は見るも、自面は見ることが出來ないのである、

送呂行甫司門倅河陽

呂行甫司門の河陽に倅となるを送る

結交不在久、傾蓋(一)如平生。
識子今幾日、送別亦有情。
子生公相家、高義久崢嶸(二)。
天才既超詣、世故亦屢更。
譬如追風驥、豈免羈與纓。
念我山中人、久與麋鹿并。
誤出挂世網、舉動俗所驚。
歸田雖未果、已覺去就輕。
河陽豈云遠、出處恐異程(三)。
便當從此別、有酒無徒傾。

結交久しきにあらず、傾蓋平生の如し、
子を識る今幾日ぞ、別を送りて亦情あり、
子は公相の家に生れ、高義久しく崢嶸、
天才既に超詣、世故も亦屢ば更たり、
譬へば風を追ふ驥の如く、豈羈と纓とを免れんや、
念ふ我山中の人、久しく麋鹿と并ぶ、
誤りて出でて世網に挂り、舉動俗の驚く所、
歸田未だ果さずと雖も、已に去就の輕きを覺ゆ、
河陽豈遠しと云はんや、出處恐らくは程を異にせん、
便ち當に此より別れ、酒あり徒に傾くること無かるべし、

【字解】〔一〕傾蓋　道に行き相遇うて、車を並べて對語、蓋を相切にして下傾く、「孔子家語」に、孔子之郯、遭程子於途、傾蓋而語終日、甚相親とある、〔二〕崢嶸　李白の「大鵬賦」に、吐崢嶸之高論とある、〔三〕河陽　今日河南の孟縣、元魏の時、南城と北城と中潭城の三城を築く、

【題義】呂行甫の官は司門郎中であるが、今河陽に向つて其の副知府と爲つて赴くを送る詩である、

【詩意】君と僕と交を結ぶことは久しいのではないが、傾蓋の深情は久しき以上のものがある、子を識つてより今日まで幾日を經たる、別を送るに亦特別の情がある、子は公相たる所の名家に生れ、高義は山の崢嶸として侵す能はざる概がある、天才は既に超詣して常人の及ぶ所でない、世故の經歷も種種に閲して居られる、譬へば風を追ふ驥の如くである、羈と纓との事あるは免るることが出來ない、念ふに我は素山中の人にて、久しく麋鹿の友と爲つて居りしが、誤つて山を出て世網に挂りて、其の一舉一動俗人の驚く所と爲る、歸田の計は未だ果さないが、心は已に世事に執著せずして去も就も良に輕し、河陽はそれほど遠くはないが、去就を同一にすることが出來ないのを恐る、便ち當に此より別れる、別盃を意義あるものとして別れたい、

【餘論】紀曉嵐曰く、不失清妥、然非出色之作、余は案ずるに識子の二句十字、或は刪る方可ならんと、

和張昌言喜雨

張昌言の喜雨を和す

二聖憂勤忘寢食(一)。

二聖憂勤して寢食を忘る、

【字解】〔一〕二聖　哲宗と太后

百神奔走會風雲。
禁林夜直鳴江瀨。
清洛朝回起縠紋。
夢覺酒醒聞好句。
帳空簟冷發餘薰。
秋來定有豐年喜。
剩作新詩準備君。

百神奔走して風雲に會す、
禁林夜直して江瀨鳴り、
清洛朝に回りて縠紋起る、
夢覺め酒醒めて好句を聞き、
帳空しく簟冷かに餘薰を發す、
秋來定んで豐年の喜び有らん、
剩へ新詩を作りて君に準備せん、

【題義】張昌言が喜雨の詩を示されたるを和するのである、

【詩意】二聖旱天を憂へられて寢食を廢するの狀である、此の二聖の憂勤に感じて、遂に天の百神は奔走して風雲會するに及ぶ、自分は禁林に夜直して雨の爲め江瀨が鳴るを聞き、又晨朝に退出して清洛の水に縠紋を生ずるをも見る、夢覺め酒も亦醒めて君に好句ありしをも聞く、帳も簟も共に空冷なるも餘薰は猶ほ發る、秋來定んで是れ豐年の喜びで、剩へ我は新詩を作り君が寄せ來らば直ちに和せんと其の準備を爲して居る、

【餘論】此の篇前半と後半と一致せず、初に二聖憂勤と言ひ、第五句に至り、夢覺酒醒なぞと言ひ、

な謂ふ、【二】禁林　禁苑の林木な謂ふ、「班固賦」に、接レ翼側レ足、集二禁林一而屯衆とある、又翰林院の別稱、今の句は翰林院な謂ふ、【三】縠紋　劉禹錫の詩に、瀟西春水縠紋生とある、杜牧の詩に、水紋如レ縠蕪蕪池とある、【四】準備　預備と殆んど同じ、

喜びの酒ではあらうが、憂勤の字に對して、不謹愼も極まる、此れ杜甫には無き所、坡公には往往にしてある、宋人の僻獨り坡公の罪ではない、蓋し坡詩として最下劣のものである、

次韻劉貢父西省種竹

要レ知西掖承平事。
記取劉郎種竹初。
舊德終呼名字外。
後生誰續笑談餘。
成レ陰障レ日行當見。
取レ筍供レ庖計已疎。
白首林間望天上。
平安時報故人書。

知らんと要せば西掖承平の事を、
記取せよ劉郎種竹の初を、
舊德終に呼ぶ名字の外、
後生誰か續がん笑談の餘、
陰を成して日を障ふ行くゆく當に見る、
筍を取つて庖に供す計已に疎なり、
白首林間より天上を望み、
平安時に報せよ故人の書、

次韻劉貢父が西省に種竹を次韻す

【字解】【一】西掖　即ち西省、【二】舊德　「周易」に、食二舊德一貞厲終吉とある、【三】笑談餘　公の自注な課記する、昔、李公擇、竹な館中に種う、戲に同舍に語る、後人此の竹な指して必ず云はん、李文正の手植と、貢父笑つて曰く、文正獨繫筆ならず、亦種竹な知るか、時に筆工に李文正あり、【四】平安　「酉陽雜俎」に、李衞公言、北都童子寺、有二竹一窠一、才長數尺、公令二其寺綱維一、每日報二平安一とある、綱維は寺務な執る者の役名、

【自注】昔李公擇種二竹館中一。錢語二同舍一。後人指二此竹一必云。李文正手植。貢父笑曰。文正不二獨繫筆一。亦知二種竹一耶。時有二筆工李文正一。

【詩意】西掖と云ふ役所が承平であることを知らうと思はば、諸君記取し玉へ劉郎が竹を種ゑる樣な

閒事を爲したのを見て、其の舊德は定めし名字の外に人が呼ぶことであらうし、又後生は此の種竹を以て二人の文正ありしことを談柄とするであらう、竹が陰を成して日光を障ふるの林となるも遠くは無い、但し筍を取つて之を食膳の材料とするなぞの經濟は已に疎である、白首の我は林間に坐して西掖なる天上を望み、平安の消息が其の方より來るを待つのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、舊德句、太費二解意一、謂二文正一是證、法レ證所二以易一名耳、今謂ふ記取と取筍と取が重複、掘筍とすれば可い、

偶與客飲。孔常父見訪。方設席延請。忽上馬馳去。已而有詩。戲用其韻答之

偶ま客と飲む、孔常父訪はる、方に席を設けて延請す、忽ち馬に上つて馳せ去る、已にして詩あり、戲れに其の韻を用ひて之に答ふ

(一)揚雄他文皆不レ奇。　揚雄他文皆奇ならず、
(二)獨稱觀餅居井眉。　獨り稱す觀餅居井眉、
酒客法士兩小兒。　酒客法士兩小兒、
(三)陳遵張竦何曾知。　陳遵張竦何ぞ曾て知らん、
主人有レ酒君獨辭。　主人酒あり君獨り辭す、
(四)蟹螯何不二左手持一。　蟹螯何ぞ左手に持たざる、
豈復見吾衡氣機。　豈復た見る吾が衡氣機を、
遣レ人追レ君君絶馳。　人を遣はし君を追ふ君は絶馳す、
盡レ力去(六)花君自癡。　力を盡して花を去る君自ら癡なり、
(七)醍醐與酒同一巵。　醍醐と酒と同一巵、
請君更問二文殊師一。(八)　請ふ君更に文殊師に問へ、

【字解】【一】揚雄　魏の曹丕は「典論」を作り文を論ず、曰く、今之文人云云、王粲長二於辭賦一、徐幹時有二齊氣一、然粲之匹也、如二粲之初征、登樓、槐賦、征思、幹之玄猿、漏巵、圓扇、橘賦一、雖二粲蔡一不レ過也、然於二他文一未レ能レ稱レ是、雖文は揚雄に就いて言ふにあらず、坡公が揚雄を評して言ふ、【二】獨稱　揚侍郎集を案ずるに、雄が作る酒賦と酒箴との二文が載せてある、文字に增減あるが同一のものである、酒箴に曰く、子猶レ瓶矣、瓶之居、居二井之眉一、處レ高臨レ深、動常近レ危とある、全首百字に滿たざるもの、【三】陳遵　「前漢陳遵傳」に、遵與二張竦一俱以二列侯一歸二長安一、竦居レ貧無二資客一、時時好事者、從レ之論二道經書一、而遵壺夜鶴呼、車騎滿レ門、先レ是揚雄作二酒箴一、爲二酒客一、難二法度士一、譬二之於物一曰、子猶レ瓶矣、瓶之居、居二井之眉一、自用如レ此、不レ如二鴟夷一、遵大喜レ之、謂レ竦曰、吾與レ爾猶是矣、足下讀二聞經書一、苦レ身自約、不二敢差跌一、而我放意自恣云云、【四】蟹螯　「晉書畢卓傳」に、卓嘗謂レ人曰、得レ酒滿二數百斛船一、四時甘味設二兩頭一、右手持二酒杯一、左手持二蟹螯一、拍浮二酒船中一、便足レ了二一生一矣、乃ち「酒の杯と蟹の螯」である、【五】衡氣機　「莊子應帝王篇」に、列子入以告二壺子一、壺子曰、吾鄉示レ之、以二太冲莫勝一、是殆見二吾衡氣機一也云云、列子追レ之不レ及とある、動靜が平衡して半動半靜の貌を曰ふ、【六】去花　「維摩詰經觀衆生品」に、時維摩詰室、有二一天女一、見二諸天人一、聞二所說法一、便現二其身一、卽以二天花一、散二諸菩薩大弟子上一、花至二諸菩薩一、卽皆墮落、至二大弟子一、便著不レ墮、一切弟子、神力去レ花、不レ能レ令レ去、爾時天問二舍利弗一、何故去レ花、曰此花不レ如レ法、是以去レ之、天曰勿レ謂此花爲レ不レ如レ法とある、【七】醍醐　佛法の玄理が究極して、深味が諸物に超えるを醍醐と曰ふ、大乘の法門と心得て可い、【八】文殊　普通に稱して文殊、文殊師利、又は曼殊室利、今は韻法の上から利を略して單に師と書す、維摩居士に對し、彌勒と文殊が智慧の雄足と爲るもの、

【題義】　公が一日客と酒を飲む、其の時に偶然孔常父が訪問せられたるを以て、直ちに席を設けて延請したるに、孔は忽ち馬上の人と爲つて去る、而して孔が詩を寄せられたれば、直ちに其の韻を用ひて作りしものである、

【詩意】　揚雄は大文豪の名は高いが、多くの文章は奇なるものがない、獨一文酒箴の觀餅居井眉の語が奇である、それは酒を飲む客も、法度を難ずる士も共に小兒の如きである、彼の酒を多く飲む陳遵も貧なる張竦も知る所ではない、今主人の僕は酒あり故に客と飲む、而して君の飲まずして辭去するは何である、古人も蟹螯を左手に持したと云ふことがある、君は我が客に對して衡氣の機を以てするを見ないのであるが、君が辭去すると聞いて人をして君を追はしめたるも及ばなかつた、君は何故に衡氣の機を見ることが出來ずして執著が強いぞ、是の故に僕は佛典の醍醐味と酒と同一巵であると思ふ、君が若し我が言に疑ひあらば、請ふ之を文殊師利に問ひ玉へ、

【餘論】　紀曉嵐曰く、豈復句寫二馳去一雅切、結句正答二來語一、此亦不レ見二原唱一、則不レ知二所レ云者一、一二の句、揚侍郎集を假り、三四の句は漢書を借り、五六七の句、自身を敍し、九十十一句と維摩經の語を以て結を取る、此を讀んで余は謂ふ昔李于鱗は李白を以て英雄欺レ人と稱す、余は此の語を以て坡公共の人に移さんと思ふ、盡力以下三句、詩にもあらず、偈にもあらず、邪魔外道の語である、昔人山谷を評して詩中魔と喚ぶ、此の詩も所謂詩中魔と言はんのみ、

次韻子由書李伯時所レ藏韓幹馬一

子由が李伯時藏する所の韓幹が馬に書するに次韻す

潭潭古屋雲幕垂。
省中文書如亂絲。
忽見伯時畫天馬。
朔風胡沙生落錐。
天馬西來從西極。
勢與落日爭分馳。
龍膺豹股頭八尺。
奮迅不受人間羈。
元狩虎脊聊可友。
開元玉花何足奇。
伯時有道眞吏隱。
飲啄不羨山梁雌。

潭潭たる古屋雲幕垂る、
省中の文書亂絲の如し、
忽ち見る伯時が畫天馬を、
朔風胡沙落錐に生ず、
天馬西來西極よりす、
勢落日と分馳を爭ふ、
龍膺豹股頭八尺、
奮迅人間の羈を受けず、
元狩の虎脊聊か友とす可し、
開元の玉花何ぞ奇とするに足らん、
伯時道あり眞に吏隱、
飲啄羨まず山梁の雌、

【字解】【一】潭潭「史記應劭注」に、沈沈宮室深邃之貌、番長含反、字典通作レ潭とある、乃ち潭潭は沈沈と同義なるを知る、【二】省中　官署の牀に挂ける圖、【三】落錐「五代史宏肇傳」に、宏肇曰安二朝廷一、定二鼎鼎一、直須二長槍大戟一、若二尾錐子一、安足レ用哉とある、筆鋒を謂ふ、【四】西極「史記樂書」に、武帝伐二大宛一、得二千里馬一、作レ歌曰、天馬來兮從二西極一、經二萬里一兮歸二有德一とある、大宛は大月氏の東北に當る、清には浩罕國と爲す、今日は露領中亞細亞の佛爾哈那州が卽ち是れ、【五】八尺「周禮」に、馬八尺以上爲レ龍とある、【六】元狩　漢の武帝の年號、三年に馬が渥洼水中に生る、天馬歌を

丹青弄筆聊爾耳。
意在萬里誰知之。
幹唯畫肉不畫骨。
而況失實空留皮。
煩君巧說腹中事。
妙語欲遣黃泉知。
君不見韓生自言
無所學。

廐馬萬匹皆吾師。

丹青筆を弄することを聊爾耳、
意は萬里に在り誰か之を知らん、
幹は唯肉を畫きて骨を畫かず、
而かも況んや實を失して空しく皮を留む、
君を煩はして巧に說く腹中の事、
妙語を黃泉に遣り知らしめんと欲す、
君見ずや韓生自ら言ふ學ぶ所無し、
「むるをや、」
廐馬萬匹皆吾師と、

捽若、亦山峰也、何其隱、注言山梁雌雉」とある、【一〇】 聊爾 「世說」に、未レ能レ見レ俗、聊復爾爾とある、俗語のマア姑らく姑らくと
の義に當る、【一一】 幹唯 杜甫の詩に、幹唯畫レ肉不レ畫レ骨、忽レ使二畫龍氣膠裹一とある、【一二】 煩君 君は子由を指す、【一三】 無所
學 杜甫の詩に、弟子韓幹早入レ室とある、杜は幹を以て曹霸の弟子と爲す、然るに「歷代名畫記」に、上命二韓幹師二陳閎一、怪二其不レ同、
幹曰、臣自有レ師、陛下內廐馬、皆臣師也と、

【題義】 子由が詩を作りて李伯時が藏する所の韓幹の畫馬に讚したるを兄の坡公が其の韻を次ぎて作れるもの、韓幹は藍田の人、天寶の初、王維が之を推薦して入つて供奉と爲り、太府寺丞の官と爲る、

人物を善寫するも、尤も畫馬に工で、玄宗の爲め大に奇とせられたる人である、

【詩意】 潭潭たる古屋に雲幕が垂れて居る、省中の文書は亂絲の如く整頓は出來て居ないが、忽ちに目に著きたるは伯時が愛藏する幹が畫ける天馬の圖である、一瞥したのみにて心に覺ゆ、朔北の風が吹いて筆鋒の上に生ずるかと、天馬は本西極より來るものにて、勢は落日と分馳を爭ふが如く、其の形たるや龍の膺豹の股丈は八尺である、其の奮迅の威容は決して人間の羈を受くるものでない、元狩の年に西來せる虎脊のみが其の友である、開元の玉花驄は之に比すれば奇とするに足らない、李伯時は其の人有道にて眞の吏隱である、他の俗吏輩の如く飲み啄む山梁の雌の類は羨むことはせぬ、丹青に筆を弄するも聊か自ら戲游とするのみ、本志は萬里と云ふ遠大の處にあるも、誰も之を知る人なくて、或は畫師位と思ふ者もあらん、幹の馬は古人も言ふ肉を畫きて骨を畫かずと、而かも其の上に實相を失うて空しく皮相を留むるをや、君を煩はして腹中藏する天馬畫の來歷を巧に說かしむるを、冀はくは其の妙語を黃泉の下に眠る幹をして知らしめたい、君も已に知る韓生自ら言ふ所の語を、活馬萬匹を師として、人間の一人や二人を師とし學んだもので無いと云ふことを、

【餘論】 此の題の詩は子由が初めて作り、蘇子容、黃山谷、劉貢父、王仲至、而して坡公が此の詩と盛んに和せられたものである、紀曉嵐曰く、只就二伯時一生レ情、韓幹只於二筆端一縈繞、運レ意運レ筆、俱極二奇變一と、幹唯畫肉の句に至りて曰く、至レ此機用二韓幹一、用筆之妙、前無二古人一と、余案ずるに老杜の集、殊に畫馬に關する詩が多く、且つ妙を極む、坡公の集にも亦馬に關する詩が多い、又良工の苦

心なるもの多し、坡公の本領を遺憾なく發表したるもの、是の篇に於て見るべきである、

次韻劉貢父獨直省中

劉貢父が省中に獨直するを次韻す

明窗畏日曉先暾。
高柳鳴蜩午更喧。
筆老新詩疑有物。
心空客疾本無根。
隔墻我亦眠風榻。
上馬君先鎖月軒。
共喜早歸三伏近。
解衣盤礴亦君恩。

【字解】〔一〕畏日　夏日、前に趙盾の事を辨ず、〔二〕曉先暾　「楚辭」に、暾將出兮東方、照吾檻兮扶桑とある、〔三〕鳴蜩　「陸子衡擬古詩」に、寒蟬鳴兮高柳とある、〔四〕有物　白樂天集、劉禹錫詩、在在處處、當有靈物護之とある、〔五〕客疾　晴に維摩經の意を用ふ、〔六〕三伏　夏至後の第三庚日を初伏と爲し、第四庚日を中伏と爲し、立秋後の第一庚日を末伏と爲す、〔七〕盤礴　「莊子田子方篇」に、宋元君將畫圖、衆史皆至、受筆而立、舐筆和墨、一史後至、儃儃不趨、受筆不立、因之舍、公使人視之、則解衣盤礴、君曰可矣、是眞畫者也、盤礴は即ち箕坐を言ふ、

【題義】劉貢父が省中に於て一人にて宿直せる詩を示さる、之を和するのである、

明窗畏日曉先暾、
高柳鳴蜩午更喧、
筆老い新詩物あるかと疑ひ、
心空しく客疾本根無し、
牆を隔てて我亦風榻に眠り、
馬に上りて君先づ月軒を鎖す、
共に喜ぶ早く歸り三伏近きを、
衣を解いて盤礴するも亦君恩、

【詩意】明窗夏日に曉暾に對して坐し、而して日午に高柳に鳴蜩の喧聲を聞く、君の筆は老熟して靈物が有るかと疑ふほどである、心を空虛にして置けば客疾も本は根無きを知る、牆を隔てる位近き處に僕も風榻に憑つて眠る、但し今君は省中に宿直なれば、馬に上つて月軒を鎖すのであらう、只共に喜ぶことは近く三伏の官休を得て、衣を解いて自由に起臥することが出來る是れ亦君恩である、

【餘論】紀曉嵐曰く、首句用杜預語一未佳と、佳ならざるのみならず語を成さないかと思ふ、坡詩の最下乘なるもの、

軾以去歲春夏侍立邇英。而秋冬之交子由相繼入侍。次韻絕句四首各述所懷

軾、去歲春夏を以て邇英に侍立す、而して秋冬の交、子由相繼ぎ入つて侍す、次韻絕句四首各の所懷を述ぶ

〔一〕曈曈日脚曉猶清。
細細槐花暖欲零。
坐閱〔二〕諸公半廊廟。

曈曈たる日脚曉猶ほ清し、
細細たる槐花暖零ちんと欲す、
坐して閱す諸公半は廊廟、

【自注】僕別呂公。門下韓公。右丞劉公皆自二講席一大用。

【字解】〔一〕曈曈　日初出之貌也、〔二〕諸公　自注の如く、呂公著・韓維・劉摯である、〔三〕黃色　黃昏の日色を謂ふ、

時看黃色起天庭。　時に看る黃色の天庭に起るを、

【詩意】 邇英閣前に當つて曈曈と上る日脚は曉に猶ほ清い、閣の四面に當つて槐花は暖の爲め遂に零ちんと欲する、坐して閲する大官諸公は廊廟に半は面識である、既にして看る暮色が天庭の隅より起るを、

〔一〕

上尊初破早朝寒。
茗盌仍霑講舌乾。
陛楯諸郎空雨立。
故應慚悔不儒冠。

〔一〕

上尊初めて破る早朝の寒を、
茗盌仍ほ霑す講舌の乾くを、
陛楯に諸郎空しく雨に立つ、
故に應に儒冠ならざるを慚悔すべし、

【字解】 〔一〕 上尊　宮廷より賜ふ酒である、進講の前後に賜ふものと思はる。〔二〕 講舌乾　「道彦傳燈錄」に、眞淨文禪師、問ニ講師一曰、火災起時、山河大地、俱被ニ焚盡一、許多灰燼、將レ置ニ何處一、講師舌大而乾、笑曰不レ知、師笑曰、汝所レ講者紙上語耳と、傳燈錄は坡公より五十年前の著述なれば公が借用したること疑ひ無い、又業夢得の「石林燕語」に、經筵講讀官、初入皆坐賜レ茶、唯當講官起就レ案立、講畢復就レ坐、賜レ湯而退、侍讀亦如レ之、蓋乾興之制也とある、〔三〕 陛楯　「史記滑稽傳」に、優旃善爲ニ笑言一、秦始皇時、置レ酒而天雨、陛楯者皆沾寒、優旃見而哀レ之、居有レ頃殿上上レ壽、優旃臨レ檻大呼曰、陛楯郎、汝盍レ長何益、幸雨立、我盍ニ短也一、幸休居、於レ是始皇、使ニ陛楯者、得ニ半相代一とある、楯は陛の「テスリ」である、〔四〕 儒冠　「史記」に、沛公、諸客冠ニ儒冠一來者、輒解ニ其冠一、溲ニ溺其中一とある、何焯曰、言レ看ニ人驟化一、儘比ニ衞士一爲ニ優耳と、

【詩意】 上尊を一飲して僅に早朝の寒を防ぎ、又茗盌を賜ふに因つて講舌の乾きしも霑すことを得た、陛楯の諸郎卽ち守衞輩は雨が降つて來ても陛楯に寄つて立つて居る、此の人等は儒冠と爲つて殿上にあるを羨ましく思ふであらう、

〔三〕

兩鶴摧頹病不レ言。
年來相繼亦乘レ軒。
誤聞九奏聊飛舞。
可レ得裘徊爲ニ啄呑一。

〔三〕

兩鶴摧頹病んで言はず、
年來相繼ぎ亦軒に乘る、
誤つて聞く九奏聊か飛舞、
得べけんや裘徊啄呑を爲すを、

【字解】 〔一〕 乘軒　左傳閔公二年の條に、衛懿公好レ鶴、鶴有ニ乘レ軒者一、注軒大夫車とある、〔二〕 飛舞　「史記扁鵲傳」に、百神游ニ于鈞天一、廣樂九奏萬舞とある、「樂書」に、師曠鼓レ琴一奏、有ニ元鶴二八集ニ於廊門一、再奏レ之、延レ頸而鳴、舒レ翼而舞とある、〔三〕 裘回　「藝文類聚」に、白鶴古詩云、五里一反顧、六里一裘回、吾欲ニ衝レ汝去一、口噤不レ能レ開、吾欲ニ負レ汝去一、毛羽日摧頹とある、

【詩意】 兩鶴が摧頹の形を以て病んで言ふことも出來ないが、年來相繼ぎて軒に乘ずる身と爲つた、誤つて非常なる身分と爲つたと思うて聊か飛舞したるが、自由に裘回し自由に啄呑することが得られるとは思はぬ、

〔四〕

微生偶脫風波地。

〔四〕

微生偶ま脫す風波の地、

【字解】 〔一〕 鐵石　唐の皮日休

晩歳猶存鐵石心。　晩歳猶ほ存す鐵石の心、
定似香山老居士。　定んで似ん香山老居士、
世縁終淺道根深。　世縁終に淺く道根深し、

【自注】樂天自江州司馬除忠州刺史。旋以主客郎中知制誥。終拜中書舍人。然讀居黄州。起知文登。召爲儀曹。遂忝侍從。出處老少。大略相似。庶幾復享此翫晩節閒適之樂焉。

て其の心を治め、道教を以て其の壽を養ふ、坡公は暗に之を慕うたのである、【三】世緣　坡公自から注す、樂天は江州司馬より、忠州の使史に除せられ、旋りて主客郎中知制誥を以て、遂に中書舍人に拜せらる、然れども黄州の謫居より起ちて文登に知し、召されて儀曹と爲り、遂に侍從を忝うす、出處老少、大略相似たり、庶幾はくは復た此の翫晩節閒適の樂みを享けんかと、樂天の詩に始知不才者、可以探道根」と、

【詩意】微微たる此の身は偶ま生死危險の地を脱し、幸に晩節を維持して鐵石の心を失はない、必定香山老居士と出處が似て居るかと思ふ、世の榮達の緣は淺いが道に得たる根は深きものがある、

【餘論】邇英閣は侍臣講讀の所であれば、此に入つて其の光榮を歌ふべきものと思ふに、此の四首共に懽喜の情は少しもない、何焯の評せる如く僅に衞士に優ると爲すに過ぎない、余は坡公の心事を知るに苦むものである、

送宋構朝散知彭州迎侍二親

宋構朝散が彭州に知となり二親を迎侍するを送る

東來誰迎使君車　東來誰か迎ふ使君の車、
知是丈人屋上烏。　知る是れ丈人が屋上の烏、
丈人今年二毛初。　丈人今年二毛の初、
登樓上馬不用扶。　樓に登るも馬に上るも扶くるを用ひず、
使君負弩爲前驅。　使君弩を負うて前驅を爲す、
蜀人不復談相如。　蜀人復た相如を談せず、
老幼化服一事無。　老幼化服して一事無し、
有鞭不施安用蒲。　鞭有りて施せず安んぞ蒲を用ひん、
春波如天漲平湖。　春波天の如く平湖漲る、
鞓紅照坐香生膚。　鞓紅坐を照らし香膚に生ず、
帶鞲上壽白玉壺。　帶鞲壽を上る白玉壺、
公堂登歌鳳將雛。　公堂登歌す鳳將雛、
諸孫歡笑爭挽鬚。　諸孫歡笑爭うて鬚を挽く、

【字解】【一】丈人　長老の稱、論語」に、過丈人以杖荷蓧とある、又妻の父を稱し、又祖を稱す、【二】屋上烏　「說苑」に、武王克殷、召太公而問曰、將奈其士衆何、太公對曰、臣聞愛其人者、憎其烏、愛其人者、愛其餘胥」と、杜甫の詩に、丈人屋上烏、烏好人亦好とある、【三】二毛　「左傳僖公二十二年」に、君子不重傷、不禽二毛」とある、半老の人を謂ふ、老人髮斑白にして二色ある、【四】不用扶　杜甫の詩に、上馬不用扶、每扶必怒嗔とある、【五】負弩　弩はイシユミ、機械にて石を發射する武器、【六】蜀人　「漢書司馬相如傳」に、相如爲中郎將、使西南夷、至蜀太守以下郊迎、縣令負弩先驅、蜀人

の「挑花賦序」に、余嘗慕宋廣平之爲相、疑其鐵腸石心、不解吐紈紈之辭、然其梅花賦、清便富麗、得南朝徐庾體、殊不類其爲人也、【二】香山　香山寺、洛都の龍門に在る、白樂天、晩年自から香山居士と稱し、儒教を以て其の身を飾り、佛教を以て其の壽を養ふ、樂天は江州司馬より、忠州の使史に除せられ、旋りて主客郎中知制誥を以て、遂に中書舍人に拜せらる、然れども黄州の謫居より起ちて文登に知し、召されて儀曹と爲り、遂に侍從を忝うす、出處老少、大略相似たり、庶幾はくは復た此の翫晩節閒適の樂みを享け

蜀人畫作西湖圖。

蜀人畫き作る西湖の圖、

[一] 蜀人畫き作る西湖の圖。

以爲ㇾ寵とある、次公曰、宋朝散、迎ㇾ其親ㇾ爲ㇾ之負ㇾ弩前驅、所ニ以甚ㇾ榮ㇾ之、而已、【八】 緋紅　牡丹の別名。【九】 帶鞬　帶は底のある嚢を曰ふ、鞬は ユゴテ、臂鞲、弓を射る時、左の臂に著ける韋製の具、「史記淳于髡傳」に、帶鞬鞬櫜、侍ニ酒於前聆一とある、【一〇】 公堂　「毛詩」に、隣ニ彼公堂一とある、【一一】 鳳將雛　宋の「吳越樂府古題要解」に、鳳將雛、漢世樂曲名也、「晉書樂志」に、吳歌十曲、一曰子夜、二曰上柱、三曰鳳將雛、【一二】 挽歌　杜甫の詩、生還對ニ童稚一、似ㇾ欲ㇾ忘ニ飢渴一、問ㇾ事靈挽ㇾ歌、誰即眞嗚喝とある、【一三】 西湖　「名勝志」に、彭州治內有ニ東湖一、宋元符中、袁陶有ㇾ記、又有ニ西湖一、唐元和中、太守王潛蓄蒲創と、

【題義】 宋構が朝散大夫員外郎の官より蜀郡の彭州に知事と爲つて赴任し、而して二親を共の任地に迎へて之に侍するに送りて此の詩を呈せしものである、

【詩意】 東來せる使君の車を迎へに出でしものは、使君を迎ふると同時に其の丈人をも迎ふるのである、丈人も今年は已に五十を越して居る、其の人樓に登るにも馬に上るにも他人の扶けを借らぬ健康の身である、其の子たる使君は弩を負うて前驅する、今日まで蜀人は相如を光榮として談柄に供したのであるが、今日よりは相如を談ずる人は無くなる、使君は今日より良政を執るが故に蜀の老幼共に風化して訴訟なぞの事は無くなる、鞭有るも施用する道はない況して蒲なぞは猶ほ無用である、春波は溶溶として天の如く平湖に漲るを見る、牡丹の花光は坐を照らして香氣は膚に生ずるを覺ゆ、帶鞬を著ける所の武夫も壽を上りて白玉盞を捧げる、而して公堂に登歌する所の詞は鳳將雛である、諸孫相集まりて歡笑して丈人の白鬚を挽る、蜀人は西湖の圖を畫き作るものもある、

【餘論】 此の篇も一韻にして第五字第六字仄聲なるもの多し、乃ち仄仄平なるもの四句、平平平なるもの亦四句、仄平平なるもの亦四句、平仄平なるもの二句、古詩平仄論者は如何に之を論ずるや、

[一] 郭熙畫秋山平遠

郭熙が畫く秋山平遠

【自注】文潞公、歐尾を爲る、

玉堂畫掩春日閒。
中有ニ郭熙畫春山一。
鳴鳩乳燕初睡起。
白波青嶂非ニ人間一。
離離短幅開ニ平遠一。
漠漠疎林寄ニ秋晚一。
恰似江南送ㇾ客時。
中流回ㇾ頭望ニ雲巘一。
伊川佚老鬢如ㇾ霜。

【自注】文潞公、歐尾を爲る、

玉堂畫掩うて春日閒なり、中に郭熙が畫ける春山有り、鳴鳩乳燕初めて睡より起ち、白波青嶂人間にあらず、離離たる短幅平遠を開き、漠漠たる疎林秋晚に寄す、恰も江南客を送る時に似たり、中流に頭を回らして雲巘を望めば、伊川佚老鬢霜の如し、

【字解】【一】 郭熙　河南溫の人、御院藝學と爲る、山水は李成を慕し、長松巨木、回溪斷崖、岩舳巉絕、峯巒秀起、雲霧變滅、晻靄の間、一時に獨步す、年老いて筆益々壯、自かち山水畫論を著はし、山水を畫くの法式と爲す、【二】 白波青嶂　杜甫の詩に、白波吹ニ粉壁一、青嶂插ニ雕梁一とある、【三】 平遠　「王維傳」に、畫思入ㇾ神、至ニ山水平遠、雲勢石色一とある、【四】 佚老　文潞公を指す、潞公名は彥博、字は寬夫、仁宗の時

臥看秋山思洛陽。
爲君紙尾作行草。
炯如嵩洛浮秋光。
我從公游如一日。
不覺青山映黃髮。
爲畫龍門八節灘。
待向伊川買泉石。

臥して秋山を看て洛陽を思ふ、
君が爲に紙尾に行草を作る、
炯として嵩洛秋光を浮ぶるが如し、
我公に從つて游ぶ一日の如し、
覺えず青山黃髮に映ず、
龍門の八節灘を畫かんが爲め、
待つて伊川に向うて泉石を買はん、

【詩意】玉堂の門は晝も掩うて春日淸閑である、牀には挂けてある郭熙が畫ける春山の圖を、鳴鳩も乳燕も初めて睡より起ち、白波も青嶂も人間世界のものではない、離離たる短幅の中にも餘裕綽綽として平遠が開きてある、漠漠たる疎林を點綴するは秋晩を寓寄するのである、恰も江南に客を送り し時の蕭條たる景に似て居る、而して中流に頭を回らして雲巒を望む人がある、伊川の佚老は鬢髮霜の如く白く、臥して秋山を看て洛陽を思ふ情がある、乃ち君が爲に紙尾に行草を作る、其の筆墨の光が炯として嵩山と洛水に秋光が浮ぶかと思はる、我は公に從つて賞游すること十年一日の如くである、覺えず青山が黃髮に映ずる感を爲すのである、爲に龍門の八節灘の圖を畫きて、畫の成るを待つて以て伊川に向ひ泉石を買はんと思うて居る、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、用二古格一亦自宛轉と、四度換韻して作る、古體の定法、但し題目に秋山平遠とありて、詩中には畫春山とある、然らば玉堂に挂けてある畫と、今此の題の畫とは全く別物であると思ふ、字字句句、秋景のみを敍して春山の景色は敍してない、春山の畫も善であるが、秋山は猶ほ是れ善なるを嘆じて此の詩を作られしものと思ふ、それにしても一幅であるか、二幅であるか、明白でない所、東坡の面目を見る、

次韻張昌言喜雨

張昌言が喜雨に次韻す

千里黃流失故居。
年來赤地到青徐。
遙聞爭誦十行詔。
無異親巡六尺輿。
精貫天人一言足。
雲興嶽瀆萬靈趨。
愛君誰似元和老。

千里の黃流故居を失す、
年來赤地青徐に到る、
遙に聞く爭うて十行の詔を誦すと、
異なること無し親しく六尺の輿を巡す
精貫けば天人一言にして足る、
雲興りて嶽瀆萬靈趨る、
君を愛す誰か似ん元和の老に、

【字解】〔一〕黃流　韓退之の詩に、黃流滉滉とある、〔二〕赤地　旱天にて地に青色の減するを言ふ、「說苑」に、晉平公時、赤地千里とある、「後漢祭祀宮傳」に、人畜疫死、旱蝗赤地とある、〔三〕十行詔　元祐二年四月辛卯詔、冬夏旱暵、海內被レ災者廣、減レ膳減レ膳、責レ躬思レ過、癸卯雨、御レ殿復レ膳とある、〔四〕親巡　「史記秦始皇紀」に、刻二石泰山一、遂士と爲り、四朝に累仕、五十餘年、年九十二に至りて卒す、〔五〕行草　「法書苑」に、晉世以來、工レ書者、多以二行書一名、稱レ眞者、謂二之眞行一、帶レ草者、謂二之行草一とある、〔六〕嵩洛　嵩山と洛水、〔七〕黃髮　前に辨ぜり、〔八〕龍門八節灘　洛陽縣に在り、唐の白樂天が致仕後、香山の石樓に龍門八節灘を繫ち、以て游賞の地と爲したのである、

賀雨詩成即諫書。

とある、【六】 聖君　君主を曰ふ、【七】 元和老　白樂天が元稹に與ふる書に、閑僕賀雨詩、衆口籍籍、以爲非宜と、【八】 諫書　「後王式傳」に、臣以三百五篇諫、是以無諫書とある、

【詩意】 慵喜の雨が下るや、千里の黄流渾渾として何處か何處であるか分らなくなる、年來赤地である土地が青州徐州の境まで通到したとか思はれる、遙に聞く衆人が十行の詔書を謹誦することを、人民が詔書を謹誦するは六尺の鳳輿に乘つて親巡し玉ふと同じことである、至精一貫する語は一言にても天も共に滿足する、天が滿足した結果雲は興りて雨は降り嶽にも瀆にも萬靈が趨る、君主に忠愛なる元和の古老に似て居る者は誰であるや、賀雨の詩成るは詩そのままが諫書である、

【餘論】 紀曉嵐は評して曰く、亦是應酬詩、而結語自有二斤兩一と、余案するに前後二聯共に數字を以て對を取る、坡公を以て宗とする人には法として取つてよい、坡公を宗とせざる人から論ずれば、工なる詩とは言へないである、

章質夫寄惠崔徽眞

玉釵半脱雲垂耳。
亭亭芙蓉在秋水。

章質夫、崔徽が眞を寄惠せらる

【字解】 【一】 玉釵　「洞冥記」に、元鼎元年、起招仙閣、有一神女、留一玉釵、以與帝、帝以賜趙倢伃、至昭帝元鳳中、宮人猶見此釵、黄潤欲碎之、明日視釵匣、唯見白燕、直飛升天、後宮人、學作此釵、因名玉燕釵、【二】 芙蓉　「西京雜記」に、文君臉際、常若芙蓉、とある、李白の詩に、清水出芙蓉、とある、【三】 薄命　唐婁欽中、以興元幕、使河中、與微相從者累月、欽中使羅微、不能從、情懷愁抑、後數月、東川幕、白知退、將自河中歸、微乃託人寫眞、因捧書謂知退曰、爲妾謂崔徽一旦、不及卷中人、微且爲郎死矣、明日遂疾發狂、元稹爲作崔徽歌、以敍其事、【四】 水邊　杜甫が解語花、【五】 何處　前に出ぜる遇李詩にて舞

當時薄命一酸辛。
千古華堂奉君子。
水邊何處無麗人。
近前試看丞相嗔。
不如丹青不解語。
世間言語原非眞。
知君被惱更愁絶。
卷贈老夫驚老拙。
爲君援筆賦梅花。
未害廣平心似鐵。

當時薄命一酸辛、
千古華堂君子に奉ぜらる、
水邊何の處にか麗人無からん、
近前試みに看る丞相が嗔るを、
如かず丹青語を解せざるに、
世間の言語は原眞にあらず、
知る君が惱ませれ更に愁絶するを、
卷いて老夫に贈り老拙を驚かす、
君が爲に筆を援つて梅花を賦す、
未だ害せず廣平が心鐵に似たるを、

人行と題する詩に、長安水邊多麗人とある、【四】 丞相嗔　杜甫の詩に、憐莫近前丞相嗔、【六】 不解語　「天寶遺事」に、太液池、有千葉白蓮、數枝盛開、帝與貴戚宴賞、帝指貴妃、示左右曰、何如我解語花とある、【七】 賦梅花　前に出ぜる遇李詩にて舞ぜり、

【題義】 章質夫が崔徽と稱せる女人の圖を寄惠せられたるを謝して作れる詩である、

【詩意】 玉釵は頭髮より半は脱げて、雲髮が殆んど耳に垂れんとする狀である、崔徽の容姿は亭亭た

309
65

る芙蓉が秋水を出るが如きである、生前の薄命は酸辛に過ぎざるも、死後は華堂に其の眞を挂けられて君子に奉せらるる幸福がある、水邊は何の處でも麗人が多く行く、但し皆主人を有する麗人であるから手を出せば丞相に嗔らるる、それよりは畫中に在つて沈默して居る美人が可い、且つ世間の言語は多くは虛欺にて眞言ではない、君も其の言の虛欺に惱されたり愁絶せられたりする、今は此の畫卷を老夫に贈られて老拙を驚かされたるが、老夫が報ゆるものは他に無い、筆を援つて唯梅花賦を作るのみである、廣平が梅花を賦して其の鐵石の心腸を少しも紊さなかつたのである、

【餘論】紀曰く、小題以二輕淺一、還二之最合一大做一、便不レ合レ格と、余案ずるに小題大做は小家の爲す所、大家は決して小題大做を爲さざるのである、此の詩を以て小題大做と爲すは當らずと思はる、

終